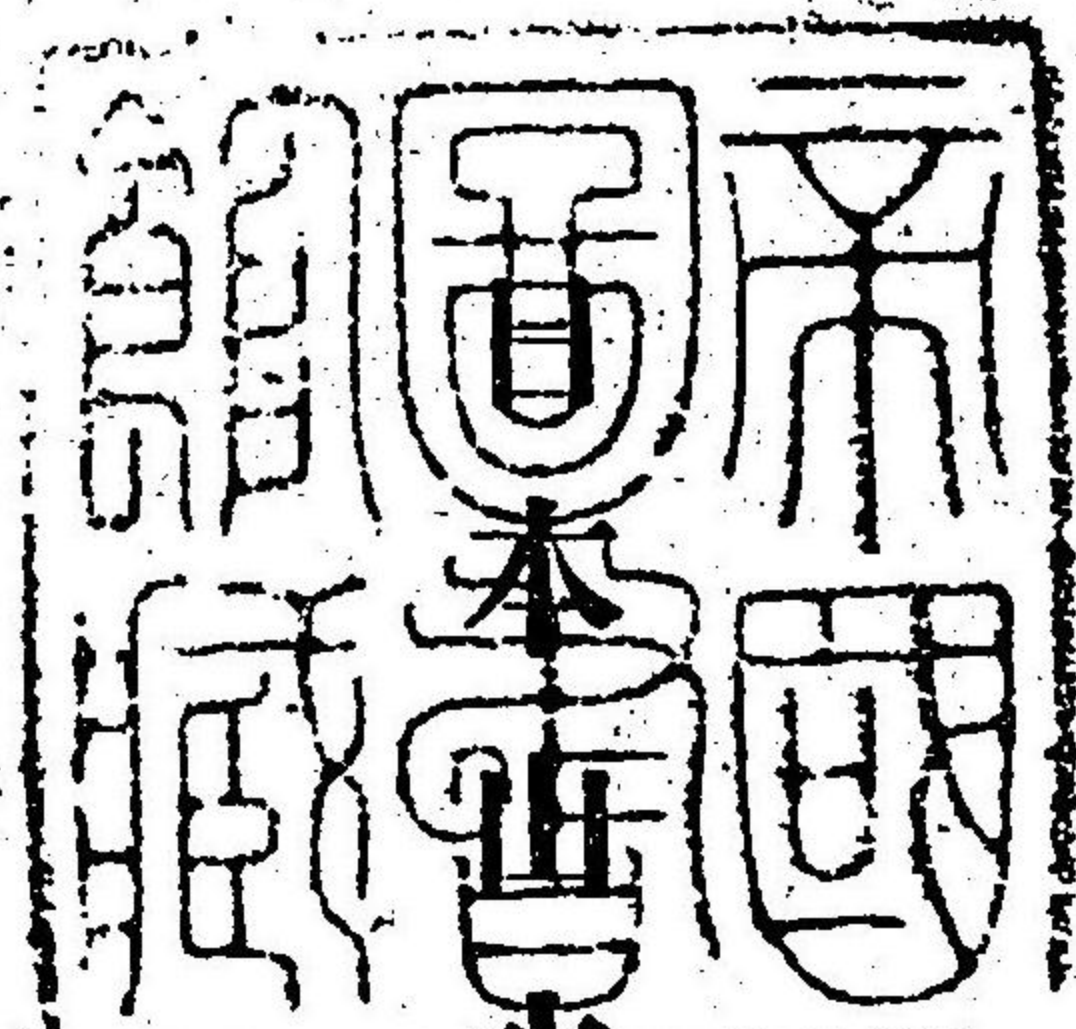


斗 2T-11

99-106



論

小島水著





恩師美澤進先生に献す



緒言

日本山水論は、余が數年來の宿構にして、今その一部分の論稿を、世に問ふを得たるは、余の悦ぶところなり。

余は本篇に於て、主として日本山水の汎論、併せて余が山嶽谿谷を愛する理由、及び感情を述ぶることに努めたり、或は好むところに倣せる一家言として、斥けられむも、余は終始自然研究の闡域を、外に跨ぐこと一步ならざりしを信じて、竊に自ら慰むるなり、今本書の刊行に當り、友人武田久吉氏が植物標本を、高野鷹藏氏が、蝴蝶標本及び右に關する材料を、貸與せられたるを徳とす、二氏年齒少うして、きはめて篤學の士、居常余の二氏に負ふところ多し、初め本書に高山生の植物、及び同蝶類圖を加へむとするに當り、時は四月にして生本を獲るに由なく、特に高山植物の如きは、本邦に之



を記する書絶えて無く、憑據するところを知らざりしを以て、佛人シユローテル氏著 Alpen Flora 載するところの彩畫を粉本とし、アルプス山及び本邦高山に同生する植物九種を任意に選び、畫家芳野尙方氏を煩らはして、之を寫了したれど、本邦産の物と、彼とは往々小異あるを以て、更に武田氏所藏の標本を乞ひ得て、訂正するところありたれど、素と腊葉より生色の眞を模す能はず、故にもし畫に到らざるところあらば、そは全く余が不用意の罪のみ、且尙方氏が數ば苦心の畫稿を改作し、余の辛勞一半を煩たれたるを謝す。卷中收むるところの畫版中、甲斐白峰、上野白根火山の二圖は『日本アルプス』著者ウオルター、ウエストン氏の余に贈られたるものにして、高妻山、白馬連山、及び同大雪田の三圖は、長野中學校教授、志村寛氏の親しく撮影せられたる傑品、木版圖は余のおぼつかない

きスケッチに加へて、武田久吉氏、山崎紫紅氏の寫生圖を、畫家の改描したるものに係はる、余は以上の諸氏より厚意の賜を佩ひたるを榮とし、特に掲げて茲に感謝を表す。

三十八年六月

横濱山王臺にて 著 者 識



目次

第一章 山水の意義

山水の語——支那と日本の海岸線——泰山——山水畫——蜀の棧道——支那博物學の發達——英國と日本の比較——日本の地勢——氣候及び潮流——日本は全亞細亞の縮圖——山と水との關係

從一頁 至九頁

第二章 日本山嶽美論

日本の平地——山は釋かざる謎——榛の木——沖積及洪積の新期層——山の使命——山中哲學

從三十九頁 至三十九頁

(一) 山の繪畫的内容——線畫と山——龍品の文天品の文——山色の變幻光澤の純粹——海の壯觀——波山と波谷

(二) 山の詩的生殖——山中の萬有——動物——裾野の牧畜——山岳に多き樹木——自由の森林

(三) 山の科學的結合——氣象——谷風山風——伐木と空氣の流通——河口湖の排水——河嶺と山嶺

(四) 山の歴史的秘庫——自餘名稱の山——陸中の島嶼——伊豆半島の一部及び甲府——八丈島と琉球——五箇村——越中の五箇村——俗話

(五) 山の時間並空間的統計——半熱帶地より寒帶區域——露山——蘆澤と占守島——動植物分布の狀態——天然を縮寫したる始末史——一日の四季——宇宙を具體的に短縮したる統計

(六) 山と人文の交渉——山中人士の氣象——家屋——衣服——宗教と山——天、山、人の三階級——山と佛敎の關係——神道と佛敎——支那希臘及羅馬の美術——建築術——飛騨内匠——番匠——山



### 第三章 登山論

地に柔の寄附——鳥居峠——經濟的分水線——分類的小表

從四十八至七十八

山有何好看——飛鳥山——武威野的丘陵——赤城男林高原山——赤羽根蘆——三枚縷きの自然齋——標名妙  
義秩父群山——空間的及び時間的濶括の量

(一) 山の引力——二極の連鎖——高きもの性質——海の暗紫色濃藍色——龍宮——雲の峰——霧の海  
——飛騨千光寺——最も天に近し——竹取物語——神通川の淨水——阿蘇山——紫原嶺を納る——色にあらずして靈

(二) 登山は青年壯年の時代に限らる——青年の運動遊戲——春秋の魯國——スメンシアと米國人——自然の王を山となす

(三) 登山は體力を養ふ——筋骨鍛練に頼強——板東武士——登山難

(四) 登山は志を大にす——須磨明石——一切人天の王——高青邱——山は人間を大にす

(五) 登山は冒險の氣象を養ふ——アルプス山——メルホルツ氏——フランシス、ブーグラス卿——登山のマウンテン、エウエレスト——人間の到達し得べき最終點——高山の氣壓——本邦人の探險紀行

(六) 登山は耐忍力を養ふ——意志の強固——アルプス山脈中の最高點モン、ブラン——富士帯と中央——關谷清景氏——好奇心——山を對境として冒險の氣象感觸

(七) 登山は人の思慮を周密にす——登山問題——官林巡り——高山跋涉の實習科的講話——咒文——大山系——一等三角測量標——山道と世路——以上の智識

(八) 登山は自然と親しむ——自然に親しむの途——山頂の「大宇臥」——攀断して帝王以上——ラスキ

ノの山銘——熱情の花——山膚にして染めらるべき色——自然は一大彫刻家——慰藉を與ふ

(九) 登山は同心協力を教ふ——凡百の自然現象——高層氣象——氣温の變化——高山植物の發生分布——二羽の蝶——多方面多趣味の問題

(十) 登山は學術研究に資す——山教の大衆——山と同化する——長烟一空大山萬丈——マイロンの悲歌——大虛可包括——人靈の清醒

(十一) 登山は長壽の關係——百三十三度登山碑——大先達——剛力及び中語——仙人——山男——自然の競争——神代杉——テニメンの詩——不盡の根——飛騨人の年齢表——飛騨上賢村——胃弱と腸病の牙齦なる都市

(十二) 登山は天然人事の本末的關係を知る——天火を以て大地を鋸る——鎮國第一山——千山の系統的主腦——天然人事統一碑——理想的巨人——感謝

(十三) 登山と文章——天開書閣即江山——巨人の歴史——大自然兒——アルプス協會——登山記事——先驅の名——富士驛——獨逸文部大臣の登山——野中重臣の富士山頂觀測臺——山に就きての注視——アルプス山中の鐵道——富士の角行者——御嶽の覺明行者——ラスキンの山の讚美歌

### 第四章 日本山系概論

從七十九至百六十七

日本の二大山系——樺太山系——本土の地體骨子——蝦夷山脈——北上山脈——阿武隈山脈——崑崙山系——霧山脈の標本——北來の火山——千島火山脈——那須火山脈——島海火山脈——南來の火山——阿蘇



火山脈——白山火山脈——霧島火山脈——不二帶——赤石山脈——木曾山脈——飛騨山脈  
 (其一)千島及北海道の山嶽——日本のアイヌランド——ラウス岳——チヤチヤノボリ——モコロ  
 山——チルプ山——シヤシヨウシ山——ヘチラムフ山——シブシシリ山——シトカフ山——アトサ山——ベ  
 レタラベツ山——シヤコタン山——ノトロ山——摺鉢山——マウント、フス——アシリマツキ——松村山  
 ——ヌタフカウシハ山——雄阿寒雌阿寒——硫黄山——マシウ山——ラウシ山——チアタテンケ——ボロシ  
 リ山——蕨山——駒ヶ嶽——マクカリアブリ——イツウノボリ——ウス岳——檜前山——蕨庭山——北海道  
 登山の注意——原人時代

アイヌ語のヌブリ

本邦殊に北海道の深山幽谷を跋渉したる奇僧圓空

(其二)東北及關東の山嶽——早池峰——五葉山——矢大臣山——赤井岳——八溝山——筑波山  
 ——八甲田山——十和田湖——岩手山——駒ヶ岳——藏王嶽——吾妻山——磐梯山——那須火山——高原火  
 山——日光火山——赤城山——榛名山——岩木山——鳥海山——月山——羽黒山——湯殿山——最上川断層  
 線——高尾山——三國嶽——大菩薩嶽——甲武信岳——金峰山  
 (其三)中央大山系——駿河の國名——甲斐の國名——飛騨の國名——信濃の國名——テエナ氏の説  
 ——雲級圖——日本の高山深谿——武蔵野——海とは何なりや——不二山の感化——高山と深山——一萬尺  
 以上の名山——日本のシエラ、チバダ——日本山岳統帥の天綬を帯べる不二山——丹澤山脈——御殿天守閣  
 山脈——天城山——箱根群山——八ヶ岳——立科山——淺間山——赤石山——木曾駒ヶ岳——御嶽——乗鞍  
 嶽——鈴ヶ嶽——穂高山——針木峠——白馬ヶ嶽——大蓮華山——立山——戸隠山——妙高山——黒姫山

甲斐山嶽論  
 風流文人傳

飯綱山——白山——雪線と氷河——中樞山脈の産物  
 (其四)近畿中國の山嶽——伊吹山——鈴鹿山脈——笠置山脈——葛城山脈——山姥——近畿の火山  
 ——三上山——愛宕山——比良比叡——高野山——四條派山水嶽——情の山——三瓶山——大山  
 (其五)四國九州の山嶽——四國の二山系——屋久島の八重嶽——市房山——開聞岳——櫻島——霧  
 島山——温泉岳——阿蘇山——彦山——鶴見岳——由布岳  
 (其六)日本の名山——日本の士人と山岳——山嶽崇拜——代表的名山——太古の如き奇怪貌の深山  
 幽谷——日本孤獨の危峰荒谷——針木峠と白山裏山越え

第五章 登山準備論

準備如何——抄録——宿家の描ける山——探險記の價値——旅行術  
 (一)登山の時季——夏秋の比較——十月中の登山——十二月より四月に至る間の山——朝夕  
 (二)服装——和服——洋服——親衣——毛布——夜具——帽子——笠——杖——草鞋——長靴  
 手袋——防水布製の雨衣  
 (三)携帶品——手帖——鉛筆——地圖——洋傘——手拭——石鹼——短銃——短刀——細引——油紙——  
 天幕——柵——鍋——スツク製の大囊——修學旅行者に必要品  
 (四)天幕

從百六十八  
 至二百二



(五)山中の假家——木皮——草葉——砂土——茅——竹藪

(六)飲料水——氷雪——雨水——森林——苔蘚——落葉——溪河の水——餅

(七)食料——雜誌——フランデー——酒——果物——茶

(八)天候の注意——雲——風

(九)山頂の注意——呼吸——脈搏——脚血——山頂天然の諸現象

(十)登山雜記——原野——懸崖絶壁——流水——温泉——松火——煙——畑——集塊礫岩の山嶽——山頂の見取圖——傾斜測量——岩石採集——植物採集——登山者の徳義

### 第六章 山と紫色

從二百三  
至二百十二

紫の筑波山——西に不二の根北には筑波——江戸人士と筑波——少年平原——筑波紫——姉妹の二原色——いかなる山を以て最も紫色多きとなすか——山陽の奇蹟——藤村子の木曾路日記——花崗岩と紫色の干係——木曾駒ヶ嶽の天色——ラスキンの言——花崗岩山の紫色を呈する理由——紫の活くるなり

### 第七章 裾野及湖沼

從二百十三  
至二百廿六

山岳の高「大」及び「廣」裾野の成分——本邦中部の裾野——本邦東北の裾野——裾野に色衣せる草——八ヶ嶽裾野の畫的光景——本邦湖沼の美——霞ヶ浦印幡沼手賀沼——琵琶湖——共進湖——入郡沼三方湖河北沼——池田池——三州篠島——猪苗代湖——十和田湖——摩周湖——洞爺湖——本邦火山湖の成因——千蛇ヶ池——大池

### 湖心記

## 第八章 日本の高山深谷を跋渉したる外國人

### 及び其紀行

從二百二十七  
至二百五十一

『日本のアルプス』——ウォルター、ウエストン——同夫人——山岳對宗教の小話——題名覆紙及び寫眞の解説——中央大山系第一回登山旅行——第二回登山旅行——第三回登山旅行——第四回登山旅行——野呂川紀行——探險の二字——六星霜の登山——日本アルプスと歐羅巴アルプスの類似——春季と冬季の富士登山——日本アルプスの叙景文字——地名由來の解釋——日本山岳の恩人

### 第九章 森林美論

從二百五十二  
至二百五十七

海國と浦島太郎——三保松原の神話——希臘古代の森林に對する神話——詩人ホーマアの言——三十三間堂榎木由來——神木——神殿は大なる森林の中に在り——森林に對する宗教及び美——日本人と樹木——森林保護——吳の地名——處女の森——日本森林の分布

### 第十章 日本山嶽の生物

從二百五十八  
至二百七十八

日本の地形地勢と生物——東京平原の昆蟲——垂直的分布——兩日本の地ニ線——椋と樞——天の川の句——エンシロ蝶——岐阜蝶——ミヤマチツ子——キアゲハ——岩魚——山鮭——鱒——鯉魚——山椒魚——黒魚——深山黒魚——雷鳥——雷鳥の歌——佛法僧鳥——ヤマザクラ——芳野サクラ——紅葉——鳴蟲——深紅色緋朱色橙黄色淡黄色のモミジ——確氷の紅葉——高山植物——御花畑——從北海道至本州中央植物分布——千島及北海道の植物——同類分布圖——彩色分布圖——高山花の鮮美——高山光力の純粹——高山



### 第十一章 谿谷の美

從二百七十九  
至二百九十六

植物の自然——水田紀の植物——淨麗の水肌仙媛——高山植物栽培——アルプス地方の高山植物保護——白  
 山と伊吹山——日光白馬岳戸隠山及び八ヶ嶽の植物——針葉樹の美——岩木山の偃松——針木峠——松川  
 山と谿谷の干係——外延的と内包的——ヴァルレイの字義——鎌倉地方の「ヤツ」——河谷——水美中の王  
 ——本邦の縦谷——北行南向頭々枕の諸谿谷——風流谿多情谷——上流の特相——Z字形とS字形——上  
 流中流の區別法——上流の美觀は石に在り——水の百相——飛騨大自川谿谷の記——水の曲折變化する木然  
 相——森林は上流の慈母——御嶽川大井川常願寺川——地球外部の彫刻——中流の特相——聚合力の大  
 ——官道如髮沿長河——富士川と木曾川の中流——絶壁の浸蝕——引渡橋——籠の渡し——暗溪流の合一  
 ——下流——嵯峨峽及び淀川——無山國無川國

### 第十二章 谿谷の四季

從二百九十七  
至三百一十

谿谷の村落——アルプス山中の最高村落——信濃梓川谿谷——山谷の霧——無韻の詩「山上の家」

### 第十三章 本曾の谿谷

從三百一十一  
至三百二十五

桶南谿の山岳論——木曾谿概説——信濃と美濃の國境——信州交通街道の標高——高山の形態及び色彩——  
 信濃に干係したる謠曲——木曾川の話——湧泉類——信州より祖發する川——木曾川の延長及び風景——木  
 曾の古道——今の木曾道——「かけはし」——信飛兩山水國の比較論——木曾路名所圖繪——木曾溪流の水色

### 第十四章 雜記

從三百二十六  
至三百五十七

(一)不二山 (二)愛鷹山 (三)不二の愈景 (四)美濃惠那山 (五)豊男 (六)俗諺 (七)北日本  
 の代表的植物 (八)芭蕉と東北 (九)ホキといふ地名 (十)暮春雜筆 (十一)春の花秋の  
 花 (十二)四季の花木 (十三)余の好める色彩 (十四)落葉の趣味



圖版目次

彩色石版

第一版 風景畫

三宅克己筆

第二版 山嶽地にて遊たる蝴蝶

第三版 高山植物

コロタイプ版

第四版 不二山

第五版 甲斐白峰

寫眞版

第七版 相模箱根山早川溪流

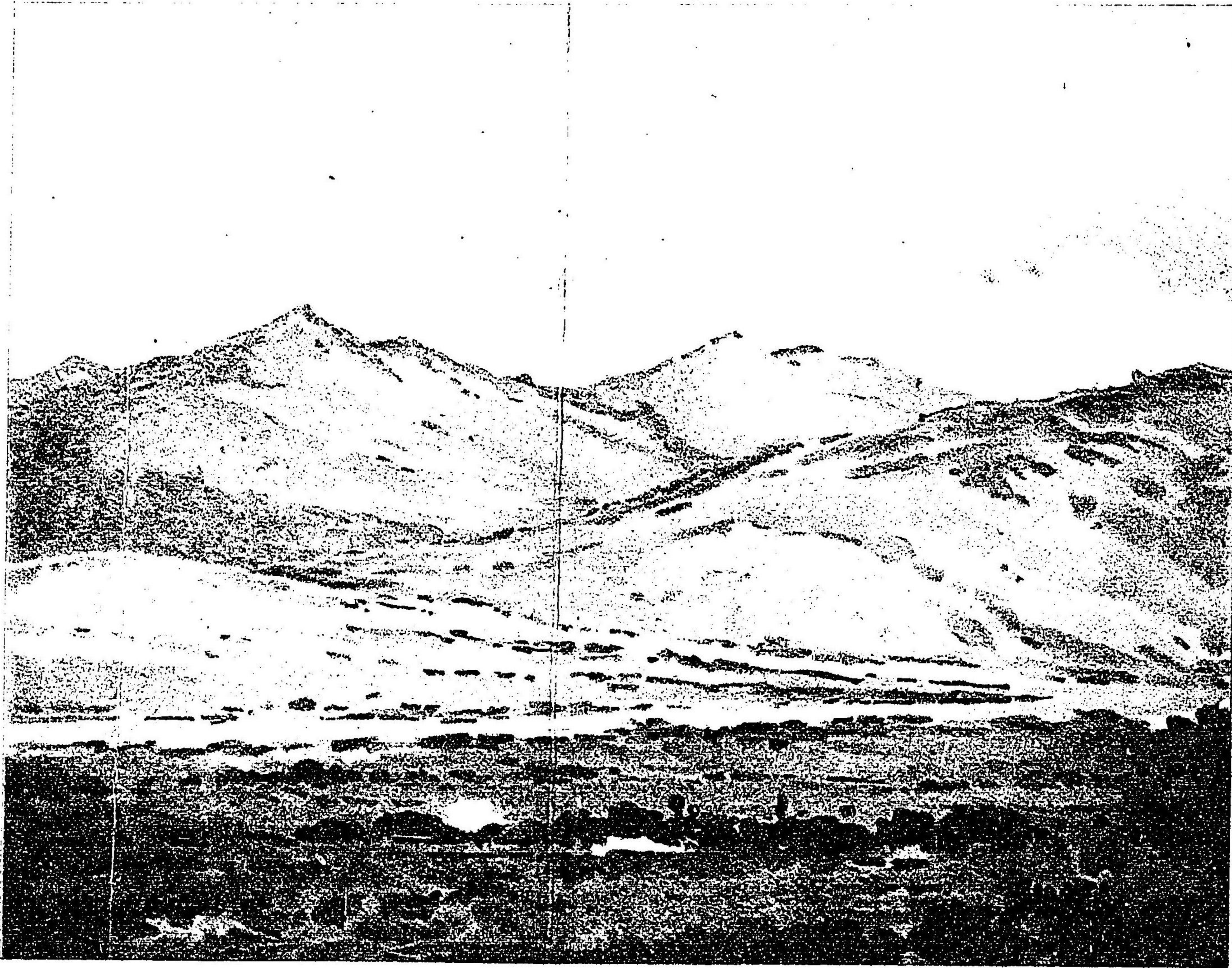
第七版 上州白根山噴火孔

第八版 戸隠裏山の最高點高妻山

第九版 松川溪谷を隔て越後大連華山及信濃白馬岳の列嶂を望む

圖 版 目 次





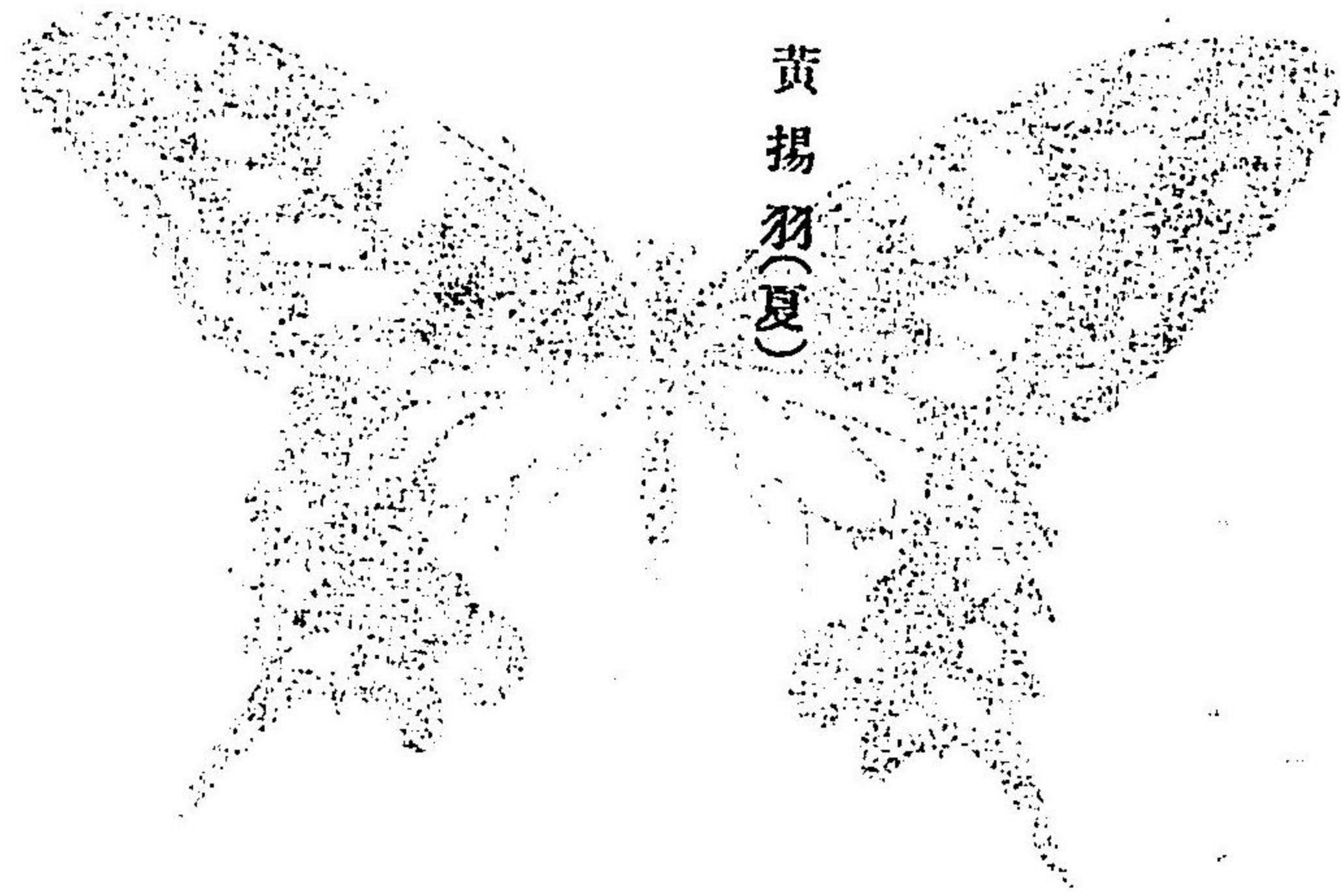
信州浅間裾野より千曲川を廻りて和田峠を望む

木 版

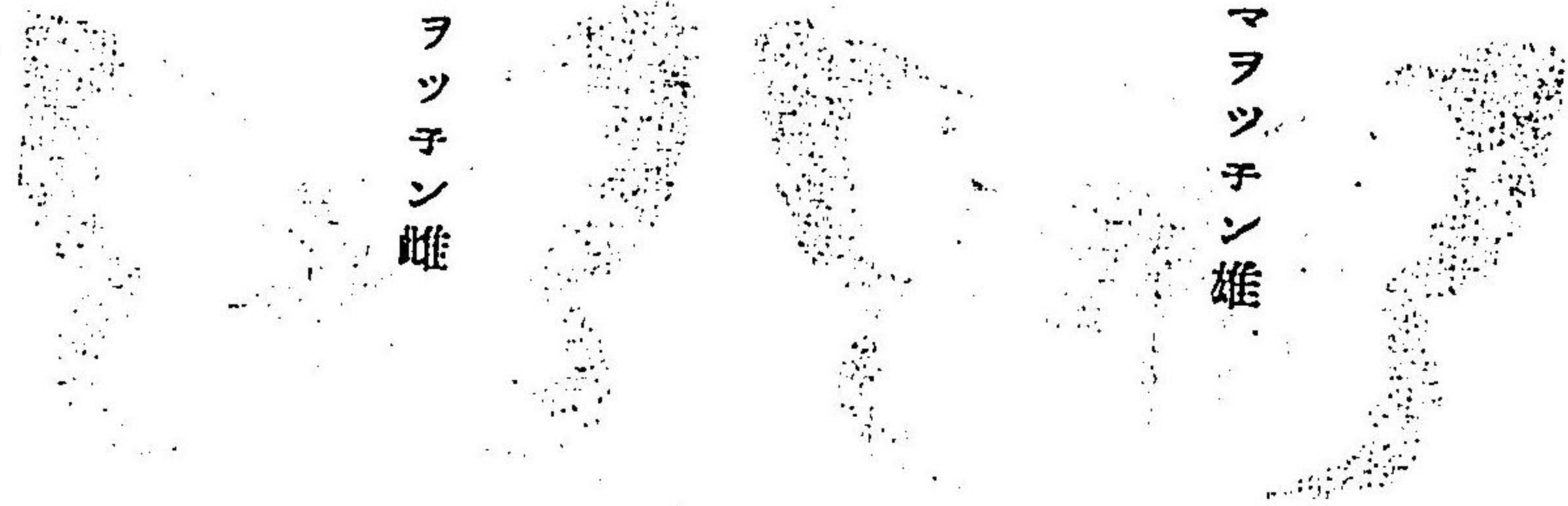
- 第十版 信州白馬嶽腹の大雪山
- 第十一版 日本アルプス著者の手翰
- 第一圖 信州伊那より赤石山系を望む
- 第二圖 常念ヶ岳より日本中央大山系の連綿縦走せるを望む
- 第三圖 越中上瀧附近より立山連山の重疊起伏せるを望む
- 第四圖 飯綱山頂より黒姫山を隔て、妙高山を望む
- 第五圖 八ヶ岳東方裾野より八ヶ岳群山を望む
- 第六圖 戸隠山五地蔵より西に白馬連山を望む
- 第七圖 戸隠五地蔵より八ヶ嶽を隔て、富士を望む

35



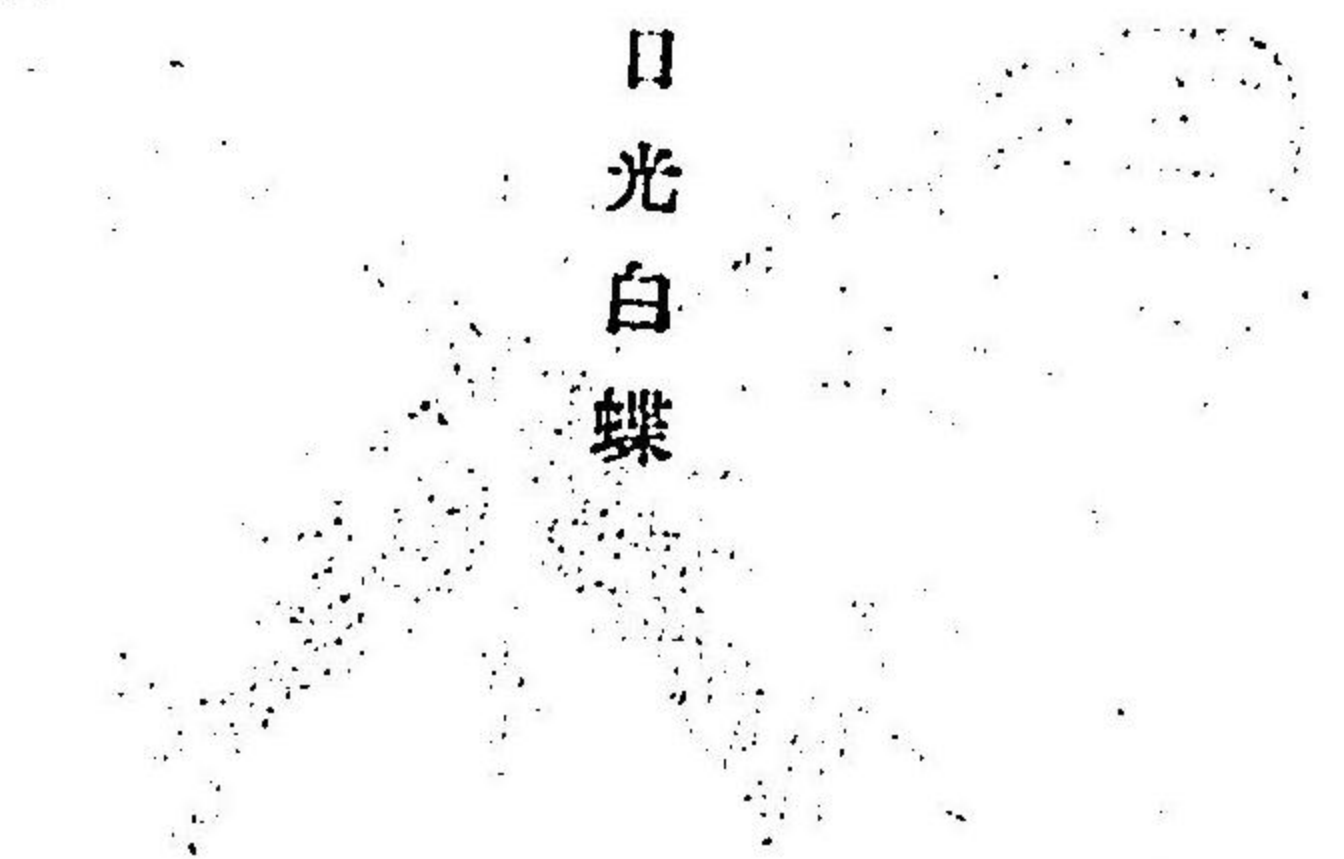


黄揚羽(夏)



ミヤマフツチン雌

ミヤマフツチン雄



日光白蝶

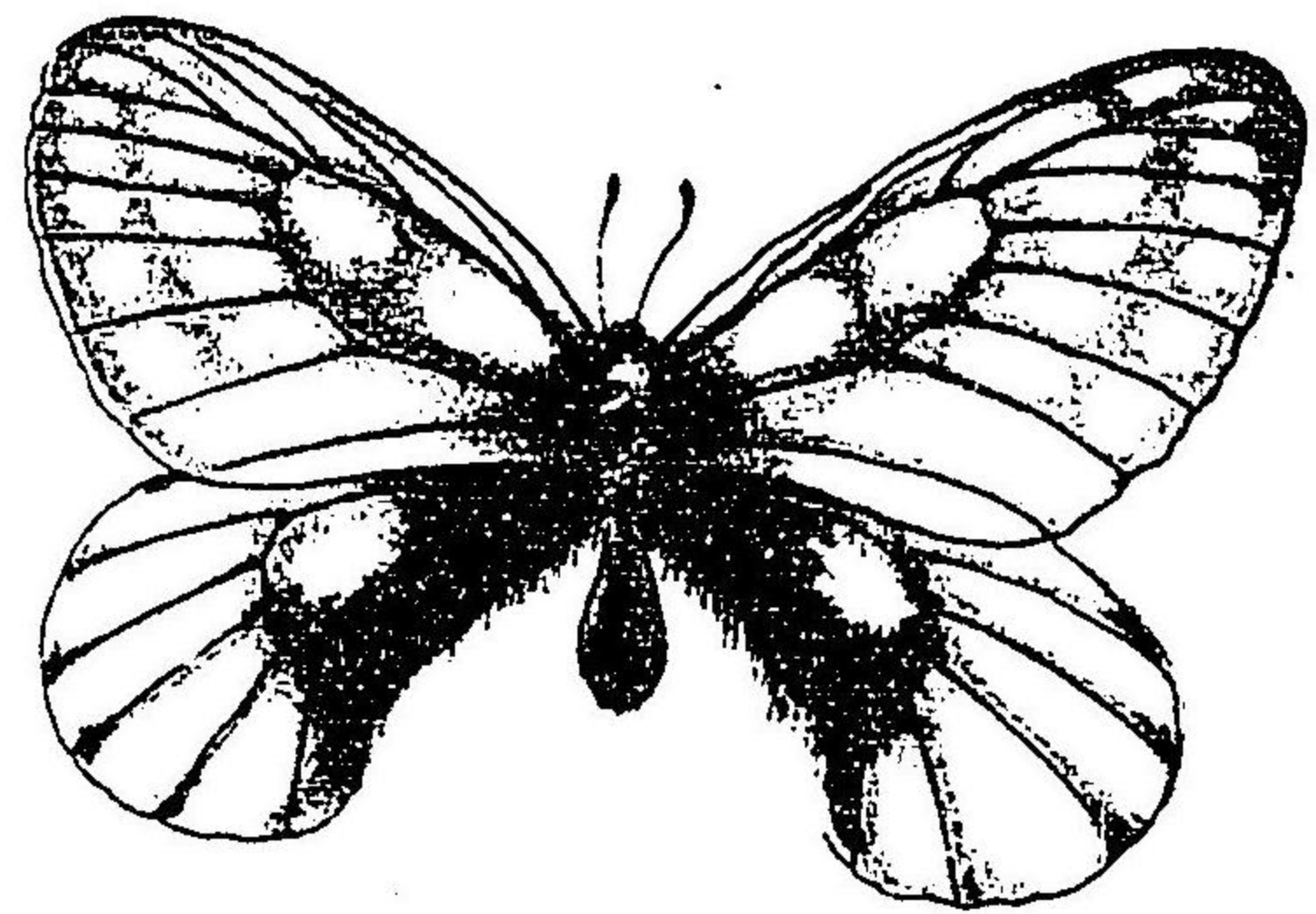
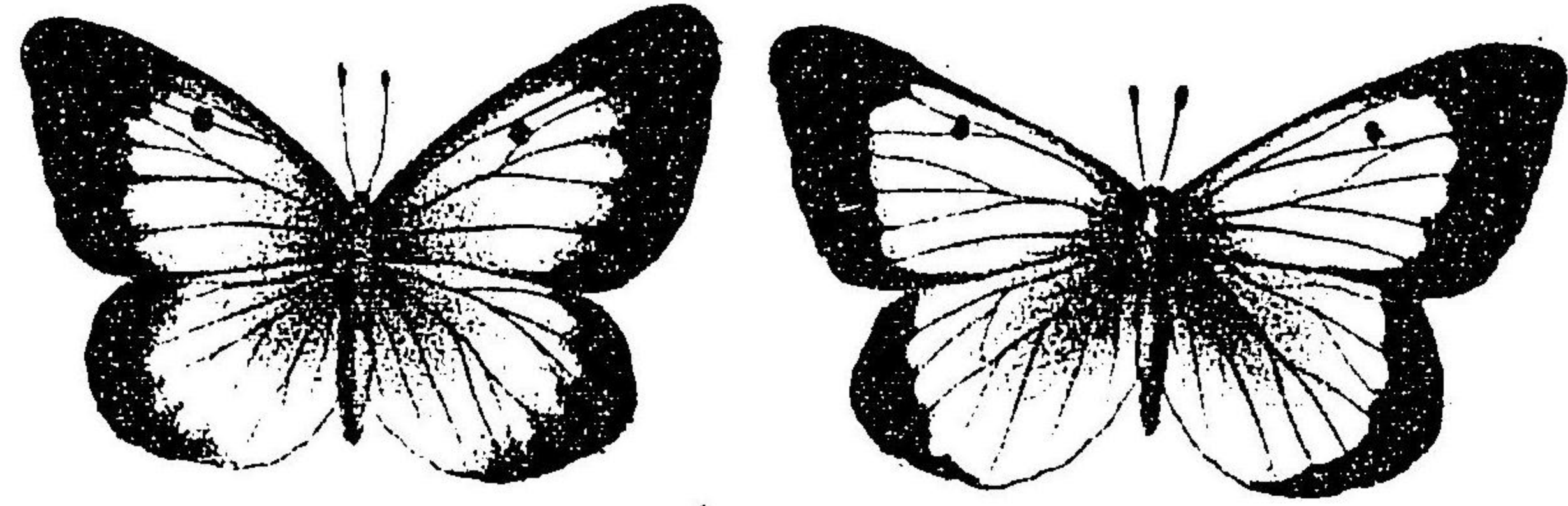
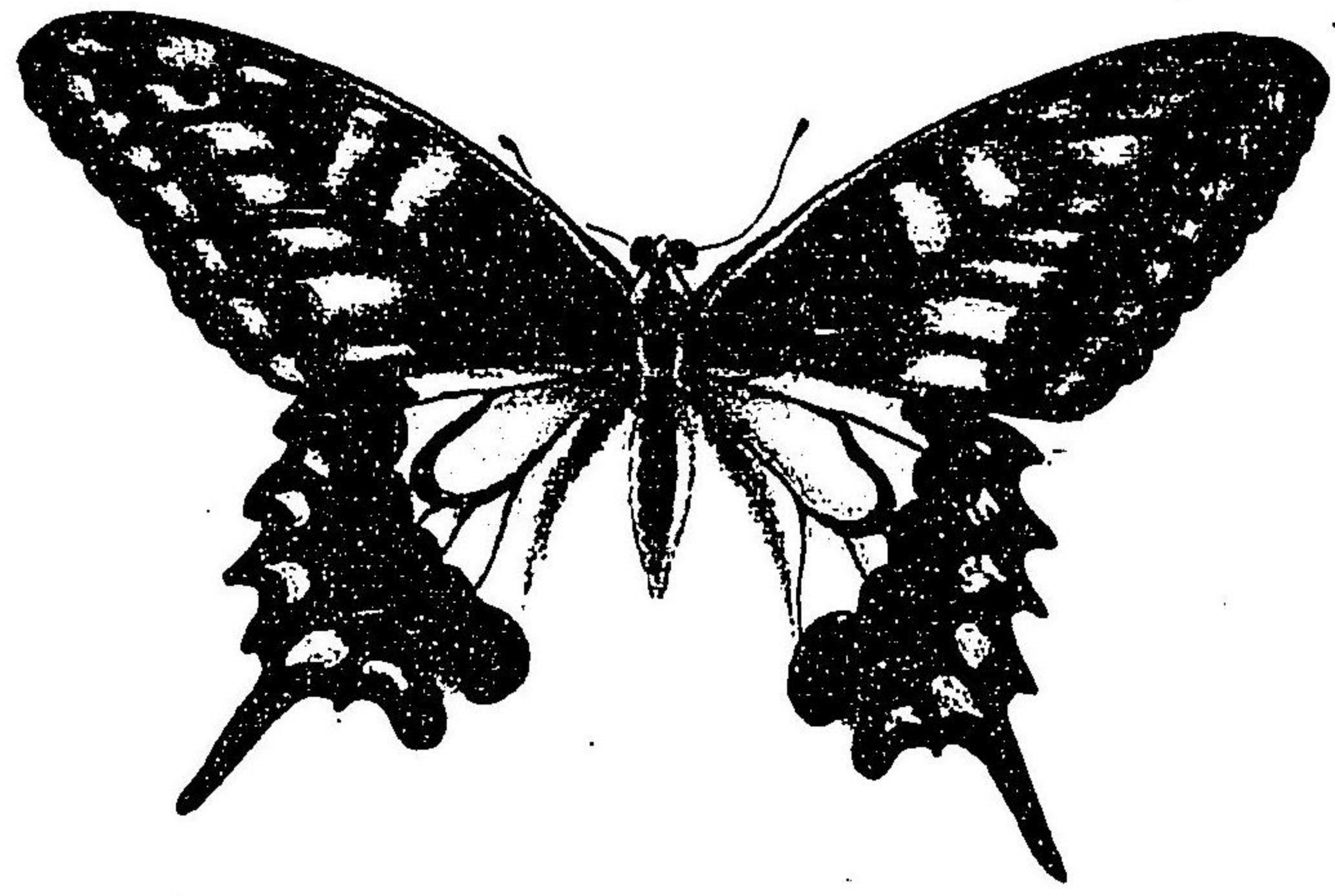


黃 蝶 絲 ( 友 )

三 子 丁 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙

日 次 自 難

三 子 丁 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙





蟲取藟

林娜草

黄花ノ駒ノ爪

白山イチヂ

コケモ

雪割草

長之助草

千島アマナ

岩高蘭



翠 三 翠 高 山 山 山

黄 花 入 地 入 爪

林 蕨 草

蕨 草

岩 隙 草

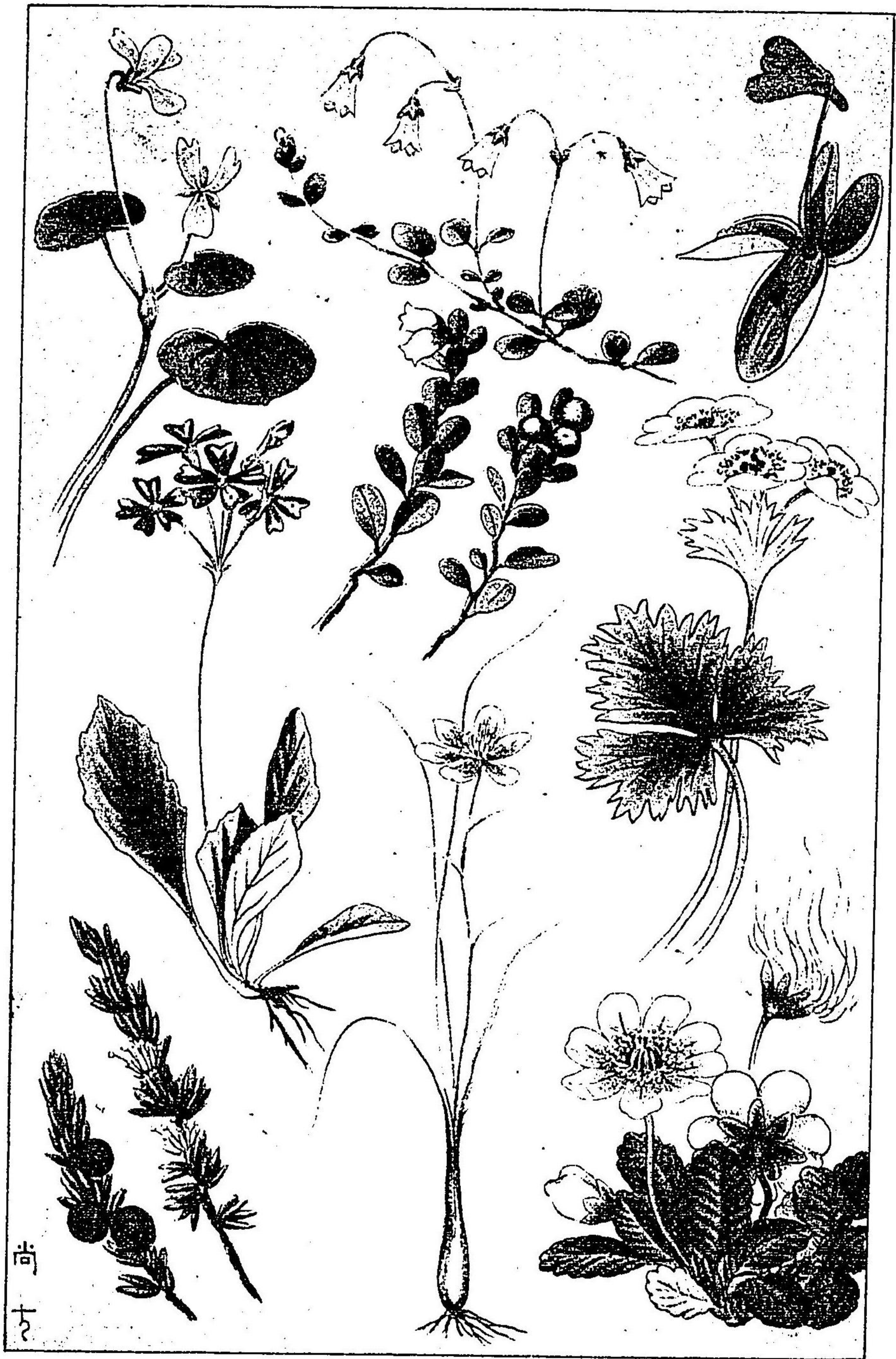
コ ク シ

千 歳 草

岩 高 草

白 山 草

野 山 草



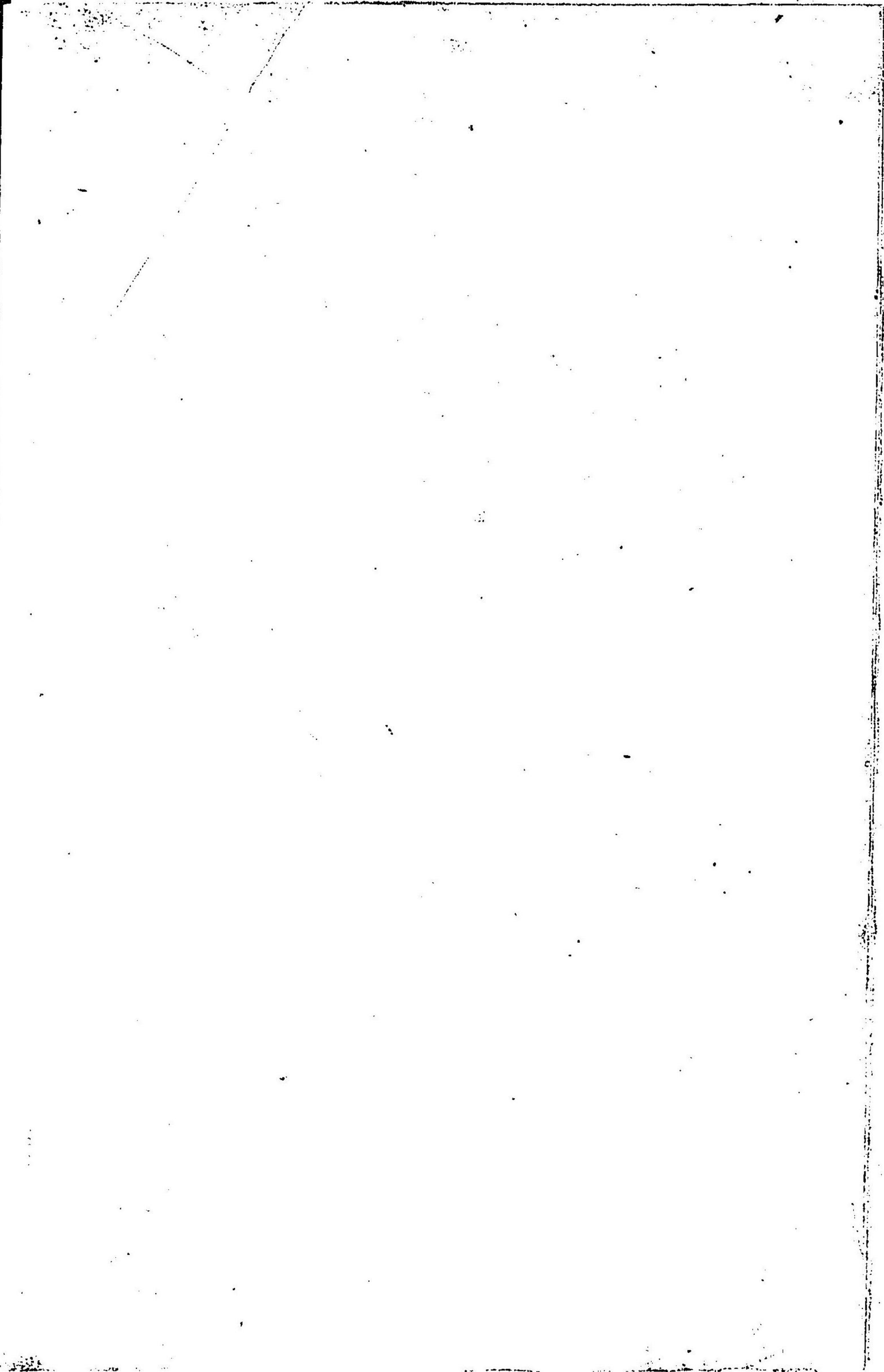
尚  
す



不 二 萬 年 以 上 活 々 たる の 唯 附 の



第 四 版





版 五 第



峰 白 斐 甲





流溪川早山根兩揆相





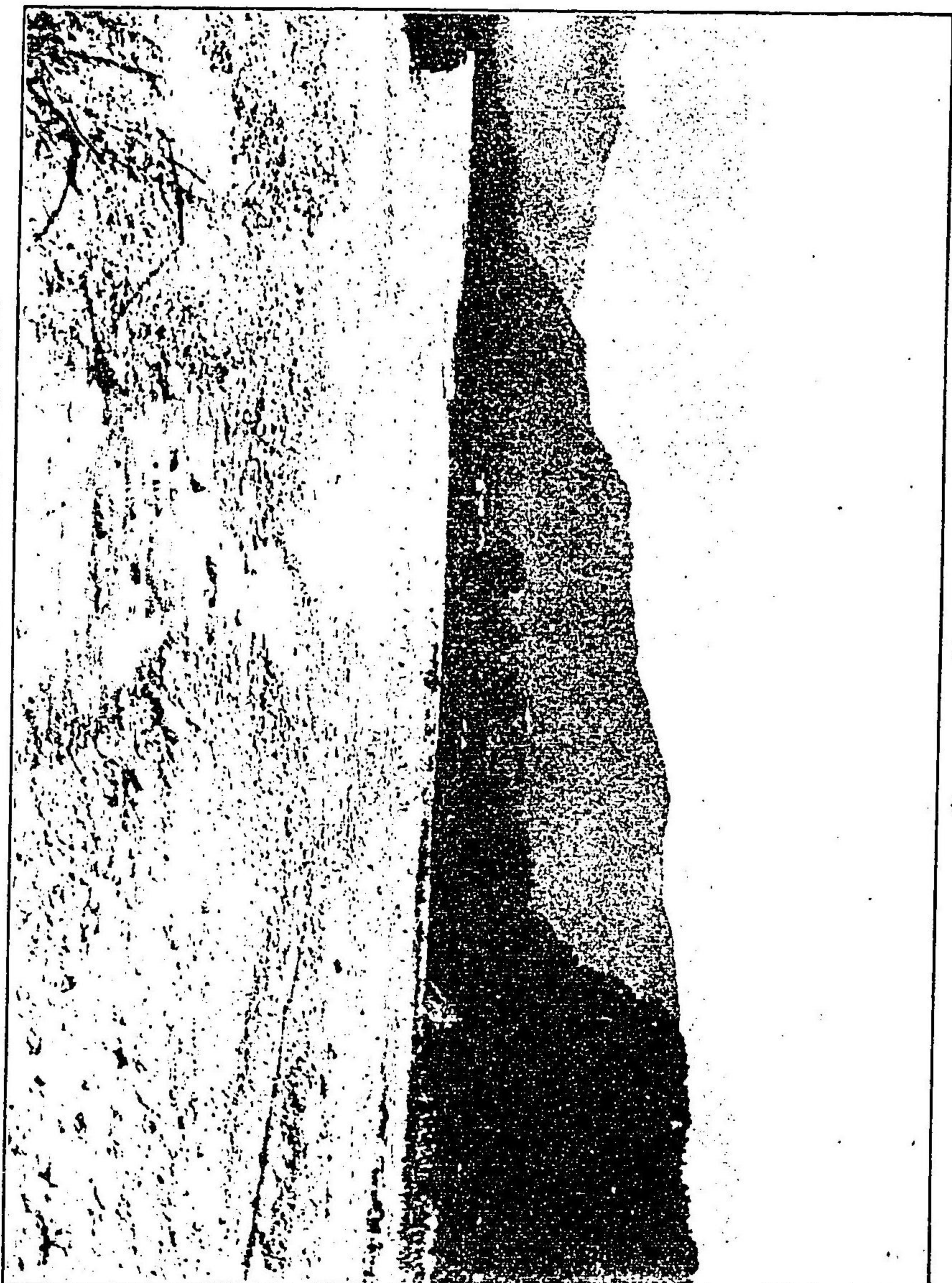
上州白根山噴火孔





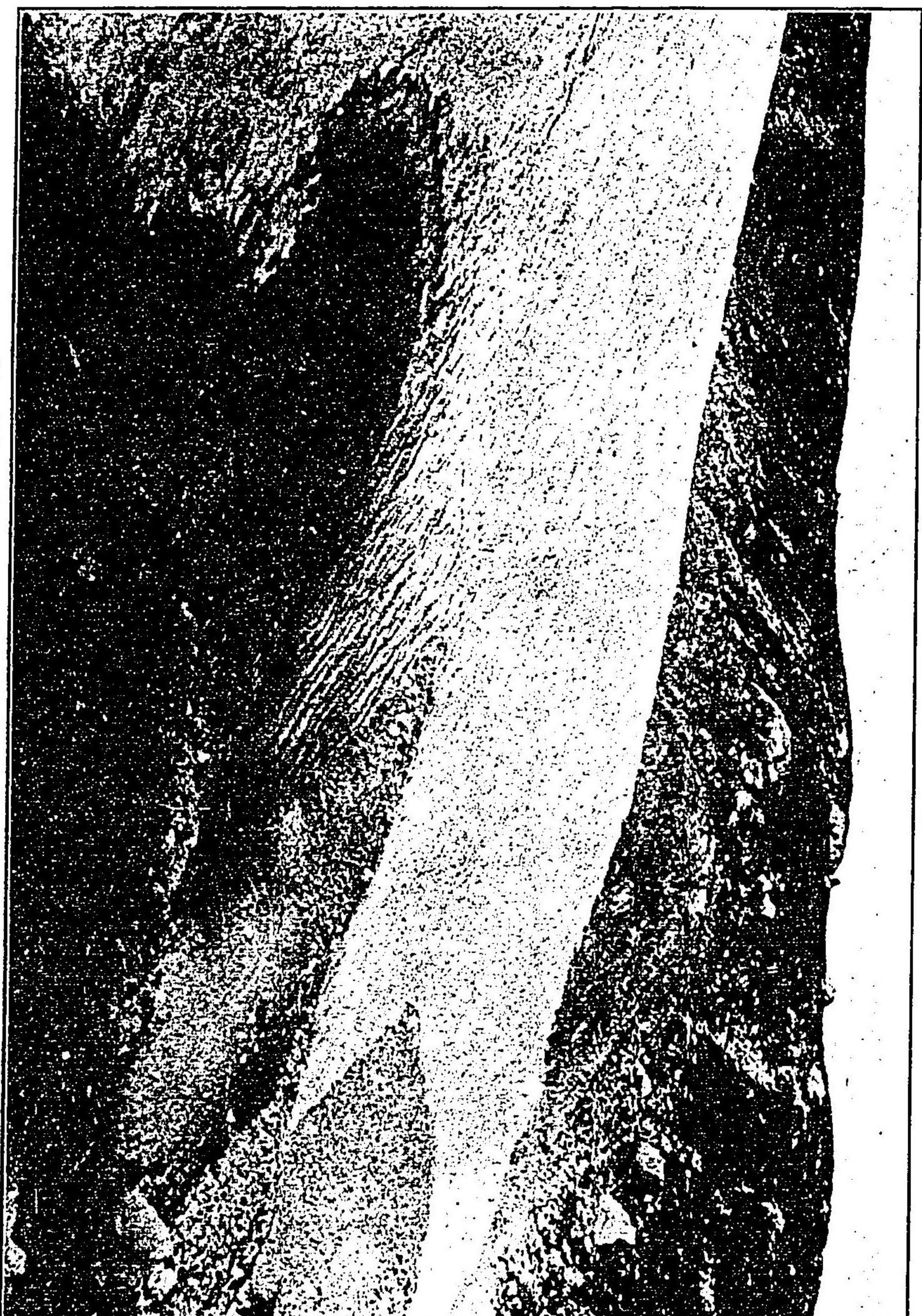
山 妻 高 點 高 嶺 の 山 妻 露 戸





お望本嶺列の(徳信)黒馬白(後越)華部大いて隔々谷溪川松





信州白馬嶽の大雪田



Thank you, again, very much, for  
your kind gift of those old manu-  
scripts & with a value very greatly.

When you come to see me next time  
I shall be glad to show you my new  
Kakemono painted by Ioki Bungai.

With kind regards to yourself  
I write,  
Yours very truly,  
Walter Weston

219 B Yamate cho

Yokohama

Oct. 5. 1904.

Dear Mr. Kojima

It was a great

pleasure to me to see you on Friday  
last & to have such an interesting  
talk with you about the manuscripts  
of Japan, & which you & I are both  
so fond.

I hope you will  
again bring me a visit soon, so that  
we may be able to compare notes, for  
I have some more photographs which  
you may be interested to see.

Meanwhile, may I ask you to  
do me the favour of accepting the enclosed  
which you may recognize as scenes  
of some of your recent mountain-viewing  
expeditions.



圖 版 解 説

第一版 風景 畫

三宅 克己 筆

これ三宅福伯が、特に本書のために大手筆を揮はれたるもの、淺間火山の裾野、南に延展して道分ヶ原となり、高原陵夷して南下するや、佐久平に接し、共に千曲川の銀帯を拖き、北に廣く南に狭き三角形の垣地を劃し、その南より西に亘り、和田峠元として蜿蜒折走するを仰ぐ、コバルトにニウトラルチントを混したる淡色を以て、全圖面を活躍し、荒涼豪壯の火山國を一幅に收む。

第二版 山嶽地にて獲たる蝴蝶

上段は「黄揚羽」蝶(キアゲハテウ)なり、全國に汎く分布せる普通種にして、山嶽發生のものにあらずと雖も飛行力強く、往々一萬尺以上の山嶽に見ることあり、春形夏形とあり、夏形のもの、翅文縷麗鮮美なるを以て、茲に之を採る(本文第十章「山嶽の生物」參照)

中段に二羽並べたるは「深山越年」蝶(ミヤマナツチン)にして右は雄、左は雌なり、この蝶、本邦には稀有の産にして、七月下旬僅に信州淺間山に見るのみ、アライヤア氏記すところに據れば、この蝶の分布はアイスランド、氷洲より、中央日本に及び、中央日本にては、海拔六千尺以上の高山地に棲む、同山「湯の平」疎鬆(ユノヘ)露爛せる火山の灰澤地に、普通に見れども、捕捉甚だ困難なり、然れども上下飛翔の間、この荒寒土より遠く下り去るを肯んぜざるもの如しと(同上參照)

下段は日光白蝶(ミツクワウシロテウ)にして、別名薄羽白蝶(ヤスマシロテウ)或は蝦夷白蝶(エゾシロテウ)と云ふ、全翅灰白色、透明にして、後翅の内縁は黒色を呈し、翅脈は黒し、本島、九州、及び四國



の山地に生ず、同じくフライヤア氏の記事に隨へば、山地の蝶にして、六七月の候に現はれ、その或種は、  
スモキイランツ 黒を潮し、斑點に變化あり、雌は往々下腹に角狀の袋を被むれども、未だ何の用を爲すかを  
知る能はずと(全上參照)

因に記す、フライヤア(Frey)氏は、かつて横濱山手に住し、居常蝶類を研究して Rhoparocera  
japonica 三卷を著し、本邦蝶類學者の権輿として推さる、今より十七八年前、横濱にて病没す、  
惜夫。

### 第三版 高山植物 (本文第十章參照)

右の上段 蟲取堇(ムシトリスミレ)

葉面に微小なる無數の腺毛を有し、常に粘液を分泌し、小蟲來り觸るれば、直に葉縁を卷旋して、之を碎  
にし、その肉體を消化して、自己の營養分に資す、アルプス山にては、主として二千四百米突附近に産し、  
本邦にては、それより低きところにも多く生ず、戸隠山、八ヶ嶽、白馬ヶ嶽、鍾ヶ嶽、赤城山等の如し(こ  
ゝに擧げたる産地は、その悉くにあらず、憶起の大略のみ、以下凡へて之に徴ふ)

右の中段 白山一華(ハクサンイチゲ)

イチゲは則ち一莖、一莖に一花を著くるを以ての故に名づくといふ、白山産のもの早くより名を知られ  
て、草名に冠すに至れり、産地は白山、木曾御嶽、信州駒ヶ嶽、甲州駒ヶ嶽、八ヶ嶽、戸隠山、白馬嶽、  
鍾ヶ嶽、鳥海山、その他甚だ多し。

右の下段 長之助草(チヨウノスケサウ)

須川長之助氏、初めて越中立山にて採りたるより、此名を興へらる、花は八瓣を以て常とし、葉は櫛狀を  
成し、アルプス山には、一千米突より二千九百米突に至るまでの、危巖兀々たる山稜に生ずといふ、本邦  
にては八ヶ嶽、立山、鍾ヶ嶽等、三千米突近きところに看る、八ヶ嶽にては、火口壁に墮りて簇生せり。

中央の上段 林娜草(リンチサウ)

蔓生にして、地上或は低松の陰に匍匐す、八九月頃、淡紅色の花を開く、植物學の大家、リンチ氏の發見  
に係るを以て名づく、北海道の雄阿寒岳、内地にては八ヶ嶽、白馬ヶ嶽、鍾ヶ嶽、淺間連山の一なる備塔山  
等に生ず。

中央の中段 苔桃(コケモ)

矮小の灌木にして、葉は黄楊の如く、冬も凋落せず、夏に花咲き、秋に紅葉を結ぶ、本邦にては不二、立山、  
白山、淺間山、木曾御嶽、甲斐金峰山、同駒ヶ嶽、信州白崩嶽、八ヶ嶽、黒姫山、白馬岳、鍾ヶ岳、日光  
白根山、吾妻山、鳥海山等、寧ろ枚舉に遑あらず。

中央の下段 千島甘菜(チシマアマナ)

莖は一吋乃至三吋、花は淡黄色にして、紫紅色の縱條ある、可憐の小草なり、ヒマラヤ、アルプス、アン  
デス、ロツキイの諸高山、及び本邦にては千島の外に産するを知らざりしに、近來白馬ヶ岳、鍾ヶ岳、戸  
隠山、八ヶ岳等に發見せらる、アルプスには、一千九百米突、乃至三千米突の間に在りといふ。

左の上段 黄花の駒の爪(キバナノコマノツメ)

駒の爪狀の葉あり、黄花咲くを以て、名稱の由來となす、アルプス地方にては「雙花の壺」(この花莖科に



屬すの嶺名あり、千米突より、三千米突間の濕暖地に生ず、本邦にては北海道、及び日光、甲州駒ヶ岳、戸隠山、八ヶ嶽、白馬岳、淺間山、信州駒ヶ岳、鎗ヶ岳、立山、月山、白山、鳥海山、飯豊山等に産す。左の中段 雪割草(ユキワリサウ)

雪を掀して花を綻ばすといふ意、命名已に高山的、殊に多く二千七八百米突までの間に見る、戸隠山、八ヶ岳、白馬岳、甲州駒ヶ岳、その他本邦の高山殊に多し。左の下端 岩高蘭(ガンコウラン)

窪地性の灌木にして、暗色葉を有し、葉邊卷旋して、針形に見ゆ、花は細微にして、實は小黒球の如し、アルプスにては一千米突より二千七百米突の乾燥礫礫土に生ず、本邦にては、信州白馬岳、八ヶ岳、御嶽、白馬岳、鎗ヶ嶽、鳥海山、白山、吾妻山、日光白根山、蔵王嶽、甲州駒ヶ嶽、その他幾んど、有らゆる高山に布ける觀あり、版圖きはめて廣大なり。

第四版 不二山

第五版 甲斐白峰

「甲斐が根」の名を以て、古人の風俗に入りたる甲斐の代表的名山にして、甲斐二國に跨がり、海拔一萬三百九十八尺、甲府平原を挟んで、不二と東西に屹立す、登山記は雜語「太陽」第十卷第三號に、拙文の紀行あり、就いて見られたし。

第六版 相摸箱根早川溪流

第七版 上州白根山噴火乳

温泉を以て有名なる、上州草津より、登り三里にして頂に到り得、海拔七千有餘尺、噴火乳よりは、熱湯吁沸し、硫烟を騰ぐ、附近は燐泥堆積す。

第九版 戸隠裏山の最高點高妻山

扇風状を成せる、戸隠の表山を陥まへて、圓錐形を呈突す、海拔八千有餘尺、山の経嶺は、岩石峻々、無間谷を駈、日本アルプスの大山系悉く聳峙に入る。

第九 松川溪谷を隔て越後大蓮華山及び信濃白馬岳の列嶂を望む

立山火山脈の本州中部に蜿蜒せる、雄奇の容貌を見よ。

第十版 信州白馬嶽腹の大雪田

白馬嶽絶頂より、信濃方面に下りたる崖下に、大雪田あり、未だ氷河を成すに及ばずと雖も、所謂千秋の雪なり、是より急斜面となりて、懸崖平に到る間、岩石に氷河の擦痕を留めたるを以て、近來殊に著名となれり。

第十壹版 日本アルプス著者の手翰

氏の事蹟は、本文第八章(日本の高山深谷を跋渉したる外國人及び其紀行)に詳なり、手翰中に見えたる、

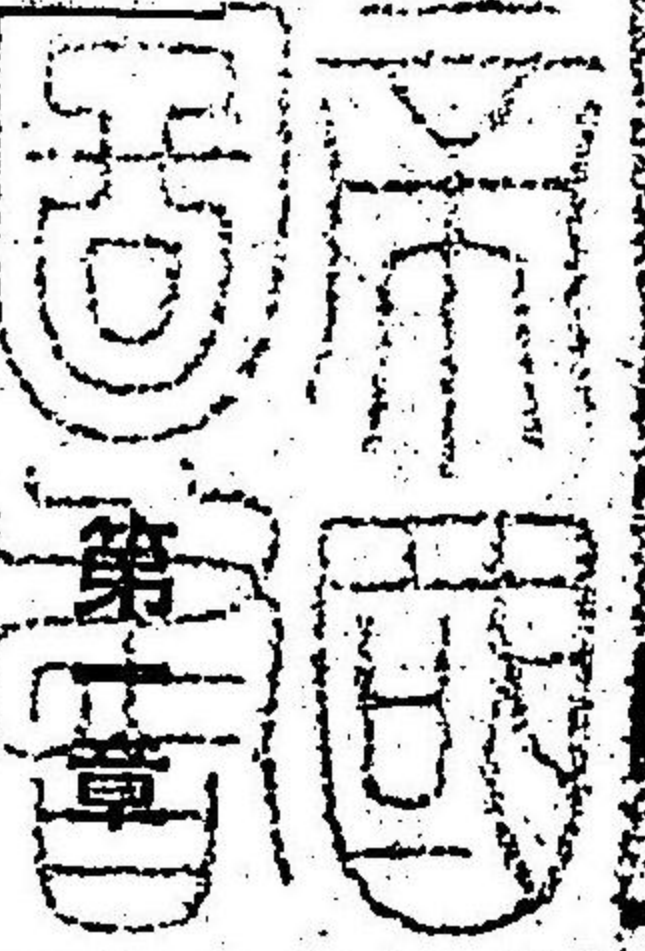


以上

同氏の贈品中より、本書に轉載したるもの、第五版、第七版は是れなり。五百木文哉氏畫の「カケモノ」は、即ち高山植物自然園の一大幅にして、ウエストン氏が後に倫敦へ齎らし返へりたるものなり。

# 日本山水論

小島 鳥水 著



## 第一章 山水の意義

山水の語、素と支那より來る、支那は大平原國なりと雖も、山的地方も是れあり、(楊子江の上流なる雲南、四川、貴州、三省の如き) 且つ平原國なるを以て、却つて山水を奇とし、詩文に繪畫に、之を嗟咏するの風あり、然れどもその所謂山水の水には、海を含まざることを知らざる可らず、海を配したるときは、山水と言はずして山海と呼ぶ、經に山海經を以て名くるあり、蓋し支那海岸線の延長は、その楊子江域を算入すれば、必ずしも日本に比して、太だ短かしと言ふ可らざるも、之を國土の面積と比例するに至つて、日本の匹にあらざるを覺ゆ、即ち日本にては三方里餘に對して一里の海岸線を有すれども、支那にては假令滿洲を除外するとも、猶面積日本に十倍するを以て、隨ひて海岸線も僅に日本の十分の一に該當し得るに過ぎず、且つ日本の國土



幅員狭長なるを以て、例令虚空を泳ぐ高波の如き、山谷の底に生活する信濃飛驒の遐  
 阪僻邑人士を以てするも、徒歩して海岸に出づるには、四日以上を費すことある可ら  
 ず、然れども支那にては、海岸東南に偏在せるが故、一月を経て猶且達せざる處あり、  
 その平野の廣濶渺茫は、水平的單調を作して、大陸的地貌の好標本、地平線と天空線  
 と合一するところ、日本に見る水の如き一碧を畫するにあらずして、黄色を横たふ、  
 殊に北清地方の冬にありて然りとするものは、蒙古伊犁の乾燥地と隣接し、空氣至つ  
 て濕氣に乏しきが故なり、平原國なること彼が如く、乾燥國なること彼が如し、即ち  
 山を缺き、水を缺ける兩缺乏の兩層面間に、欣求的情感を反應して、直角斜角に引き  
 たる線を、山といひ水といふ、支那人士の慰安は、この兩線の距離内に盤して出てさ  
 るなり。

古の支那人がいかにかに山を愛したるか、山東省の一角に聳岬せる泰山の如き、五嶽の宗  
 と稱せらるゝも、海拔僅に一千五百米突、筑波山より聊か高く、箱根山最高點と匹敵  
 するに過ぎず、しかも支那の活けるミュージゼウムとして、古往今來支那人の崇敬措か  
 ざるところ、人類、神話、宗教、博物、考古、歴史の諸學この山を中心として、大波

15253  
4500  
4952

圈を描けるは、日本人が不二山に於けるより、却つて加ふるものあり、故に宋には寫  
 山家として獨創なる郭熙の如き大手を出だし、畫家に山形歩々移る、山形面々看ると  
 いへる如き寥々たる短句を以て、山嶽の神幻を道破せる語あり、本邦にても池大雅が  
 一蓋の笠、一枝の杖に身を托して、富士白山立山に昇り、三岳道者を以て號としたる  
 如き、谷文晁の名山圖の如き、篆刻の名家、高芙蓉が山川の游を嗜み、芙蓉峰百圖、  
 中仙道諸勝畫帖を描きたる如きを算し得ざるにあらずと雖も、山水畫は則ち荆關倪黃  
 を説いて宗とする外に、日本特得の峻山峻峰に及ばざるを奈何。  
 水は則ち如何といふに、前に述べたる四川省の如き、奔水電の如く、石灰岩地を浸蝕  
 して所謂蜀の棧道を作り、山谷の峻絶は、一片孤城萬仞山の峻景を兀立し、(黄河の詩  
 句なれど)長江(楊子江)三峽の如き、變々化々の長屏風を幾十折して、殊に四川省に入  
 れば、斷崖の下幾千尺の谷底を旅行すること、亞米利加のカニオン、コロラッドの峽  
 谷流、本邦の信飛境上の裂線に、犇放險流せる谷河を想はしむ、支那人が所謂山水の  
 水を以て、溪流、谷河、湖沼等に限られ、海を比隣視せざるは、故なきにあらざるな  
 り。



且つ平原國なるを以て、雲白濤の如く、石に觸れて起り、平野を蹴つて漲り、空氣に大旋回を生じて、氷山天地に充つる如き光景を呈し、色雲を崇めて景雲もしくは卿雲の吉稱あらしめ、宋玉の高唐賦に、雲を擬人化して、絶妙辭を作らしめなき、盛唐の大家、王摩詰の如き、詩文最も自然の畫趣あり、山水平遠、雲勢石色、皆活く、自ら曰く『宿世謬詞客、前身應畫師』と、幸ひに日本從來の文學者は、身を以て一意支那文字の謄寫版となすを努めたるため、山水の美を文字に彫刻し、繪畫も人物に疎なる割合に、山水花卉動物等に精しき傾向あるを遏めざりしかど、不二に登りては泰山の日觀峰に比して云々し、木曹路を旅しても楚蜀の山水を假りて、之に誇情を附托するのみ、これ實は本邦の山水を知らざるの罪に座す。

單に花鳥風月修辭の上にのみ然りといふ勿れ、自然研究の大道場なる博物學の發生も、我未だ襁褓の中に包まれたるとき、支那にては疾くより發達して、本草綱目の如き、本草拾遺の如き、神農本草經疏の如き、廣群芳譜の如き、禽經の如き、異魚圖贊の如き、天然力遙かに本邦に比して貧乏なる國土にありてすら、一時長足の進歩を遂げたるにあらずや、我邦にては明治以來、科學に、美術に、逸足して倏ち東洋最文化の域

に前み、今は這の脚下に蠢動せる老大國を憫れむに至りたれども、天與の美なる自然を理解し能はざること、今日の如くんば、實に遺憾なしとせざるなり。

余はこゝに支那日本の比較論を止めて、西洋の日本なる英國（もし東洋の英國を日本とすれば）と別個の對照を試みむと欲す、蓋し支那と日本とは、相距ること甚だ近けれど、是は島國、山國、水國、彼は大陸國、平原國、乾燥國なるが故に、地貌の差違は、同日に語る可らず、英國の日本に於ける、洋の東西に隔離すれども、坤輿球上相互に恰好の國土を求めなば、この姉妹を描いて、何國もあらざるべければなり。

日本を東洋の英國とは、いつの頃より何人が言ひ初めけむ、その酷似したる點を算へむか、日本英國共に同じく一方に大洋を控へ、一方海を隔て、大陸に面す、是に北海道あり、彼に愛爾蘭土あり、いづれも海溝を隔て、離れ島を伴ふところ、亦相似たり、内地は山脈逶迤として森林翠蔚なるところも同じく、海岸線に、半島海岬、鼻灣等、長嘴短角の凹凸著るしく、ために國土の面積を増大したるところ同じく、近世商工業發達の薪材たる石炭の産出夥だしく、これがために強を山谷に藁輪し、富を海洋に醗醸し出だすところ（品質に良否の差あれども）同じく、人口の蕃殖迅速度を以て遞加し、



竟に「人間」の販路を海外に向ひて求むるところ亦相同じ。

然れどもそれは單純なる地形地相を觀し、強ひて人文史に絡みたる問題のみ、まことに日本が英國と殊なり、又全世界に於て、殆んど比類を見る可らざる絶特の好座に在るを知らむと欲せば、更に就いて近く熟視せざる可らず。

今更に言ふまでもなければ、我が大日本は、北太平洋の一隅に位し、地勢南北に長く、南は琉球を併せ、臺灣亦我皇の版圖に入りてより、純熱帶地方なる東印度諸島と比隣すること、海中に碁布點々せる飛石の如く、北は則ち千島樺太より、西比利亚及びアラスカに連なり、延ひて歐米の北地に及ぶ、緯度を以て言へば、日本の南端は北緯三十度位に在り、大塊上幾億里の面積より稀突して、俄に天に咫尺し、全地球の神机となりて靈高三萬尺なるヒマラヤ山や、蘇士と略ぼ同じく、北端は北緯四十五度位、砂邱雪の如く、巉岩氷河を鑿へる如く、鹹湖は古鏡の如く、炭酸鹽の白色被物に覆はるゝ蒙古の高原地や、將軍ウルフやモントカアムが、殉國の生血を瀝ぎたるクエベック邊と同じきなり、もし樺太にして、一旦我が領土に歸すとせば、縦線の長程に於て、全世界中、我國と競ひ得るもの、一も是無しと言ふにあらずや。

加ふるに環海の國、潮流とは舌と唾の關係あり、風は口と呼吸との交渉あり、緯度已に上の如くなるを以て、潮流も、風も、寒帯と赤道附近のものとを併有し、西の方登岐對島を以て一葦の水を帶にし、朝鮮支那に近づけるや、夏は西南季候風と、黒潮の暖流、明鏡に鐵鏽を漲するが如く上り來り、支那の東岸低地と同じく、夏時の滲漑に便にし、全土の草木を舉げて淺青より綠黒の色圖を描かしむ、殊に一方の風、多濕渺茫の太平洋面を掃き來り、一旦氣溫低落の圈内に入るを以て、倏ち凝縮して雨となり、尖進して本邦太平洋岸の凸地に衝突し、幾層の重力を増加して、自ら支持し得ず、豪雨沛然、萬億白珠一時に下る、このときの日本は、宛如として熱帶土なり、しかも冬に至らば、寒潮氷刃を振ひて下り來り、滿洲寒烈の勁風、凜々として滅生の聲を宣る、その酷暑なるや、空氣は濕潤にして、暴雨、銀箭千萬を飛ばし、雷は叫び、電は大虚の玄衣を縫ふ針の如くに白閃す、日本をして馬來的、印度的亞細亞たらしむ、極南日本殊に然り、その酷寒なるや、日本海岸は雪の市となり、日本海岸の山は氷の城となり、尖玻璃の鏃の如き電骸を飛ばし、湖沼龜裂し、大地の皮膚に孔竅あらんとす、何ぞその蒙古的、西比利亚的亞細亞を代表したるに似たるや、島の極北部を以て最も甚



だしとなす。

然れども酷暑嚴寒の兩極端を有するにもせよ、日本が馬來、印度とならず、蒙古、西比利亞となるを免かれたるは、全く大洋といへる濃厚なる君子的調和者あるが故のみ、是れありて、夏冬は短かく、兩極端を折衷して、中庸を得たる春と秋と、最も長きが故に、一年は殆んど春秋を以て代表せらる、幾年と言はずして幾春秋と形容するは、支那語法の襲用に出でたれど、日本に在りて最も適切なるを見る、英國の如きは之に反し、十月より四月までは冬、五月より九月までは夏といひて可なるべく、「春」「秋」の語あれど、その季間至つて短かさなり、故に五月を實際上春夏の發程となし、五月の花、五月の樹の語あり。

この意味より言へば、英國は歐羅巴の英國なれども、日本は亞細亞を日本とせり、佛人ウイクトル、ベリアル氏の日本風土觀に概括的詳論を下して曰く、平原は大抵三角洲にして、幾多の市町は歐洲の都市の如く、人工を加へて建設せられたるにあらず、單に自然の便を利用したりといふに過ぎず、その平原は火山噴出石灰の堆積して、乾地を作り、田畑を供給せるものにして、日本は實に亞細亞的火山、亞細亞的平原を狹

小なる二幅に收縮すと、五大洲中、最大の全亞細亞を、我が全日本に縮寫したりとせば、宇内豈斯の如く變化に饒かなる郷土あらんや、その郷土の山水、生物、亦是はめて變化々なることを俟たざるのみ。

余はこゝに、日本を以て、東西兩大陸の代表者、一は正反し、一は酷暑したる兩國土と比較を終り、反襯照繳の間に日本の絶特なる位地を認めたるが故に、是より進みて日本の山水を論ぜんと欲す、支那の所謂山水には則として、海を除外したること前に述べたり、日本は島國なるが故に、必ずしも「山水」の語義に拘泥して、海を疎外するに及ばずと雖も、日本人は古來山(不二その他二三を除けば)よりも、海に親しみ、所謂名勝を擧ぐれば、須磨明石を説き、三保の松原清見ヶ關を説き、何人が定めけむ日本三景(松島、宮島、天の橋立)も、悉く海邊に限りて選ばれ、今日は瀬戸内海の絶勝の如き、内外人に羨説せらる、即ち海洋を愛する島國人の本性は、發揮せられたるに庶幾きが故に、累ねて海を説くよりは、日本人の未だ知らざる山水を説くの急を想はしむ、我が山水論に、海を加へざりしは、之に職由するのみ、他意あるにあらず。その山水を説くに當りても、山を先にして水を後にしたるは、山の主にして水の客な



るを覺えたるためのみ、山陽は「山不得水不生動」と言へど、山ありて水なきは、猶以て風景となすに足る、水ありて山なくんば、殆ど風景を成さず、山は有らゆる風物に點睛するものなればなり、況んや水は山に養はれて出づるをや、その出づるや、大蘇の文の如く、汨々として一日に千里を往くとも、竟に山を推して重しとせざる可らず。山嶽論に、以下數章、篇中の大部分を盡める所以なり。

## 第二章 日本山嶽美論

今若し日本は山嶽國なりといはゞ（日本の平地は僅に全面積の九分の一に過ぎず、羽後陸中境界連山と、北上山脈と駢行せる中間の北上川沿岸平地、沖積層より成れる關東平原濃尾平原地、及び山嶽陵夷、緩傾斜をなして海岸に近けるまでの諸國平原等にして、就中日本沿海の平原地は、後者の成因に屬するもの甚だ多し、北見のオコック海に面する地方、越後越中の北日本海に面する平地等、最も廣潤なれど、他は些少言ふに足らず。）人は啞然としてあまりに其「決まりきつたこと」に放笑すべし、然れども山嶽は日本人によりていかに解釋されたるかといはゞ、我竟に日本人のために謎の材料とし

て存するを知る外に、一も獲るところなきに失望せざるを得ず。

禮節に嫻はざる人あれば則ち曰く「山男」と、心術正しからず、舉止怪しむべき人あれば則ち曰く「山師」と、風丰老瘠の婦人あれば則ち曰く「山姥」と、時に「出山」の釋迦の如き壯嚴なる背景に用ひられざりしにあらねど、又「山出し」の下婢の如き、滑稽なる意味にも随伴せらる、或は山に對して趣味を有し、尊敬を拂ふ人と雖、隱栖嘉遯の別墅以上に、多くを翹望せられざるなり。

是に於てか知る、山は日本人のために敢て解けざる謎にあらず、却つて釋かざる謎として吾人の前に横はるなることを。

平蕪數十里、春雨霽の如くして、蕪菁蘿蔔、葉々滴々の珠を吐き、一川その間を斗折して水増すこと半篙、荇藻は淺きところに參差して、小魚の游行隊を成し、網は梢に浮びて搖ぎ、白帆は菜花に載りて斜風に下るところ、岸に沿うて家々或は疎、或は密、棋子を散聚する如く、泥を封じて磚壁、竹を編みて茅宇、高低水平線に出没し、時に子女紅紫を雜へ、番傘を翳して下駄の音軽く泥濘を辿る、而して空濛の中より、波頭の駢行する如き丘隴を印象し出だし、その屏圍せる半圈の中より、煙突は櫛立し、空



の白團むところ、煙の黒劫するを見る、更に近くは尖直線の榛の樹ありて、基盤の目を割したる畦畔に連なり（榛の樹は最も濕地に適す、沼澤地と雖も、其鹽分を含ませる以上は、之に生じて過量なる水分に堪ふと雖、近來排水事業發達して、前の低濕地も著るしく其水分を減じたるを以て、生育漸く衰へ、松杉取つて之に代るに至れり、殊に關東平原の如きは、昔時大抵この樹の占領區域、藪として驟雨狀の榛林を成せりとほ古老舊記の證するところ、今や則ち亡し）更に遙かに圓陀々の丘隴を超えて、コップを伏せたる如き多角形の山あり、天外に紫堇色のインクを潑し、放焉として春を署名するを看よ、億兆生民この間に生れ、この間に活き、この間に村落を作り、更に發達して都會を成し、熙々皞々として安靖に入るにあらずや、面積殆ど一千里に近き關東平原、百方里を過ぎたる濃尾平原（日本第一の米産地）八十七方里なる信濃川平原、其他山形米澤の平原、仙臺平原、甲府平原、大井川平原、畿内平原等の如き、沖積及洪積の新时期、或は三稜洲に人の市を成すこと斯の如くなる所以は、この土壤たる、素と數種の物質を包含するを以て、豊沃なるが故なるべしと雖、又これらの地層たる、水波の作用によりて靜に沈澱したるを以て、平坦淺遠人の棲所に適したる故な

るべしと雖、所謂沖積は河道あるがためにして、河道は則ち山あるがためなり、而してこれらの平原則都市は、本洲を斜縦斷せる南北兩帶山脈と、兩帶の契結線なる中央山脈との裳裾に横はれるにあらずや、之を喩へば日本にありて山は萬有を生育發達せしむる使命を帯びて、地に下りたれども、輒ち人に同ぜざる絶大の「巨人」にして、其水を派するは白乳を哺ましむるなり、裳裾を長く曳くは床褥を供せしむるなり、動物（人間を除いての）は彼の愛兒にして、猶且彼の最大愛兒（人間）に割愛することを許す、人其恩に捩れて更に彼の髮なる森林を伐り、彼の衣たる岩石礦物を削ぎ、彼が口中の津液なる溪流湖沼温泉に喉を潤ほし、四肢を洗ひ、彼が呼吸なる風雨を無盡藏に使用し、而して「山」といへば人と交渉するに當り、幾由句の距離あるを、想はざるはあらず、頑兒到底嚴父の愛を解せず、然れども巨人の慈悲は嚴父のそれよりも更に大なり、宇宙の大にも泪沒せられずして却つて人間の小を藐視す、仁者の山を愛するは、豈この意義を以ての故にあらず乎、我山の高さもの、深きもの、大なるものに遭ふ毎に、跪いて之を讃嘆せむことを願はざるはなし。

我に山中哲學あり姑く左に録す



○森林は自由の故郷にして山は宗教の降誕地なり

○山は Much to say じや Many なり。

○山に登るは最多く天に近くなり、天に近くは最多く人を離れて、實は最多く人に近くなり。

○山は玄なり、故に山中に行くは玄中に之くなり。

○山は形而上に於て絶對の眞理なり、形而下に於て雙對の應用なり。

○山と人とは遠き時に方りて、地球と月球との如く遠遠なり、近き時に於て頭と手の如く接近す。

山と人と相互に交渉する所以を見るに庶幾らしむるため、是より進んで、山に就きて聊か吾所思を陳ぜむ。

### 一 山の繪畫的容貌

天下何物か線より成らざる形體あらむ、樹木の垂直なり、斜曲なる、平野湖沼の水平なり、弧線なる、日輪月輪の圓なり、半圓なる、高塔の上尖りて下大に、或は方なる、

或は六角なる、皆各美を其一方に恣にす、然れどもあらゆる太線、細線を湊合し、配置し、對復し、離乖して、虚空の白紙に皴を走らし、皴を引き、縦横に交叉して、いかなる黒風白雨も之を抹殺する能はざる畫圖を作るものは、地球上單だ山是のみ、平野湖沼河海の如きは、劃線大概一様にして整齊、たとへば能品の文の如し、「山」に至りては突兀として高聳し、逶迤として低走す、その段落次序大粗にして小工ならず、則ち大粗なりと雖、豪氣盤空、眞にこれ天品の文なり、日本に就いて之を言へば、山脈が鋸齒状を成せるは、淺きものも猶且上總鋸山の如く（房總の地骨を成せる第三紀凝灰岩の累層より成る、近來石を斫り出すために、頗る形狀を缺損す）その深く且高さものに至りては突兀たる大和臺ヶ原山の如く（二十年前の大臺ヶ原山は、深山幽谷人跡の到らざる處なりしに反し、土倉氏官林を拂受けて伐木に従事せしより以來、林道次第に開け、大臺ヶ原山の頂上には大臺教會なるもの起りて、一大堂宇を建立し、現に頂上に達する線路三條あり、一は吉野郡北山川の河合を經るもの、一は吉野郡川上村柏木を經るもの、他は熊野の船津より大杉谷宮川の支流の奥に出て、柏木より來るものと、七合目にて會するもの、是なり、堂宇は海拔五千尺内外、十一月三日登山せる



人の話に、この朝水は已に氷結し、滿林霜白に凝りたりといふ、是れ紀伊半島、常住人家の存する最高點なるも、土倉氏は此山上に到る間、砦岩の稜々を削整して路を作れるを以て、此邊數多の道路中、行歩最安樂、船津より魚を吉野川川上に輸するもの、此土倉道を利用すといふ、此の如き別天地の容易に開かれたるは、何人も驚嘆するところ、蓋し吉野造林の發達著るしく、熊野地方に至るまで銳意森林の富源を開發するに汲々たれば、深山幽谷も漸く人跡車道を印するに至れるなり、もし大臺ヶ原山に登らんと欲せば、吉野上市より約七里にして柏木に到り、是より入之波冷泉を経て、又七里にして登るべし、山上の堂に一宿を乞へば、教會員は客を遇すること懇ろならむ、夏の登山最妙なり、大臺より船津に到る八里餘、船津より引本浦に至る更に二里、是より扁舟を、僦ふて尾鷲に渡れば、汽船ありて、日々和歌山及び鳥羽に航するの便あり、以上零丁氏の文に據る、殊に火山の概して筍形なり、圓錐形なる、花崗岩の突兀峭拔なる(是等の大山は第四章に細論すべし)形態の多樣にして奇趣横生せるは、毎指に千筆を挿みて、之を一齊に使ふも猶足らざるを覺えずんばあらず。

然れども線の多様多趣は、人間猶之を能くす、たゞ山色の變幻陸離にして光澤の純粹

に至りては、日に七變色すと稱せられたる筑波山の如き、畫家が「維嶽降神、秀氣所鍾、是造物者之無盡藏也、而吾與之比抗、恐爲嶽神所究」(東藩日記)と長吁して走りたる富士山の如き、その山名を書するも、倏ち紫影、董色、銀光、晶氣、滾々として筆下に涌くを覺ゆ、天地間色を以て之に競ひ得て、寧ろ駕するものは雲あれども、季は夏に止まり、時間は朝と夕とに止まる、永劫不易にあらざるを以て、久戀の情を托するに由なし。

透徹、玲瓏、曲折、變化、雄峻、嚴整、これらのものは總て山の繪畫的容貌にありての特色となす、人往々海の壯觀を説く、然れども海のものたる、廣濶一式は則ち是あり、性質素と平なる點にあればなり、其他に至りては變化を山と競ひ得るもの一もあることなし、偶々颶風に遇ひて波高く騰ると雖、その垂直距離(所謂「波山」)五十丈を超ゆることなく、波々相距ること(所謂「波谷」)二三十尺の間在るのみ、之を瞰るときは小なる山の模型圖なり、萬山重疊を瞰れば大なる波濤の切斷面を成せるに若かざること遠し、然れども海之最豪壯なるは、その平にあらずして變なるとき、語を換へて之を言へば「海」の本質を毀ちて「山」の假態を模したるときにありとすれば、偶々以て



山の天品を傍證し、裏書するに足るべし。

## 二 山の詩的生殖

山中曆日なし、然れども一樹猶春の使者を呼んで、數鶯の啼くを聴き、天々たる花と  
 素々たる葉とを併有して、夏を綠描し、色寫し、或時は白雲の上に梢を挺きて、秋と  
 握手し、或は雪を掬んで冬を刻印す、而してこの一樹は「山」の生殖物の中において、  
 萬の一のみ、仔細に檢すれば猶斯の如し、その他山中の萬有に至りては、豈下界の人、  
 牛馬犬猫の外に獸あるを知らず、雀と鶏との外に禽に親しまざる輩の夢想し得るとこ  
 ろならむや。

今假に山中の生殖物を有機無機の二に別たんか、有機の動物は必ずしも箱根山中の赤  
 腹(魚名、也有の旅賦に曰く「箱根の赤腹は卷わらに刺し」云々、蘆の湖畔、漁人蘆を結  
 んでその乾魚を曬く、形は鱈に似たり、味は鮎の如く芳脆にして、や、劣れるのみ)、  
 加賀白山の鳩鳥(後鳥羽院の御製に「しら山の松のこかげにかくろひてやすらに棲  
 めるらゝの鳥かな」と、八千尺以上の高山、所謂偃松帯に栖息す、必ずしも白山のみに

限らず、山頂風動きを以て飛ぶ能はず、且行歩遲鈍なるを以て容易に手捉するを得)の  
 異類に止まらず、植物もまた加賀白山の黒百合(世人の熟知するところこれ亦白山  
 のみに限らず)飛驒乗鞍嶽の氷草(幽谷斷崖飛瀑の下、陰濕の地に生ず、長二三寸よ  
 り四五寸に至る、花莖純白玲瓏にして夏時盆栽の珍たり)等支那人の所謂琪樹靈草の  
 異類より、木曾山中五名木等世人の熟知するところに止まらず、一遊して益を得るこ  
 と尠からず。(第十章、山の岳の生物』参照)

看よ、牧畜は多く火山裾野に於て行はれ、黄茅白葦の間、噴石の屹として人立すると  
 ころ、或は野馬を追ひ、或は策を揮ひて一群の牛羊を導く童子に遇ふは、到るところ  
 の山僻郷曲に於て之を見るべし、野生動物に至りては、氣候の適否によりて棲家の分  
 配に異同を來すこと勿論なりと雖、その最大干係は生存競争に在り、是を以て深山幽  
 谷は、彼等がためには人間の迫害を受くること、遠き距離なり、比較的安全の位置に  
 在るを以て、彼等は「この圏内に踏み入る勿れ」と傲叫して眼前の敵を揮ひ去らしめ  
 んとしたる古の哲學者の態度を持して、晏然こゝに僑居するなり。

若し夫れ殊に日本山嶽に多き樹木は、檜、杉、松、椴、栗、姫松、黒檜、唐檜、榊、



櫟、樺、桂、山毛櫨、榲、楸、榿、樟、羅漢等の天然林（人造林の發達は極めて近來の事に屬するを以て今舉げず）老幹大樹森々然として柯を交へ、枝を戟し、空氣より水を壓搾するとは異なる作用を以て、日光を溶かして翠雨となし、之をそほ降らし、樵夫の穿袴袂袖も亦綠晶の如く染むる別天地に至りては、稻を以て橄欖視する平原地人の終生味ひ得ざるところなり、但だ維新以降亂伐の弊は、這個天然林に致命傷を與へたるもの無きにあらざりしかど、幸ひに其尤なるものは官林、若しくは御料林に編入せられて保護せられたるを以て、葱々たり鬱々たり、多感の游子をして、之は是れ自由の森林、聖の森林と叫ばしむ、御嶽、立山、天城山、大臺ヶ原山の森林の如きは殊に是なり。

人の生殖は罪を孕みたるより來ることあり、日光の純火に炙られ、雨雪の淨水に洗はれて、軀を作る山の生殖物の、何ぞ純潔たるを怪しまんや。

### 三 山の科學的結合

且つ山は科學の結合といはむも殆ど不可なきが如し、いかなる科學が絶特に立つもの

あらむ、然れども山の如く總てを綜合する便宜の位置を占めたるものは、他に類を見ず、天文、氣象、數學、物理等、山に在りて最多くその土臺を築造さる。

先づ氣象に就いて之を語らんか、たとへば人苦熱に苦しむも、一たび山中に入れば、絶巔の雪を掬ふに及ぼすとも、又森林に入りて密枝大葉の陰翳に肌を曲げて眠らずとも、忽然として一道の冷氣に撲たれ、懼然として襟を合すを想ふものあらむ、既にして山を下り、麓を離れて遠く宿舍したりとせよ、戸外の風聲は劔氣怒りて萬葉裝束、驟雨の雹を捲いて俄に飛び到るかの如し、羈愁何ぞ堪へむ、蓋し晝間山腹の空氣は溫暖にして且稀薄なるを以て、谿谷の空氣は之を補はむとして山頂に向ひ、所謂「谷風」を作り、颼々として吹き昇るがためにして、前の山中の冷氣はこの故のみ、之に反して山腹の空間は速に冷却するを以て、山上より谿谷に向ひ、逆しまに吹下すもの所謂「山風」にして「筑波下し」「比叡下し」「伊吹下し」の類本邦にこの例多し、山風を送りて海風を迎ふ、山は風の媒介所なり、その氣候に關するや今日を俟ちて始めて識らるるなり、山と氣候の關係は、何事をも詩的に解釋する古人によりて、淺間山の記を作らしめ、



今夏月の、雪まればなれど立春の後、百餘ケ日、霜互て雪のあしたの如し、又中秋より露寒く、或は霜早く来て毛作を刺す、故に耕の日せまれり、傳聞、むかしは寒氣強く鍋釜凍破たりと、今はかゝる事なし、されば秦の代に寒強く、漢に至て暖なりと、苛政は虎よりはげし、今難有順化にあふて、年の寒煥もこれにしたがへるなるべし。(善光寺名所圖繪)

と、又詩的に解釋せしむ、是れ一證とすべし、蓋し伐木に因つて空氣の流通を促がし、山嶺の開鑿に隨ひて從來蒸發氣凝固して雲霧となり、冷陰人の肌に礙したるもの、漸く日光を仰ぐこと多くして、次第に乾燥し、次第に溫暖に赴くは自然の數にして『この頃は四山拓けたる故にや、むかし三尺も積りたる雪が、今は五寸以上積らずなりぬ』とは、木曾街道の寒驛なる須原の土人が、我に語りたる所なりき、文明は交通と關係し、交通は「山川」等の天然に影響す、苛政の有無を以て氣候の寒暖を卜するは、一に次いで直に三を算ふるの類なりと雖、山と文明の關係に思ひ到れば全く當らざるにあらず。

我が聞くところの如くんば、富士山麓の諸村落は、かの明淨なる河口湖の水を排して、

之を馬入河に出だし、乾地となして、養蠶の氣候に適せしむる企あり、現に土木事業を擧げつゝありといふ。夫のハーレム湖の水を放出して乾地(Polder)を作り、氣候を人為に變遷せしめたる如き實例甚だ多きに倣ひたるものならむ、人間が山水を恣に毀損することは我が審美の觀念よりして、極力之を非とするところなれど、こゝには只だ人間は、いかにして天然と交渉するや、自然的作用と實際的應用とは、山といふ興味あり複雑したる舞臺を俟ちて、什麼の均齊に到着するやといふ問題に就き、氣候の方面より之を説きたるのみ。

たとひ應用を離れて單に科學上より之を視るも、動物、植物、天文、土壤、地質、岩石、鑛泉、溪河、湖池、瀑布等は山に登らずんば到底研究し得ざるもの多し、若し細水支水の本流に注入する疆域を「河領」と稱する學者の定則にして立つことを許さるべくば、これらの分科を打つて一團に結合したる「山領」や亦大矣、抑も「本立而道生」と言はずや、殆ど萬有科學を具體し、加ふるに詩の榮冠を着けたる「山」を措いて、學者よ、卿等宇宙の間、何の處にか講堂を求めんとはする。



## 四 山の歴史的祕庫

山、大虚空に孤聳す、尖れるは、鎗の穂を振り立つるが如き(飛驒鎗ヶ嶽)楕圓なるは、銀鞍を置くが如き(同乗鞍嶽)直にして急なるは、錫杖を掛けたる如き(同錫杖ヶ嶽)名稱自詮にあらず、自詮名稱の状態を以て、平地もしくは人類の棲家と離隔すること高し、故に飛驒の如き、信濃の如き、甲斐の如きは、宛然陸中の島嶼なり、而してその島嶼の絶頂は山なり、たゞ海中の島嶼は横に、長さにて水平線的に陸と離れ、地上の島嶼は、縦に高さにて垂直線的に陸と隔たれるのみ、吁嗟滄桑の變は太古陸地なりし伊豆半島の一部を陥没せしめて群島を作り、太古湖底なりし甲府を今日の平原に化せしむ、水陸地を易ふる何ぞ昔にこの天變のみにして止まむ、時代の寒潮日に大地を拍つて急なり、かくして寸々尺々に築かれたる沈澱層は則ち歴史にあらずや、然れども紙上の歴史にあらず、文字上の歴史にあらず、所謂原人時代以來の活歴史を、今日に於て眼前に開展し來らんと欲せば、之を島嶼に求むるより善きは無し、故に八丈島の土俗を調査すれば八百年前を想像すべく、琉球の土俗を探究すれば二千年前を模索す

るに足るものありといふ、太古以來の生活、風俗、家屋、宗教、文學、(歌謠)等、既に都市村落に墮滅して、島嶼に残存せるもの今日尠からざるを想ふべし、たゞ海島に在りては、潮流の便を借りて船舶運輸の利用あり、四周又廣濶、何處より來るも碍くるなきを以て、時に新風を輸入し來り、古質を傷ることありと雖、山島に至りては只尖、只高、之を仰ぐべくして到る可らず、故に山島民の保守的なるは、單に物理上所謂惰性の方則を以て燃るのみにあらず、天象に對しても屹として自ら防風林の用を爲すと共に、人事に對しても他の消耗する時に貯蓄し、他の捨つるときに拾ひ、都會が日に戸籍簿を淘汰し、補綴するときに、山島は容易に人に開かれざる歴史のページを維持し、且つ之を緊縮す、故に歴史の墳墓は山中に入りて始めて之を發くべし、しかも之を發くは枯骨を九泉に搜るに比して遙に容易なり、されば橋南谿の『西遊記續編』に平民の子孫が隱匿繁殖したりといふ所謂五箇村邑を特書して

壽永年中、平家の人々京都を落略一門残らず入水と披露して、其實は肥後國の極山中に隠れ給ひぬ、其後世の中鎌倉に歸して、平家の人々は永く山中の土と朽果給ひぬ、其隠れ給ひし處、今の五ヶ村なり、南北凡二十里許、東西一二里より三里ばかり



りもあり、東は豊後、北は阿蘇、南は求麻、西は隈本なり、何方より入るにも、皆二十里餘りありて、其嶮阻中へいひつくすべきにあらず、更に道とてもなし。といへる如きは、稍や誇大の嫌あるも、歴史の秘庫としての山島を覗ふに足るものなくんばあらず。

然れども、這箇西海の五箇村は、事既に舊聞に屬す、東山及北陸兩道の峽中に介在せる五箇村の如きは、今日未だ世に知られず、今之を歴史的秘庫の一例として左に紹介す。

越中の南端、飛驒と犬牙境を接するところ、大山俊岳霄漢を衝いて天柱屹たり、その臺礎を縫うて庄川の一水、(射水川是れなり)奔湍電の如く、水吼え石跳り、雲又伴ふて走る、旅客行々或は幽澗に臨み、或は峽中に入りて、その上流に溯れば、沿岸に別天地あるを見べし『斯郷自是小仙寰』

村落の數四十七、戸數九百、人口凡二千三百(近年は北海道に移住するもの多くなりたるため、約百戸を減せりといふ)町村制施行後は別ちて上平、平、利賀の三村となりたれど、總稱して五箇村といふ、傳に平民の遺族といふは、何等的確の根據なきを

以て、單に詩的傳説と見做すも妨げず、然れども住民の語音は、多くの山中に於て然るが如く、雅にして正、婦女の容貌端麗にして自ら京人の風丰あり(想ふに庄川の感化ならび、飛驒白川村の如きは、背に高く白山を負ひ、前は白川の急流に臨む「白川女」の稱ありて妍なりといふ)其衣服に至りては、古來布子と稱して、太布に唐艸小紋ちらしの「紋つき」を常服となす、(今日にては昔日の如く多からざれども)古より戸數を増殖せず、一家大抵二十人乃至三十人の團樂を見る、蓋し土地惡瘠にして人と食料の平衡を得る能はざるの患ひあるを以て、主人もしくは相續者の外は、結婚を許さず、或は結婚を許せども分家を許さず、隨ひて分家の制なきに因る(而して是れ又飛驒白川村と同制度なり)盆踊にはモギヤと稱する俗歌を唱へ、青春の男女編笠に面を包み、三味線尺八の合奏にて、手拍子をかしく村中を巡る躰たらくいと古拙なり、そのモギヤ歌の一にいふ

飛驒の高山チー高いとはいへどナイ

山は高くないサ、名が高いヨ

南谿は肥後五箇村を記して曰く『自ら平家高貴の人の御末なりと高ぶりて、世の人を



「輕んず」と、この村に在りて所謂「平家高貴の人の御末」なるかを想はしむるものは左の俚歌にありとす。

烏帽子狩衣脱ぎ捨て

越の深山の杣通ひ

何等の樸雅、何等の高韻、昨は烏帽子直垂の粉黛、今穿つところは伊の縞素、淡梢濃葉の間を掠めて、杜宇一聲知らず、何の處にか落つるを、乃ち檜木笠を傾けてこの悲涼の歌に悶を遣る、天下有情の人死なん哉。

旅行家諸氏の北陸東山の間を過ぐるものに告ぐ、先づこの地に遊べ、里程は中越鐵道の終點なる、東礪波郡城端町より平村字上梨と稱ふるところまで、僅に五里の山道。

### 五 山の時間並空間的統計

日本の風景を論ずる人曰く、日本の極西は、英國グレートブリテン 威の東經百二十二度四十五分（半熱帶）より起り、極東は東經百五十六度三十二分なる千島國占守島（寒帶）に入る、その間を横線狀に經過するが故に、最も變化多しと、洵に説き得て理あり、然れども

今人ありて這の半熱帶地より、寒帶區域に入らんと欲せば、延長約九百里許なる日本を縦断せざる可らず、しかするには中央の脊髓骨なる大山系を蟹歩するの覺悟なかる可らず、かくして初めて朝に龍眼肉を味ひ、夕に山胡桃（北海道産の）に舌を鼓するを得べしと雖、木客山操にあらざるよりは、誰か敢て之を可能ノ事とせむ。

單だこゝに一の方法ありて、熱帶より寒帶に亘り、僅に一二日を費して首尾全く經過することを得べし、之を登山となす、今姑く例を熱帶地方の高山に借るとせむに、ガンドヌの平野を横絶するときは、熱帶性の植物繁茂充塞して、寸隙なけれども、既に登りて雪山の中腹に到れば、氣候も植物も共に温帶となり、樹種次第に減じ、更に高點に達すれば已に雪境に入りて、氣候北極と撰ばず、植物も亦寒帶性のもののみを生ずと、憾むらくは日本にありて熱帶に屬する高山は、臺灣新高山の他に之を見る可らず、九州地方の如きに至りてはいかに高きも海拔六千尺を超ゆる山なきを以て、暫く温帶に就いて之を言はむに、海岸より次第に山の高きに登るに隨ひて、空氣の厚薄を殊にし、林相の變化を來し、風物又頓に變じて、はじめは山麓なる村落の人馬、豆よりも小なりしもの、猶上れば高臺、丘隴、大河、絲を切斷したる風如く急に落ち、



天愈よ近きが如く感ぜられ、朝は麓に八月を送りて、晝は中腹に十月を迎へ、夕は絶巔に到りて極月に迫る、昨は單衣にして猶皮膚を剝がむことを念ひ、今は纒を夾むも、猶寒の高きに堪へず、氣候の激變は臺灣と占守島とを「廻り舞臺」にしたるかの感あり。

氣候既に變ず、生物無生物いかてか之に伴はざらむ、三好理學博士嘗て文あり、山麓より山頂に達するに隨ひて、動植物分布の状態變化に説き及ぼされぬ、其一節を左に拔す。

今茲に植物に就て之を言へば、山麓の産は里間の者と著るしく異ならず、登ること數里にして、吾人は先づ鬱林の裡に入らむ、合圍の樹幹高さ數十尺、條極密撥日光を洩らさず、幽曠として猶ほ薄暮の如し、此際亦徐に地面に點綴せる植物を檢すれば、若草あり、羊齒あり、蘚苔あり、地衣あり、何れも陰濕を喜ぶもの、花葉の形狀自ら尋常のものとならず、之を喬木帯となす。

登る止まざれば樹木漸く稀疎、幹枝自ら矮小、始めて青霄白日を現出す、地衣益々多く、或は樹梢に懸垂し、或は樹皮に點着し、奇觀言ふ可らず、之を灌木帯となす。

愈よ登れば灌木亦盡き、遂に草本の帯となる、莖葉短小、或は地に布き、或は岩に着き、花叢累々鮮紅なるもの、深紫なるもの黄白褐綠相映發す、而して種類固より非凡、孤花單葉珍貴となすに足れり、凡人俗客尙ほ奇觀せざるなし、況んや少しく植物學の嗜好あるものに於てをや、彼若し一たび此仙草靈卉の域に至れば、實に手の舞足の踏む所を知らざるなり、之を草本帯となす。

更に登り、殆ど山巔に達すれば、巨石磊々、唯微細の地衣類の粘着するを見るのみ、之を地衣帯といふ、植物此に至りては全く盡く。

以上山麓よりして山巔に達する植物の状態、自ら五層の帶看を呈す、所謂山地植物帶是なり、山甚だ高ければ五帶全く具はる、之に次ぐもの或は第四帯に達し、或は第三帯に到る、而して尋常の山に至ては、第二帯を超ざるもの多し、是亦局地の緯度、氣候、地勢等によりて異なれり。

と、植物既に激變す、こゝに巢ひ、こゝに生活する動物の、自ら之に伴ふ約束を履めらるも、亦觀易きの理なり。

之を要するに山は垂直なるが故に「玄」の傾斜地を以て「爰」なる大地に接せしめたる一



個の「勾」なり、故に簡にして至細、密にして至大なる一部天然を縮寫したる始末史なり、人平原に安居するや、平生四季の外に天然の移動を覺えざるを以て、その働きを緩漫遲鈍といふ。焉くんぞ知らむ、平地に在りては三百六十五日に四變するもの、山に在りては則ち一日に四變するを、又焉くんぞ知らむ、平地に在りて緩漫遲鈍なる天然的作用は、山に在りて二六時中急劇に間斷なく働けるを、乍ちにして白雲に隠没し、乍ちにして青天の底を撫て、乍ちにして勁風起り、乍ちにして四周蕭條「死」郷に佇める如く、乍ちにして脚下に迅雷あり、乍ちにして頭上に星斗を垂る、宇宙間のあらゆる偉大なるもの、偉嚴なるものは、山に登りて初めて其億の一を知り得るなり、故に曰く山は時間に於て、空間に於て、宇宙を具體的に短縮したる統計なりと。

人もし、この興味ある統計の打算手とならむことを欲せば、仲夏より秋末の間を限り、北緯三十五度以北、四十度以南の線内に於て、東經百三十六度以東百四十一度以西の諸高山を跋渉し、之を試むべきなり(委しくは第四章に説くべし)

以上の五項目は、多く自然より觀て山を説きたるものなれど、今姑く楮餘に閑筆を弄し

## 六 山と人文の交渉

を一束にして説かむ。

何故に山中の人は、軀幹偉大なるもの多きや(陽成帝の元慶二年、諸國に勅して勇敢輕銳の士を擇ばしむ、而して悉く之を山國たる東海東山二道より採れり三代實錄)朝に狡兎を追ひ、夕に豪猪を搏つは、北方の強を成す所以にあらざりしか、何故に山中の人は單純なるや、彼等が互に交渉する人員は極めて稀疎なるを以て、心靈上に發達せざるも宜なり、而も其氣象の尖峭狷介なるもの自ら亦山的なり、魯語の公父文伯の母の言に曰く「沃土之民不才者淫也、瘠土之民莫不嚮義思也」と、世と移らざるために識見狹隘なるも、その間自ら儉朴剛健の風を養ひたるなり。

何故に山中の家屋は偏強の材木を用ひたるや、何故にその屋は尖り、爐は大なるや、何故に瓦屋なくして草葺、板葺、又樽葺のみなるや、何故に衣服は木綿、もしくは麻衣の筒袖、窄袖の短衣、或は袴と股引とを折衷したる木曾山中の、さん、飛驒白川の猿袴等を古より今に至るまで、猶襲用しつゝあるや、是等の問ひは、山地の氣候又



山葎ぎの状態を知れるものには答ふるまでもなからむ、何故に山中もしくは山麓の不便不利を以てして、猶よく聚落を造れるや、答へて曰く森林鳥獸、天豈無用のものを地に下さじや、既に用あり、人の之に就くは當さに然るべし、其他山に孕まれたる村落が、神社を夾むて屋舎を櫛比せる御師の住宅に似たるものあるは、直に移して以て宗教對人心の問題を研究すべからずや、然れども特殊の事情によりて山中に棲める少員數の(その或るものは殆ど人乎獸乎を辨せざる程に蒙昧なる)人間と山との交渉を説くは我本志にあらず、已に大社會を組成せる市民と山との關係が、極めて疎遠なるが如くして、又極めて密接せるを説かば則ち足る。

人文明を設けば則ち宗教をいふ、日本の宗教はいかにして起りたるか、學者往々我國の火山作用劇甚なるによりて、此作用より起る恐怖の念は、山嶽を崇拜せしむるに至りたりといふ、然れども何故にひとしく宗教にして、神道よりも佛教の多く行はれたるかの原因を説けるものなし、想ふに本邦の如きは印度の熱帶的天然力の偉大に比すべくもあらず、而も本州の極北なる陸奥の寒地に「恐山」地獄を有するは何ぞや、蓋し本邦の如く山勢峻拔にして地は隆多く窪少く、平原といふも摺鉢の底に過ぎざるが故に、亞細亞

中部の沙漠地、曠原地の如く直接に天(高天原)と交渉することをなさず、支那詩人の「野曠天低」の景象に乏しきを以て、何物か高さものを通過せざる可らず、他邦の人は天地といへど、日本は天より山、山より地といふ三階級を通過して初めて「人」たり故に山嶽と親しむこと多からざるを得ず、山の人に於ける距離、天より近きが如く、佛教の人に於ける距離、又神道より密なりしなり、而して山と佛教との關係は如何。

日本は火山國なるが故に、國民躁急にして耐急の念なきこと、栗子の爐中に投ぜられたるが如し、一道の點火あれば即ち飛躍す、人は必ず其弱點に向ひて宗教を需要すとせば、寂を説き、空を説く佛教に、人心翕然として歸依したるも亦宜ならずや、寂は冷なればなり、熱の反對なればなり、空は無なればなり、自我を没却すればなり、而してこの宗教は、火山に攀縁して公布の動機を得たるなり、我は信ず支那人に向ひて地獄を説くよりも(恐らくは印度人に向ひて地獄を説くよりも)火山國たる日本人に向ひて焦熱八大地獄を説くの、早く恐怖を感ぜしむるに若かずと、虎話を聽いて面色土の如くなりし人は、嘗て虎に追はれたる人なりしをや、是れ國民を擧げて佛の冥助に向ひて合掌するに至らしめたる所以なり、而して火山神の多く神佛混合教なりしは、空



海一流の本地垂迹説與かりて力あるや論なしと雖、神道を以て内身を潔め(消極的)佛教を以て外患を掃はん(積極的)とするにありたるが如し、日本に淨水多きは神道に潔齋ある所以にして、火山多きは佛教の所謂地獄の恐怖を理解せしめたる所以なり。既に宗教を説く、美術は則ち如何といふに支那の美術は北嶺山脈の秦嶺間に發達し、希臘の美術はヒンドス山脈縦横の裏に涵養せられ、羅馬の美術はアペニン山脈の割斷せる峽間に養成せられたるにあらずや。

人國家の致富を説けば則ち農業をいひ、商業をいひ、工業をいふ、而して山は疾くより詩歌繪畫の領域に轉じて、世人より閑却されたるが如し、鑛物石炭を山中より採掘する如きは暫く措く、富士山腰の縦楮極を伐つて製紙會社を興せるが如きは暫く措く、土木の業は山中に於て最も能く發達し、殊に家屋構造の如きは素と鉅材に富めるを以て、建築術は大に見るべく、飛驒より斯道の偉漢飛驒内匠を産したるが如きは、誰か山の厚資ならずと謂はむ、京都の文明を以てするも、猶且逐年交代の約を以て工匠百人を飛驒に募り(所謂「番匠」是れなり)庸調俱に免じて厚遇せらざるところなかりしを以て見るも、山と工業の關係至大なるを領かむ。

若し農業よりして山を視んか、山地多くは磯嶽にして美菜嘉蔬を産せざるは勿論なれど、土地豊穀類を以てのみ尊からむや、たとへば東山道の如きは、南北を通じて各國峻秀を極めたる火山參差相錯はり、殊に東西兩大山系の結節を成せる地方の如きに至りては、怒濤天に參し、萬浪前に翻へりて落つるあれば、千波後に峙ちて高さあり、是を以て本邦中地帯最廣濶なるに似ず、地味概して瘠鹵なれど、桑蠶に於ては日本第一、本邦の經濟的生死繫かりてこの一道の嚮背に在る如きは、天蓋し「山」を据ゑて狹隘なる國土に多大の空地を豫備し、平原に米を興へたる代りに山地に桑を寄附し、一旦外國貿易開けたる時を俟ちて、之を發達せしめたるにて「天道人を殺さず」の語、眞に人を欺かず、山何ぞ農業に關係なしと謂はむ。

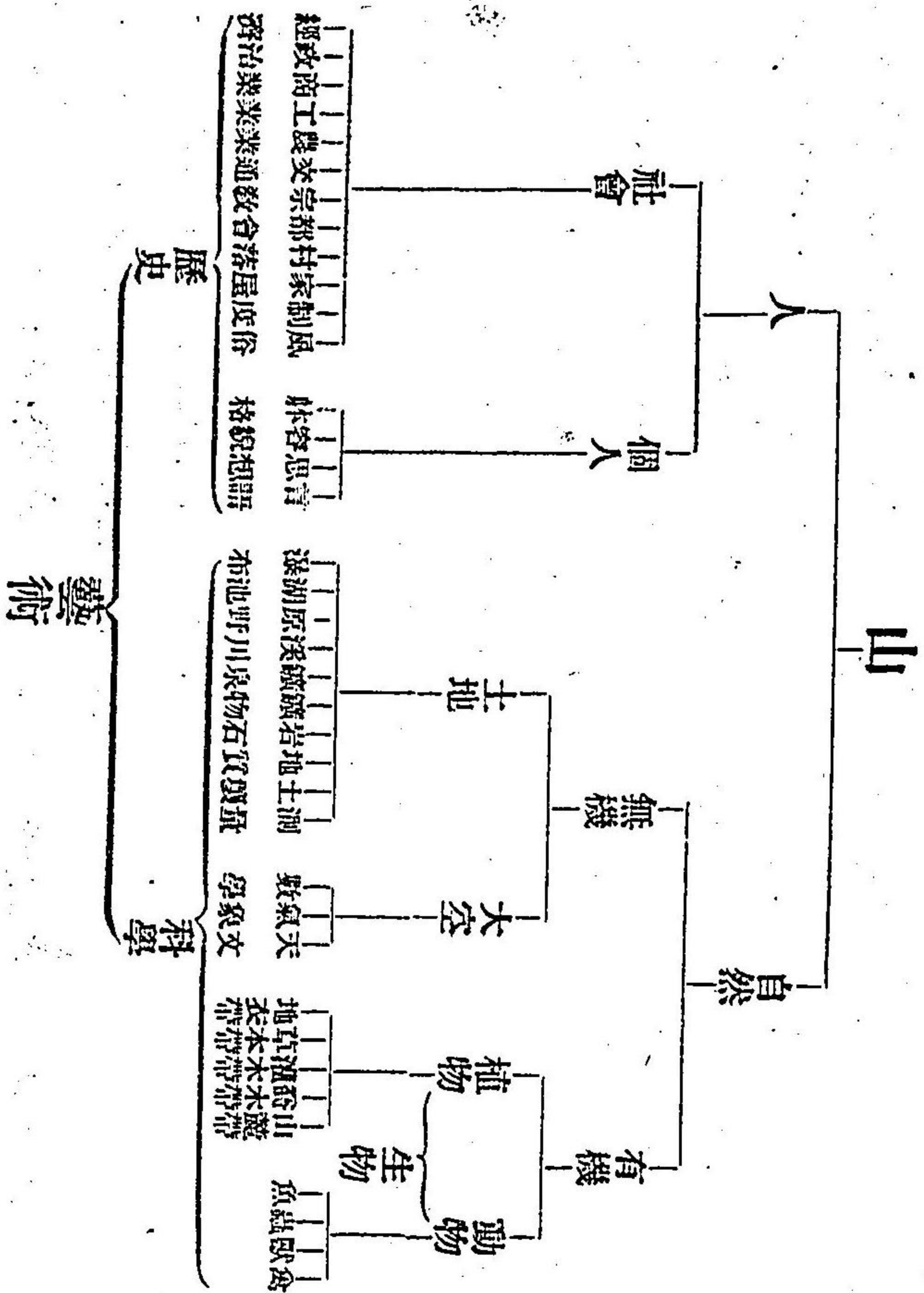
果して然らば商業は如何、想ふに商業とは貨物の交換のみ、その交通道路の難易遠近に據りて、幾多曲直線の錯綜せる地圖を編せらるべきものとす、今卑近の例を取らむ、本會路を旅行するに鳥居峠までは東京麥酒、惠美須麥酒の類を見れども、峠を踰えて福島に到れば、鬮ぐところ悉く朝日麥酒ならざるはなし、蓋し峠の以東は松本を通じ、松本は上田、甲府、或は直接に東京を通じて、關東の製品多く、以西は名古屋を通じて



關西の貨物を輸入すればなるべし、鳥居峠海拔四千尺餘と雖、信濃よりするに甚だ高からず、しかも猶經濟的分水線となること斯の如し、些事と雖注目に値ひせざらんや。山既に生産及運輸に多大の關係あり、人口の配附に又多大の關係あり、政治上に影響するもの尠からざるは言を俟たず、若し日本をして山嶽少からしめんか、川も亦多からざるべく、隨ひて國土の自然的區劃も煩瑣ならざるべく、之を古に徴するも所謂戰國時代といひ、封建時代といひ、彼が如く蜂巢的割據をなさずして止みたるなるべし、文明史に於ける功過共に最も多く之を擔ふものは天にあらず、人にあらず、而して山なり。

山が小にしては一村、大にしては一國一州、又全國に及ぼす諸問題を、人文地理學上より立論すれば、豈如上の小言のよく竭くすところならんや、只だ本篇の趣旨は山を主とし、人を副とするに在るを以て、行文亦山に委しく、人に粗からざるを得ず、こゝに本章を終りていふ。

山之を析すれば萬有科學、之を綜むれば詩、而して藝術に資すること天下何物か山に若かむ、今姑く近代學者の類に倣ひ、論理的分類法に隨ひて、如上の鄙説を小表に作り、左に示す。



山崎 綱三



未だ山を識らざる(恐らくは二生涯山を識る機會を得ざるべき)東京人に對して、今俄に山に登れと勸めなば、彼は耶馬溪記中の僧夫の如く呆然「山有何好看」と反問するや必せり、即ち彼を拉し來りて飛鳥山の一角に投脚せしめよ。

飛鳥山は海拔僅に二十餘米突に過ぎずと雖、衽席の下は所謂關東平原、土地曠蕪にして漠々幾十里、一勺の土も潤膏を帯びて勸犁入らざるはなく、「武藏野」的丘陵は取次に緩起斜伏すれども、畦畦井井區域を分ちて、林樹處々に錯落し、その間を縈回せる街道ありて、市廛或は層々として列なり、驛樹或は一齊の距離を以て俯仰し、人口こゝに密屯し、鶏犬の聲相應じて脚下より起り、製紙會社硫酸製造所の烟突は煤烟を拖いて、日光に反映するや、惨淡として空を昏ますものありと雖、更に眼を放てば驛外、林外、雲外、平楚盡くるところに至りて千山の環立となり、或は縦、或は横、傾仄せるあり、兀立せるあり、人烟歛まりて雲落つるところに其勁蒼なる皴皴を疊みて、所謂米點の山を畫するものあるを見ずや。

我暫く彼のために指願して之を語らむ、左に扁平なる鈍圓錐形を成せるものは上毛三山の一なる赤城山(最高點海拔六千四百尺)にして、傾斜緩かなる裾野を曳き、その右

に渡良瀬川の灌漑域を抱いて、下野西部の巒峯疊嶂を麾き、更に右に當りて日光山麓の盟主男林山(八千三百尺)と犄角の勢を作し、高原山より次第に陵夷して曠漠なる那須野を介し、遠く東奥の天に通ずるを見る。

更に北東より東方に頭を回らせば、那須野を隔て關東平原の最東端に、外廓を成せる常陸の入溝山系、及び少しく離れて純粹天色の筑波山を仰ぐべし。

是に於て飛鳥山を下り、歩を移して板橋驛の東を過ぎ、赤羽根臺に上れば、更に「三枚嶺」の自然畫に接すべく、即ち赤城子持二山の間にかまれる坂東太郎(利根河)沿岸の窪口八字に開くところに隨ひ、新潟街道に通ずるところより中央大山系は蜿蜒逶迤、こゝに拳の飛ぶ如きシベリア嵐を屯すれども、滿を持して放たざる弓狀山嶺、突兀として摩空挿天、自ら日本の脊梁を成せるところを冥想すべく、榛名の左に當りて鋸齒狀を成せるは集塊岩の妙義山(海拔三千八百尺)及び關東平原最西端の外廓を成せる秩父群山の、或は榛の梢に懸りて風の落ちんとするより軽く、或は窪然たる沮洳に入りて萼菜より小なるを見るべく、秩父の蠶業、上毛平野の嘉蔬美菜、足利桐生の織工業、上總安房の漁業等に思ひ到れば、忽焉として造山史、造原史、又人間繁殖史



數千卷を觸手に開展する感なきを得んや。

丘陵の域にすら未だ達せざる小臺地に登る、猶空間的よりするも、時間的よりするも、囊括の量斯の如く夫れ大なり、若し二十米突の高さを十倍すれば如何、將た五十倍し、百倍すれば如何、我は信ず、飛鳥山道灌山より假令櫻樹を伐り去るとするも、その二十米突の高土を有するを以て、到る者自ら蹊を成すべきを、淺草の淺雲閣、猶以て東京市の半を俯瞰するに足る、況んや飛鳥山道灌山愛宕山鴻の臺をや、又況んやこれらのものを幾百倍したる山嶽をや。

乞ふ本題に入りて登山の快樂と利益とを論ぜむ。

### 一 山の引力

天我を覆ひ、地我を載す、この間に立ちて二極の連鎖たるべきものは山なり、高きものは其性質として本來人を魅する力を有す、高きものは何が故に然るか、斯の如きは心理上微妙の問題に屬して輒ち拆く可らざるに似たりと雖、強ひて一解を下せば、人の到達し得べき圏外、即ち人が自ら理せんとして不可能の置位に在るもの、更に適

切に言へば人間の干渉を容さずして、造化が専一支配の下に立つものは高きもの、特權なるが故にあらずや、海の浩渺なる、川の清潔なる、花木の美、孰れか人を娛しませしめざるはなけれども、舟すべく、筏すべく、攀づべく折るべき者は、日月星辰等に比して壯嚴を缺く、然れども海の如き、其暗紫色濃藍色の水を透して、大窪するところは、之を視ること愈よ久しくして、波系糾紛、水は流動せる音樂の如くに鳴り、光を搖り出す聖籃の如くに暉き、華やかなる夢の溶けては又結ぶが如くに澄む、吾心は一箇の尖れる鉛錘と化して、水中へ深く、深く沈み行くとき、恍として人間にあらず、古人が玻璃圓閣の「龍宮」を這裏に空想したるもの、偶然にあらず、益々知る、深きものも亦人間の到達し得べき圏外に在りて、初めて壯嚴視され得べきを、河は淺さがためにこの魔力を缺く、今同一の論據に立ちて水を觀するに雲の如き霧の如きは、素と是れ地上の水蒸氣に過ぎず、其間何等の崇高なきに似たりと雖一旦上騰して所謂「雲の峰」(雲の峰いくつ崩れて月の山、芭蕉)となり「霧の海」(安井息軒の日光紀行にいふ、曉雲埋谷、如積雪、翠嶺環繞、中峙數島、宛然海也、嘗讀黃山志、云、雲海世多有焉、而黃山最勝、以三十六峰皆修而尖也、蓋修則雲不能沒、尖則彼此離立、島嶼



灣汀、自成妙趣、此雖不能如黃山之多、而尖修之峰、布置自然、予少習山行、而始遇此奇、不覺絕叫、既而足踵漸下、雲脚漸上、遂沒海中、四顧茫然、不復知身在萬山中、益下、潛出其底、遙望一村、小溪帶之、兒女鷄犬群相嬉傲、疑以爲仙境と、多量の水蒸氣を醗酵せる日本の山嶽殊にこの觀に富む、飛驒國丹生川村の袈裟山千光寺の如き、輪奐の美なしと雖、古樸氣を屏けしむ、夏日曉天雲霧の收まるに方りて、先づ御嶽乘鞍嶽等の巔を望み、諸山漸次に嚙响を露はすや、宛として數十の島嶼、海上に碁布するが如し、山地の奇觀蓋し之に加ふるなけむ、土人之を「霧の海」と稱すとなりて崇高一味人に迫るものはその現世人間のものにあらずして、佛典中の神秘的光景なればなり、而して實は高きが故に依稀として Supreme Power を模索すればなり、山陽の幼時、天を仰いで曰く微妙なる説と、啼泣之を久しうしたる如きは、この神來の機に觸れたればなり、然れども今の科學の與ふる力に據りて、人は到底日月星宿に咫尺する能はず、太白が「人攀明月不可得」の一句を敗紙と共に葬むり得ずと雖、渺くとも地球上に在りて最も天に近き山に登り得る幸福を有す、「竹取物語」中、帝の勅に「つれの山か天に近き」と宣はせて、不二山を選びたる如きは、日本人の欺かざる落想なり。

曾我耐軒初め越中に遊びて神通川の梁上に立ち、その清澈の水何處より來れるを問ふて、飛驒の峻山突兀目を障げて天外に曼衍するを目睹し得るや、俄に旅程を變じて飛驒に入り、遂に「幽討餘錄」二卷を齎らして歸り、本邦亦陸放翁の入蜀記なきを患ひざるに至れり、蘆花徳富氏は肥後の人、居常阿蘇山を仰ぐや、記を作りて曰く「余が幼なるや、阿蘇は余にとりて一の恐怖なりき、其赤き山を望み、其立騰る烟を見る毎に、彼山には地獄あり、烟は地獄の火なりと思ひぬ、稍長じて地理を習ひ、噴火山の理を聞くに及び、恐怖は余を去りしと雖も、阿蘇は依然余にとりて一の秘密なりき」と、所謂「老杉挾路無佗樹、缺處時々見阿蘇」もの、大津街道を往還する旅人は日夕誰か一の秘密を感ぜざるべき、抑も又「鹿子城中家幾萬、無窓不納紫屏風」と謠はれたる櫻島が、鹿見島市に臨めるは、恰も筑波山が關東平原東部の人に於ける如く、箱根山が相模人士に於けるが如く、富士山が東海道往復の人に於ける如く、漠々平田綠蕪に接する中に立ちて、空青天を撐げ、或は瑩然として白きや、人その屏顔を戸々の窓に納れて日夕之と親灸す、居常冥々の間感化を受くるや大なり、且つ山は花卉の如く、人に



私有の墻壁を設くるを許さず、流水の如く堤防を築きて視力を妨ぐるを許さず、諸天體の現はるゝ如く刹那的にあらず、いかなる時に於て之を看るも、いかなる場合より之を看るも、いかなる人にして之を看るも、遠近高低の差こそあれ、不可思議なる一道の引力あり、忽焉として人を吸ひ、而して之を魅す、是に至りて山の全身は色にあらずして火なり、火にあらずして靈なり、尙ふべき哉。

## 二 登山は青年壯年の時代に限らる

天は或時代を限りて人間に特殊の快樂を附與す、青年の運動遊戲等に於けるは、其特權の一なり、等しく運動といひ遊戲といふ、人各嗜好あり、端艇を競ふも球戯を闘はすも皆可なりと雖、これらは先づ相應の對手を作らざれば試み能はざるところ、且つ其遊戲たる比較的單純にして、猶且或は劇甚に過ぐるあり、夏期六旬の休暇の如きに、毎日反覆され得べきにあらず、況んや識を收むるの廣狹、學に資するの大小、亦自ら遊戲の中より得來るを思へば、諸遊戲の如きは旅行殊に登山に及ばざること遠し、昔者春秋の魯國、日に事無きを尙ふ、太公魯の前途を下して曰く、後世深く弱からんと、

我邦の青年の如き、その勤勉なるものは暗窓に危座して額を圖書堆裡に没し、面色幽鬱にして生氣なく、その惰弱なるものに至つては骨牌抹茶、幾んど丈夫の籍に入らず、太公をして之を視せしめば何とか言はむ、若し夫れ粗野慥慥、街頭に狗吠猪々の狂態を作し、以て書生の元氣となすに至りては、愈よ出て愈よ下れり、青年は一國の元氣なり、國民元氣の消長は國家勢力の盛衰に關するや甚大、スペンサア氏嘗て亞米利加に遊び、其人民が行樂の中、念頭猶生活の問題を離れず、居常仲々として竟に心を縦にして遊ばざるを見て、米國の前途を弔し、英人の「能勤能遊」的態度を取らんことを勤めにき、哲人の言邦人亦聽いて之を容るに吝なる勿れ、由來邦人の患ひは能く遊ばざるに在り、遊んで善遊を選ばざるに在り、抑も天既に夏を興へて休養の日を人に賜ふ、既に日あり、亦休養の途なかる可らず、是に於て自然あり、而して自然の王を山となす、自在に自然の王に呎尺し得るものは、筋肉の發達中なる青年、若しくは發達の頂上に在る壯年のみ、富岳の如き古來何人も踏破せざるなき山は、白鬢の人猶登るを難んぜざれども、信飛加越境上の如き崇嶺に入りて、造化千古の太秘を搜らんとするに當りては、類齡夫れ之を如何せむ。



### 三 登山は体力を養ふ

登山が筋骨を鍛錬するに屈強なるは、言を俟たず、富士大山日光の如く能く拓けたる山路を上下するは、呼吸器に異常なき限り、さまで力を費さずして可なりと雖、一たび人足未到の深山幽谷に彷徨すれば、石上の露臥、樹下の天幕、既に容易にあらず、手に唾して石道を攀ぢ、或は腰に纏して断崖を跳り、或は土を壓して水を搾り、或は橋梁なき迅速危石を抱いて渉る等、手臂一時に使ひて猶忙がしきを感じずんばあらず、加ふるに登山の際は鬆粗なる塔岩の頓墜落するあり、一たび之に當らば五臓は劫灰となつて飛ばんとす、故に戰焉として手に微頭なき能はず、而して眼は決して些曇ある可らず、一意専念肉躰を保護するに在りて腦中何等の胡思亂想を雜ふる餘裕なきが故に、筋骨最も多く發達する機會を與ふ、既に登山を了して民舎に就けば、平生一粒の米を半截して仔細に之を吟味する神經濟と雖、立ろに大塊肉を喫し、大椀酒を仰いで猶意氣の豪なるを覺ゆるは何ぞや、「朝夕鹿狩狐狩して、山林を家と思つて馳せ習ひたれば、乗るとは知れど落つることなし、坂東武士の習にて、父が死すればとて子も

引かず、子が討たるればとて親も退かず」といへる疵跡を養ひ得たるもの、他日雄心落々、一たび足を舉ぐれば六十餘州を糾合して、之に敵するを難んずるもの、豈偶然ならんや、登山難、登山難、出入必ず車馬ある統袴子弟に向つて之を語るに堪へず。

### 四 登山は志を大にす

都市の人、平生隘湫の巷に、蟄居するに慣れたるや、塵は則ち穢塵、雨は則ち片雨、猶以て膝を抱いて髭を捻るに足れりとなす、偶ま筆を蒙して郊外に遊ぶあれば、原頭の嫩葉細枝、猶以て千言を題するに剩りありとす、ひたすらに繊細を悦べる平安朝時代の、所謂月卿雲客の審美眼に入りたる須磨明石の如きが「名所」視され、今日に至る迄詞人輩踏習性を成せる間は、人間遂に大志なきなり、今や都會といひ、村落といふ、人の呼吸するところ必ず猜疑的瓦斯を吞吐して、瀬波の蕩漾既に一日にあらず、骨人何の處にか浩然の氣を養はむ、今若し高山に登れば、宇内の萬物は我膝下に跪き、薺の如き千萬樹、頽首して命を聴かざるなく、我は是れ一切人天の王、髻を摘んで山を搔ぐべく、帯を引いて川を提ぐべく、某の市街は掌上の螺紋、之れを分解するに何の暇



を費さむ、某の村落は又局面の基子、之を聚散すること極めて易々たり、昨と今と靈蠢立るに地を易へて、人間未だ嘗て之より恢偉跌宕ならず、是を以て彼の骨力崢嶸なる高青邱は、陽山の絶巔を踏みて豪語すらく『我登此山巔、不知此山高、但覺群山總在下、坐撫其頂同兒曹』と、所謂馬を五山の第一峰に立てたるとき、比叡山より皇城を俯瞰して、壯哉大丈夫、不當宅此邪と謂ひたるとき、アルプス山頂より伊太利の市街を呵したるとき、箱根山上より關東平原を指して江戸を乃祖に約したるとき、天下懸りて直豎一指頭に在り、山は人間を大にす。

### 五 登山は冒険の氣象を養ふ

登山中は或は沙石面を撲つことあり、或は冰雪累々、割裂縫合せるところを匍匐することあり、或は火奴を擦して洞穴に入り、或は森林に彷徨して蛇尾を踏む、何人も冒険なくして山遊する能はざるや、他日英氣潑瀾の大業を成就する素養の、此間に涵養さるゝもの蓋し尠からず、是を以て外人のアルプスに登るもの、年々死傷者を出だして悔とせず、或は歩を失して千仞の谷底に墜ち、或は過ちて氷河の陷孔に没し、或は

顔雪に遭ひて岩石草木と共に蹊底に墜ひ去らるもの、其例一にして止まらず、かのケムブリツヂの教授にしてバイオロヂの大家、バルフォル氏の如き、平生矯捷遊戯に長じ、最もクリツケットの技に巧なり、先年瑞西の氷山を隣攀せんとして、嚮導者と共に歩を失して蹊底に落ち、俱に之に死す、年僅に三十一、英國フロンシヌツクラス卿の如きは、四十年前アルプスの槍ヶ嶽とも稱すべき、マッタアホルンの絶崖より墜死して、今に至るまで其骸を發見する能はず、自然の法則によりて氷河と共に山麓に推流し來るを、手を拱して待つのみなりといふ。斯の如きは暴虎憑河の態に似たれど、西人の登山は斯の危険あるが故に決して衰へず、昨年(二十七年)の統計によれば、アルプス遭難者三百人、一昨年は百四十八人なりしと、印度のヒマラヤの如きは、海拔二萬九千二英尺、富士を二倍して且つ加ふるに碓氷峠を以てしたる高度なるを、エツエレストなる人三角測量法を以て算出したるを以て今猶 Mount Everest の名を冠せられたる如き、亦讚嘆に値ひする冒険の結果たらずんばならず、其他佛蘭西西班牙兩國界のピレニース山の如き、南米アンデス山の如き、北米のロッキイ山の如き、海拔一萬六千尺以上二萬三千尺以下の間に在りて、千秋の雪を空に挿み、山頂より山腹までの



深河は厚さ幾百尺の水河を以て充たさるゝや、鶴嘴を以て道を拓き、且つ登る、而して夜間は永上に偃臥する如き、困苦殆ど名状す可らずして、冒険者年々多きを加ふといふ、英國植物學者ドクトル、フッカーがヒマラヤ山の一峰マウント、ドンキア（海拔一萬八千四百尺）に登り、ババリヤの人シニラギントワイト兄弟が同山脈中のイビガミン（海拔二萬二千尺）の高峰を窺めて人間の到達し得べき最終點を示したる、フムボルト氏がアンデス山脈を探險したること等は最著名の冒険登山として世に知らる。人間は元來いかなる高さにも堪へ得べきものなりや、野中至氏の談によれば富士の山頂も五合目も、寒氣に於て酷だしき差異あるを見ず、只露土も雪ならざるは氣壓の點にして、氏の人事不省に陥りたるは氣壓薄弱の然らしむるところならむと（雪中ノ登嶽に據る）此問題に就き、伊太利の博士モツソー氏は、嘗てアルプスの最高峯モンブランに登りて、猶苦痛を感じざりしため、一室を閉して空氣を排し、稀薄の度海拔二萬四千三百七十呎に至りて、遂に試験を中止せざる可らざるに至れりと、而して是れ雪山の最高峯、マウント、エツエレストより低きこと凡そ一哩なりといふ。顧みて本邦は如何といふに、一萬二千尺の富士を仰いで俗宗とする山嶽の、深、高、

長、大、之を以上の諸高山に比すれば番に兒孫のみならむや、而も富士を除いて幾何か金剛杖の極印を山膚に存せる、御嶽立山白山等、五指を屈すれば殆ど盡くるにあらざるや、且つ本邦の山嶽たる、夏日に氷河あるなく、積雪あるなく、大抵山頂には神洞佛堂、或は石堂等を存し夏期は番人の滯留するあるを以て、饋餉を托すべく、寛眠を貪るに足る。偶ま是なしとするも、山麓より絶頂まで七里に達するは稀有に、一たひ山を下れば假令山輿を通ぜざるまでも、猶郵遞脚夫の日に鞋痕を絶たざるあり、隨ひて道路の往還概して容易なるをや、近時邦人尺寸の土地を去來すれば即ち紀行を作り、往々某の水源探險、某の山嶽冒險といふ類の文字を濫用す、偶ま大人の一嘆を買ふに足ると雖、「或物は皆無に勝る」我は益す其所謂探險、冒險の多からんことを渴望するの情に堪へず、故理學士關谷清景氏が、磐梯山破裂の報を得るや、友人の切諫を聽かずして登山し『帝國大學紀要』に光彩ある文字を寄附したる如き、或は熊本の大震に死を決し、擔架を命じて霧島山に登りたる如き、斯學に貢獻する意氣の切なる、儒夫をして觀愧穴に入らしむ。想ひ起す、我三月初旬風雪を衝いて箱根山中を出て、薄暮御殿場に到りて一旅舎に草鞋を解くや、偶ま爐邊に一外人の厚毛皮外套を蒙り、雪



靴を穿ちて椅子に倚り、地圖を按して通辯と談せるを見る、剛力二人傍に侍せり、主人余のために竊語していふ、明朝富士山嶺を窮めんとして、弊館に來り投ぜらる、通辯を介して其無謀の擧たるを切諫すれども、斷乎として肯んせずと、余も其行を壯として心竊に之を危みぬ、兩三日の後静岡の一新聞紙は、彼が寒冽の候登山を敢行したるの狀を審に記せり、余は抵掌快を呼びぬ、或は之を以て單に一の好奇心に過ぎざるを議するものあらむ、吁嗟好奇心乎、好奇心乎、コロムバエスガ絶海の大陸に航したるも、スタンレーが荒漠不拓の亞非利加に入りたるも、博士ナンセンが北極の氷洋に遠征を試みたるも、或意味に於て好奇心を大用したる結果にあらざるはなし、只庸人は漫然として好奇なり、而して傑人の好奇心は確信の上に立つ、我は好奇心を絶愛す、殊に山を對境として冒險の氣象を砥礪せんことを至願す。

## 六 登山は耐忍力を養ふ

耐忍は豫算の遠ひ易き所に於て、最も其潜勢力を發揮するを見る、晴は乍ら風雨となり、一日の旅程は二三日の滞在となり、未だ會て思ひ到らざる困難に遭遇し、平地に

於て經驗したることなき疲憊を覺ゆ、敢爲の氣象は意志の強固に伴はざる可からず、而して意志の強固は耐忍を缺いて獨り立たざるなり、諺に所謂『可愛い子に旅させよ』といふもの、この苦樂を舐めしむるに在るなるべしと雖、寧ろ愛兒に登山を教ふるの適切なるに如かず、登山は華美虚飾等の念を去りて、粗衣糲食も之を嫌はざることを、美の鹹さを以て甘しとする氣風を養成す、被髮徒跣、亦悔いざるもの、總て忍耐に在り、外人かアルプスを登攀するや、妙さも數回、多きは數十回に亘りて徒勞に止みたるもの比々として皆是れ、或は路を失ひて半より下り、或は辛楚に遭遇し、辛うじて身を以て脱する如きは、一々擧ぐるに堪へず、初めてアルプス山脈中の最高點モンブラン(海拔一萬五千餘尺我が富士を挺ぐこと凡そ三千尺)の絶嶺を窮めたる佛蘭西の碩學、ツ、ソツシユール氏の如きは、二十六星霜の間、三十回の登攀を企て、悉く蹉躓し、而して屈撓せず、益々登山の順路を搜索し、漸く千八百八十七年(明治二十年)八月に至り、二日を費して同伴者二人と俱に、絶嶺に達するを得たりといふ、十九世紀史上歐米人が靈界物質界、共に無比の發達を遂げたるものは、全くこの「根強さ」より打ち出したるに在り、彼等は平生の遊に「山」といふ武器を用ひて自ら筋骨意志を鍛



練陶冶しつゝあるなり、邦人焉くんぞ師倣せざる、抑も本邦の山嶽たる、アルプスの高きに遜らざるを得ずと雖、峻秀天を衝くもの各國の境界に參差相錯はる、就中富士帯を横斷し、中央大山系を縦斷せんとすれば、山立せる怒濤を踏んで懸崖圍繞中の港灣を濶歩する仙術なかる可らず、其危険はアルプスと伯仲の間に在り、且つ大岳崇嶺の構造は、富士筑波の如く平野中に孤聳せるもの一二を除きて、概ね起伏層重せるを以て、一山を踏破すれば又他の一山を翹起すること、東家の屋梁を攀づれば直に西戸の柱礎に接するが如きものあり、御嶽の如き、立山の如き、乗鞍嶽の如き、白山の如き、皆是れにして、其最高點に尖立せる參謀本部の一等三角測量標は「到着點此處に在り」と信號す、而して登山の客絡繹之を望んで容易に到る能はず、最後の目的は額より鼻の間に懸垂して、終生之を逐へども遂々然として手捉する能はず、世態往々斯の如し、山道何ぞ幾んど世路と酷肖せる、人に耐忍を教ふる所以なり、

### 七 登山は人の思慮を周密にす

日常の遊戯と雖、初めより徒爾にして行はるゝはあらずと雖、殊に登山に於て多大の

準備を要す、而して準備は注意を喚起し、注意は周匝を要す、登山の冒險なることは前に之を説きぬ、出立に當り、若しくは登山に際し、構思に一點の逗なく、一絲の漏なきを期するも、事に該れば必ず何等かの遺算あるを免れず、例へばフランネルの襪衣と縮衣との得失如何、食料飲料の豫算は如何、晴雨計寒暖計磁石望遠鏡等はいかなる範圍まで利用するを得べきか、又天幕を携ふるものは其使用法をも併せて研究せざる可らず（大風雨の時は如何、支柱たるべき樹木の乏しき時は如何、支柱ありと雖地盤の礫礫を如何すべき、等の問題の如き）又急湍はいかにして之を涉らむ、水竭きて渴慰し難き時は如何、毒蟲に噛まれ、或は路を失して森林に入り（信濃飛驒の如きは俗に「官林巡り」と稱し、一たび森林中に迷ひ入らば、喬樹長幹密翠撥緑、頭上を蒙蔽して日光を障げ、煙霧時に細雨を涌かして遂に昏迷、人を死すことあり「鑛山道」亦然り、車轍馬糞等に欺かれて深く入れば、大路小路錯綜して鼓の緒を調べたる如く、二岐は三叉となり、三叉は四分し、五裂し、人遂に廢坑址に漂泊して、或は餓死を免れざることあり）或は山頂の空氣、稀薄となるに隨ひ、血液の循環急速となり、脈搏の數は増加し、又衄血するときはいかにして之を治せむ等、種々雜多の諸問題は十を



以て算ぶべく、或は豫備して、或は不意に登山者の解決を俟てり、理性的動物たる人間が益々其理性を啓發するのはこの「注意深き」一點に源を派せざるはなし、かの白衣の道客が一枝の金剛杖に信かせて、高山を跋涉するは、素と迷信に基くが故に、他の方面に於て何等の準備なきに似たれども、七寸の鞋痕を印するところ、必ず地味の肥瘠、作物の貧富、或は五穀生育の狀態灌溉の方法等に關して、一種の修學旅行を試み來る、彼等と汽車に同席したる人、或は其窓外の天然的作品を問題として、相互に實習科的講話を交換せるを聞くことあらむ、況んや「六根清淨」の咒文以上に、知識を有する人間に於てをや。

## 八 登山は自然と親しむ

自然に親しむの途、又山に登るより善きはなし、風雲水雪溪流瀑布花卉禽獸一體にして之を兼有するものは山なり、平地に在りては幾里にして丘陵、幾里にして河、幾十里にして瀑布、若し一齊に之を併觀せんとすれば、奔命に疲るゝもの、一朝山に躋りて輒ち満足を與へられざるはあらず、殊に山頂に「大」字臥して朝暉夕陰中の天人を以

て自ら處るに至りては、樂斷じて帝王以上に在り、ラスキンの自然を描くや、實に空前の巨匠なり、山に銘して曰く「山は自然の景色の始にして又終なり」と、真にこの意味を解する人は、尤も自然に親しめる人ならざる可らず、先づ我を導いて山麓に到らしめよ、白雲は碧空と襯して氷山の破片海上を浮游するが如きを仰がむ、既にして山中に入れば山頂は深緑色の五葉松、又は偃松多く、山腹以下は淺緑色の山毛櫸等潤葉樹多し、同一綠色にして濃淡判然區劃せらる、一幅天然の妙手に成りたる彩色地圖を天空に懸く、加ふるに赭黝色の岩石を攀ぎて、樵、落葉松落々として起仆する陰より急湍は石を抱いて傾斜地を奔り、飛沫は羚羊の跳躍する如く、その水涯に俯して咲ける花は人面より大に、山下に於けるものに比して輪概ね倍、色も較や濃くして暖室花の如き「熱情」なきものにあらず、況んや高山に在りて春花植物は平地に後れて初夏に咲き、秋花植物は平地に先ちて仲夏に開花するが故に、全年の百花譜を一時に展開し來るをや、且つ諸ろの色彩中、紫色、董色、濃青色は、山膚にして甫めて染めらるべき特色にして、藁屋、耕田、黄燕、天空、皆山の紫影を浴び、或は之を吸収して純潔一層を加ふ、遂に山巔に到れば、熔岩の赭褐色、焦沙の黄褐色、累々として寸青を見



ず、所謂「一日行林少日穿、一朝寸草不生嶺」(釋虎關)なるもの、是に於て知る自然は一大彫刻家の如く、一大畫伯の如く、鑿を揮ひて頑石に生命を彫り、韻致なき粗紙に美彩を刷きて、之を人間に賦寄したることを、饑ゑたるものには食を供へ、渴したるものには水を與へ、疲れたるもの敗れたるものに慰藉を與ふ、我は是れ江湖流浪の一瘦客、山に對する毎に羸殘の卒、故君の墳塋に跪き、泣然として落日に佇むの感なくんばあらず。

### 九 登山は同心協力を教ふ

登山は天外の漂流なり、同舟の難吳越猶且互に救ふにあらずや、已に吳越にあらずして金蘭箒中の人を契けて登山するに當りてや、智者は其智を貢獻し、學者は其學を發揮し、強者は其力を弱者に致して、能くこの小探險小遠征を圓滿に遂行することを計るは、人情自ら然らざるを得ず、山國島國の人士が動もすれば打つて一丸となり易き所以は、此性情を大用するに由る「旅は道連れ」といへど、苦樂を偕にすること、豈平地の旅行の能く教ふるところならんや。

### 十 登山は學術研究に資す

登山いかに筋骨を鍛練するも、いかに冒險の氣象を涵養するも、いかに忍耐力を醗酵するも、いかに自然に親しむも、茫焉として雲烟過眼視せば、其獲るところ兒童の遊戲に比して甚だしく多きを加へざるなり、旅行殊に登山に於て、特殊の便宜あるは、學術研究に資するに在り、凡て高山は空氣の密度、壓力、溫度、氣象等、平地と大異なるのみならず、凡百の自然現象より動物植物分布の状態、地理地質天文等、諸學科に於て、最大趣味を有するや、物理學者も登り、植物學者も登り、動物、地質、地理、天文、氣象等を專攻せる學者皆山を愛し、登山を嗜まざるはなし、チンダル氏の如き、フンボルト氏の如き、フツカア氏の如き、グレイ氏の如き、皆親しく高山を跋渉して、各専門學科の研鑽に他念なかりき、氣象に就いて之を言へば、從來高層氣象を研究するため(而して高層氣象は下界の氣象と相渉ること、本末の關係あるを忘る可らず)或は輕氣球に乗じ、或は紙鳶を放ちて一時の觀測を僥倖し得たるもの、今は高山の絶巔漸く測候所の設立せらるゝありて、一日一月一年氣象變化の大體を知了するを得たり、



野中至氏の富士山測候所は不幸中道にして廢止したりと雖、頓野氏が山口の風翔山頂九百米突に設けたる、山階宮殿下が筑波山頂八百七十七米突に御設計ありたる、皆人意を強うするに足る(地上三千米突の間に於て、毎百米に温度〇、五度を遞減すといへる極めて簡にして又不易なる法則は、かくして初めて知り得たるなり)若し夫れ植物を採集せんか、高山に分布する植物の状況は、地球の緯度分布に於ける如く、主として氣温の變化に基き、氣温は緯度並に高度の差違より幾變す、例へば暖帶地方より南北兩極地方に向つて赴く時は、平均一緯度を距る毎に温度は毎に攝氏一度を下降するを常とするが如く、高山に登るも高さ百五十米突乃至二百米突毎に温度の同減を見る、故に富士の如き高山に登攀して、仔細に點檢すれば、其發生植物分布の状況は、該山麓より東北地方を遊歴して、北海道千島に到る水平線的植物帶を、一目了るを得べし、羽後の鳥海山、信濃甲斐の兩駒ヶ嶽、信濃御嶽、加賀の白山等は又多少五帶を完備し、羽前の月山、下野の男體山、佐渡の金北山等は草本帶に達し、美濃の惠那山、伊豫の石槌山等は灌木帶に及び、相模の箱根山、紀伊の高野山、上野の榛名山等は、喬木帶に止まる等、變化極めて多様、又動物は如何といふにソツシユル氏がアルプスの峻峯に

攀づる途次、略ぼ一萬五千尺の高度に於て、二羽の蝶を發見したりと云ふ如きは、假令勁風のために下界より吹颯せられたるものなるべしと雖、これらの小動物が、いかなる高度まで生息するを得るかの疑問を偶然に解釋し得たらざるや、而して空氣稀薄なるが故に、夜間に於て仰視され得べき星の數は、平地に於て見得るよりも多く、且つ鮮明なるを以て、天文の觀測に可なり。其他の諸學科、一々引例せずと雖、いかに多方面多趣味の問題が、山に據りて提供されたるかを知らむ、書生山を措いて何の處にか遊所を得む。

## 十一 登山は自我を脱す

然れども學術研究に資すといふ、幾分の素養あるものにあらざるよりは、普遍に嚮望するを得ず、且特殊の目的は既に羈絆となりて身邊に繋がる、かくして山に登るものは腦裡に些の雜念を去らざるが故に、未だ「山」教の大乗に入らざる讖を免れず、登山の極致は山と同化するに在り、山と同化するとは自我を脱却して、造化が掌中の純なる坩堝に跳り入るに在り、山麓に佇みて峻峯の雲を截り、崇嶽の天に擡するを仰ぐ、



身を以て彼に托せむとするの念、未だ人間を脱せず、既に山中に入る、雲は肘腋の間より生じて人は漸く自己を超脱すれども未だ山を忘る能はず、一旦絶巔を窮めて、その一角に立たんか、河漢低く垂れて、長烟一空、大山萬丈の影落ちて彌望涯なき滄溟、自ら開く、山は人乎、人は神乎、空々侗々として天上天下無一物なり、是時を以て山に同化すといふ、自我を脱却すといふ、ベンガル峠に立ちて人世の榮枯常無きに啼泣したるバイロンよ、爾猶執着の邪相を存す、我が友にあらず、所謂天地一浮雲、此身乃毫末、忽見無端倪、大虛可包括と浩々長歌したる李白に至りて、初めてインスピレーションに打たれたる人靈の清暎を聴く、獨關の乾坤、我乞ふ君と與に往かむかな。

## 十二 登山と長壽の關係

富士といはず、木曾御嶽といはず、所謂道者輩より靈山視さるゝところには、必ず五度登山、八十回登山、報恩碑等の大石を路左に見ることあるべし、(富士山にて見たる碑中百三十三度と刻せるものあり、最多の登山數なるべし、之を白衣の道者に聞く、三十三度以上登山せるものにして、初めて「先達」なる稱號を獲、益す多くして「大先

達」となるや、大に郷黨の間に重んぜらる、但し三十三度以上は、一回の登山を四度に算ふ例なれば、三十三度以上の百度は、實は二十五回の登山のみ、即ち所謂百三十三度登山も、之を通算すれば實は五十八度なりと。而して其の養主の年齢を問へば、概ね耳順又は古稀に至る、かの山路の嚮導を職とする富士山の「剛力」<sup>△</sup>趣中立山の「中語」<sup>△</sup>の如き、我等平生都人士中の健足を以て自任するものと雖、山頂に近けば呼吸局迫、頭痛岑々たるものあるにも係はらず、十貫目以上の荷物を擔ひて、毎年幾十回山を上下するに毫も憊色なきは、其體力の健孱殆と同日に語る可らざるを想ふべし、是豈迷信の力與りて大なるもの或はあらむ、然れども又登山者と壯健則長壽の關係を否定す可らざるなり、因つて想ふ古老往々山樵木客の不稽を説く、蓋し支那人の著書を妄信して、之を現實に求め、壯嚴なる背景を山に藉りて、初めて附會し得たるものならんか、松平定能(甲主)撰するところの『甲斐國誌』に淺尾村の樵夫、孫右衛門なるもの、仙話を載せて曰く、孫右衛門好んで山中に遊ぶ、後仙となりて生死を知らず、傳へいふ、茅ヶ嶽<sup>マカガ</sup>曲ヶ嶽の間を徂徠して、或は大石を深谿に投じ、或は巨樹を半折して臂力を試むと、偶ま一獵士鹿を逐ふて山中に入り、異形の道士に遭ふ、其人岩に踞して



在り、蓬髮にして巨眼、軀幹龐大にして丈餘、草葉木皮を綴りて衣となす、熟視すれば孫右なり、然れども已に人語を通ぜずと、口碑に詩あり曰く「天外茅山色、宛如鳥角巾、傳云陰洞下、時遇孫真人」と、或はいふ同國三澤村の醫生某、不老不死の靈藥を採らんとして山中に入り、遂に仙となると、徂徠の文亦「飛驒の大人」の話あり曰く、「飛驒の山に大人といふ者あり、長け九尺ばかり、木の葉を綴りて衣とす、物を言ふにや聞きたる人なし、或獵師山ふかく分入りて獸多き處を尋ねけるに、思はず行遇ひける、其の走ること飛がごとく、逃るべきやうもなければ、詮方なくせめては斯してもやと飢の用意に持ちたる團飯を取り出て、手にすゑて差し出しつ、疾く食ひて得ならず悦べるやうなり、誠に深き山中に自づから生れ出てたるものなれば、洪荒とかやいふ世のためし思ひ出でられて、斯る物食ひたらんは始めての事なるべしと思はる、暫くありてしゝむじな夥ただしく殺しても來り與へぬ、團飯の恩に報ゆるなりけり、獵師勞なくして得物多きを悦び思ひて、夫れより日毎にまろめ飯を包み行きて獸にかへ歸りける、隣なる獵師怪しみて窃かに窺ひ置きて、夜深さに先立ち行きて俟つに、思はずに例の物に逢ひぬ、鬼なりと思けん、玉ころへて打ち、打たれて逃げれば獵師も歸

りぬ、初めの獵師、此の事を聞きてあな不便の事かなと奥深く尋ね入り、峰より覗き見れば谷底に倒れ伏し居たるを同じやうなる者の傍に添ひ居たるは介抱するなるべし、されど近づきなば、人に打れし仇を我にも怨みむざらんと、誠に怖ろしくて止みぬ、斯くては死につるなるべしと、後に此事を人に語りけるを、又人の傳へたりし、深き山には斯る物もありけるよとて、細井知慎がいへり「蓋し山の黒風白雨に虐せられて蝟抜するや、姿態雄偉にして自ら永久、不壞、堅固、安心等を具體的に代表す、所謂「不老不死」といひ「仙」といふもの、山といへる詩的背景を俟ちて初めて談ぜらるべきなり、蓋し世、未だ曾て自然の競争より多く恐怖に値ひするものはあらず、氷雪風雲水火を放射して地の皮を剝ぎ、心を穿つや、粗鬆なる土壤と、靈爛せる地皮は早く降下して、地盤日に窪伏す、中に就きて岩液の固結せるもの、花崗石、石英、斑岩の如きは頑強に抵抗して歪まず、他の曇日比肩したるもの、今既に退歩して奈落に沈没せるも、自己は當時の地表に劃したる水平線より退くことなく、其位置を嚴守するに當りて大節巍然たり、關東平原に帝冠を戴ける筑波山、甲府平原を圍繞せる山嶽、木曾溪に沿へる山系、畿内平原の障展となれる比叡山脈等は皆是なり、我は箱根山中に遊びて、仙



石村より神代杉(所謂「埋れ木」)を發掘し、又海拔二千九百尺なる同山嶺の蘆の湖底を俯して古木(多くは杉樹切口の徑四間許、空洞となりて桶の如しといふ)の齶として沈めるを瞰る毎に、富士破裂の際、曠大なる天然林を灰沙に葬りたる自然争闘の一ページを翻展したる想ひあり、今にして耳を覆ふも非情の草木が哀號の聲、慘怛に胸に徹するを覺えずんばならず、大觀すれば千年萬年も、亦蟬蛻の生命のみ、不朽の二字はいかなる字彙に索めて之を獲む、さればテニズンは悲歌して曰く

曾て樹木の茂りし所、今は波濤の逆けるあり。

吁、世は果して幾許の變遷に遭ひにけむ。

擾々たる慶<sup>聖</sup>衰、華街も、曾ては寥々たる大洋の真中なりき。小丘は唯是れ、一片の影に過ぎずして、常に變じて停まらざれば、今何の處に求めむ。

彼等の逝くや霧の如し、陸地の失するや雲の如く、去つて又還らざるなり。

と、逝者如斯夫、宇宙に無限の生命なく、永劫不壞の物體あるなし、然れども強いて比較的「永久」なるものを求むれば、先づ山を措いて何物にか第一指を屈せむ「不盡

の根」とは古今東西有らゆる山銘中の最好銘にあらずや。即ち居常これらの山嶽に親炙する人間が物質上の關係より、又心靈上の感化よりして、最長壽なるをいかて怪しまん、左に山國なる飛驒人の年齢表あり、十年前の調査に係はるものなれども仙人談の荒唐なるが故に、山と長壽の關係をも併せて河漢に附することを許さざらむがために掲出す。

町村名	九十歳以上	八十歳以上
河内村	一人	七人
山之口村	一人	十二人
丹生川村	一人	六十一人
清見村	四人	七十四人
莊川村	一人	三十一人
白川村	二人	三十人
下原村	○	十一人
中原村	一人	九人
上原村	一人	二十一



下馬瀬村	一人	七人
上馬瀬村	一人	十七人
久々野村	〇	二十四人
宮村	一人	十三人
川四村	一人	四十六人
下呂村	一人	十二人
竹原村	三人	二十五人
三郷村	一人	二十一人
宮田村	一人	四人
小坂村	一人	三十三人
朝日村	二人	三十一人
高根村	二人	十二人
國府村	二人	四十九人
大名田村	一人	七十九人
高山町	四人	七十六人
古川町		三十一人

細江村	〇	十七人
小窪利村	一人	二十四人
河合村	一人	三十六人
坂上村	二人	二十三人
坂下村	〇	二十人
神岡村	二人	七十五人
上寶村	八人	六十七人

(斐太雜誌第三號所載)

更に以上の表に就いて分類するに、「高山」の如き當時戸數三千八百、人口一萬六千餘を有する市街が、九十歳以上四人八十歳以上七十六人を有するに比し上寶村(奥飛驒に蟠結する阿房山、硫黄嶽、穗高山、鎗ヶ嶽、笠ヶ嶽、錫杖ヶ嶽、抜戸嶽、鷲羽嶽等低きも海拔八千尺を下らず、高きは一萬一千七百尺に至り、峻秀富士に亞げるもの元立して天を刺すところ、その裾を繞りて摺鉢の底の如く、東に隆起して稍や西南に窪伏する一村、之を上寶村といふ、高原川一村を貫通して所謂縦谷を作れり、高原を約めてタカラと訓し、今寶字に改めたるもの、命名自ら「濃飛高原」中のもの、全村の地



質概ね薄瘠にして、耕耨するも勞は他に倍して功却つて尠し。人烟稀少にして僅に八百の戸數と五千四百の人口を生存せしむるに過ぎざるに、猶能く九十歳以上八人、八十歳以上六十七人、即ち飛驒全國に冠たる最長壽者を出せる所以のもの、之を歸納し來りて「山」の恩恵にあらざるはなし、想見す、「胃弱」と「腦病」の牙營なる都市、殊に山水都ならざる塵都の所謂文明人士、是に至りて面に菜色なきを得るもの、果して幾人なるかを。

### 十三 登山は天然人事の本末的關係を知る

天火を以て大地を鑄り、三角形、尖塔形、倒扇形等の諸模型を造り、之を地球上に挿みたるものは山なり、山の特質は「凝固」に在り、故に不壞なり、不動なり、原野の如く曼衍ならず、河流の如く疎通せず、湖沼の如く分離せず、夕陽の春くときは光を浴びて金甌の無玷なるが如く、白日に晒されたるときは乾空に屹立して玲瓏無疵なる富士山は、眞に鎮國第一山なり、之に朝宗するものは石槌山の四國に於ける大山の中國に於ける、比叡山の京畿に於ける、立山の北陸に於ける、鳥海山の兩羽に於ける、皆

王冠を戴いて、四五國を統治する大任を天に享けたるものなるを以て、千山を一把して各其系統的主腦の位に處る、日夕山麓を繞りて之を仰視せる人民を陶冶するや、宛らなる天然人事統一碑なり、山と人とかいかに結托して本支の關係を作り、いかなる程度まで親疎の因縁に引かれつゝあるやを一目に了解せんと欲せば、親しく登山して高さこと幾千尺なる這箇無文の碑を默讀するに在り、強辯すれば由なきところに國は建たず、或は國土あらむ、國體なきなり、或は國體あらむ、國粹なきなり、山は全國民を代表する理想的巨人なり、繪畫的銅像なり、天然的柱礎なり、是なくんば國重からず、民鎮まらず、是に至りて初めて山の一皺一皴が無意味にして描かれざりしを頓悟し、造化か自然を運用することの爾く玄妙なるに感謝を捧ぐるを禁せざる可きなり。

### 十四 登山と文章

『天開書圖即江山』と言はずや、已に筆を蒙して山川に遊ぶ、到るところ必ず記あるべしと雖、平野都市河溝の題目より去つて、深山幽谷に來れば、侏儒の傳記より巨人の歴



史に遷りたるが如く、多角、多方面、平行よりも急劇、整齊よりも曲折、沈靜よりも怒吼、白描よりも色寫、山は其性として自然兒中の大自然兒なり、其質として乾坤詩中の大乾坤詩なり、毫も巧を弄する痕なくして、豪氣盤空一抹了して奕々神彩あるもの、豈自然の巨匠に成るを以ての故にあらずや、太白が「一生好入名山遊」といひたるもの、幾と造化の機微を默會す。

余は是に至りて日本人が「山」に對して冷々淡々、時に却つて之を無用の長物視するものあるに、多大の遺憾なき能はず、歐洲人のアルプス山を仰いで環視するや、アルプス協會なるものを組織せしめ、苟くも該山に係はる一切の事は細大洩らさず之を研鑽し、精細なる地圖地質圖は出版せられ、動植物の如きも大抵研究せられ、植物の如きは既に調査し盡くされて、新種發見の望み幾と絶え、唯或専門學者が豫じめ地域を劃定し、累年精緻に踏査して、初めて兩三株の新種を獲ることあるに過ぎずといふ、峻峰到るところ小舎を設けて宿泊の便を與へ、登山の路を開拓し、嚮導者を養成す、其登山の記事は普ねく諸國の新聞雜誌に公示して、世人と快樂を頌ち、世人は登山の氣風を奨励し、一たび夏に入るや、歐人の全部殊に獨逸、奧地利亞、伊太利、佛蘭西人

の如きは、最高峰に先驅の名を刻まんと欲して諸道より蟻群して到るといふ、理學家の泰斗チンダルの如きは數回登山を試み、Hours of Exercise in the Alps を著して斯界に浩益を與へ、ジェームス、バイリー、フレージャー氏が印度の雪山ヒマラヤを探檢して、ヒマラヤ雪山貫通記、ジエムマ及ガンジス河溯源紀行を倫敦より出版したる如き、實に稀世の鉅作として腦髓の重量能く山と衡平を得るを想はしむ、其他の山脈に就きて細説を知らんと欲せば大英百科全書エニサイクロペディア中より、Alps、Andes、及びHimalaya 等の項目を搜れば立ろに辨ずべし、顧みて日本は如何といふに、富士山は高度に於て、土地の便宜に於て、登山者の數に於て、日本第一と稱すれども、富士に關して何等の重要な冊子は印行されたる、野中至氏の「富士案内」は極めて簡易なる Guide Book に過ぎず、其他片々たる二三の兔園冊子、皆道ふに足らず、何等の地質圖ありや、農商務省にて刊したる二十萬分一地質圖富士山部一葉のみ、而も普遍的に世に公賣せざるを以て、農商務省に何等縁故なき人の手に入ること至難なるに似たり、何等の協會か組織されたる、無知の迷信者が瓜分して各地方に興せる富士講、御嶽講の類を外にしては之を聞かざるにあらずや、富士猶然り、他は推すべきのみ、殊に歐人が學術貢



献の府として、いかに山を崇むるか、いかに之がために財帛を耗して吝しまざるかは、本邦紳士輩を驚死せしむるに足るものあり、聞くが如くんば頃日アルプス協会の發企を以てツィグスビッチエ(獨逸第一の高峰)の頂上に測候所を設けんと欲し、バイエルの政府に建議するや、政府は之を議會に諮り、議會は直に之を協賛し、建築費の中十の六を國庫より補助し、十の四は協會之を負擔し、直に工を急がすや、バイエルの文部大臣ランドマン男爵は、親ち海拔一萬尺の高山に登攀して工を督したりといふ、顧みて日本は何の状ぞ、野中至氏が私財を抛ちて富士山頂に觀測臺を設けむとするや、宣言して曰く、高山の觀測は歐米に於て設備概ね具はり、一萬尺以上の高層氣候研究に従事するもの尠からず、日本人惟り之を能くせざるの理あらんや、殊に富士の如き天與の好觀測地を閑却するは惜しむべし、由來學術の効果を收むるは遼遠にして且經費を要す、今にして夙く之を施さずんば日暮途猶遠の感あらむと、然れども資本の不足は觀測家屋の構造を完全にする能はず、野中氏夫妻をして一萬二千尺の水中に放任せしめ、赤手に大自然と闘はしめ、幾んど殘殺せらるゝを待ちて、偶ま少數の仁人あり、之を扶けて下山せしめ、徒に失敗の黒印を學術史上に新らしくして止みたる如き、

罪誰にか適歸せむ。

然れども今にして之れを言ふは業既に晩し、今日の邦人は味方原の役に北首して俯したる尾張人士の態度を學び、路に遺ちたるを拾はんとして惶々如たり、遽々然たり、第一急務は彼等の頭を抑へて之を天上に向はしめ「山」に就きて注視を惹かしめ、山を跋渉する氣風を養成せしむるに在り、精力是よりして剛健、意思是よりして強固、學術是に於て勃興し、文章是に於て振起す、而して愛山の士先鞭を著けて「山の福音の先覺者となり、宣傳者となるを要す、我孱弱の軀と雖、冀くは驥尾に附かむ。

且つ想ふ、歐洲の如きは途山の路大に拓けたりと雖、あまりに拓けたるに過ぎて湖水には必ず汽船あり、溪澗にも又汽車並びに馬車の便ありて通じ、少しく山間幽邃の地にして瀑布あり、河あり、水河低く垂るるところ、必ず白壁丹壁の壯大宿舎を見ざるなく、甚だしきは汽車を以て遊客を山嶺に送迎するが故に、旅亭は夜に入れば花、葡萄酒等の山を作り、洋々として音樂舞蹈の海に化す、アルプスの最高峰モン、ブランの頂上まで、電車鐵道架設の請願は昨夏佛國政府の許可を得て計劃中なりと、此新鐵道は現在の瑞士山上鐵道よりも高所に達すべく、モン、ブランの海拔標高は一萬五千



七百八十一呎なれどアンデス山の、此と同高なるに既に墜道の開かれたる例あれば、唯時間の問題のみ、全道程十四里、電力は山中の湫流に取り、軌道の幅は一米突、山の南面に沿ふて勾配は百分の九乃至二十三、途中の景色展望には充分の注意を拂ひ、主なる墜道はアイグールドゴウテ附近に穿ち、以上の墜道には多く展望の設備あり、鐵道は氷雪岩塊の間を通ずる故に外よりの山景は爲に損せらるゝことなかるべしと、斯の如きは我が所謂登山の方法にあらず、倫敦グロープ記者の如きはモン、ブランの穢されたるに比して、却つて我が不二山を羨めり、日本の山嶽は二三を除いて、今猶道路を開拓せられず、煙雨湖上を罩むるところ、簑笠して扁舟に棹すべく、樹下には竹筒の酒を仰ぐべく、石上に苔を蒸して脚を倒縁の水に洗ふべく、山嵐肌を透るときは毛布を蒙りて「蟻蟲」臥すべく、赫日骨を焙かす時は、赤裸々となりて汗を拭ふに誰に憚るところあらむ、好兒は用ひず爺々の錢、丈夫の登山頂天立地豈前人開拓の恩恵に浴せんや、いづくんぞ富士の「角行」行者（角行は長谷川氏、天文十年正月に生れ、七歳にして富士を崇敬する心を發す、正保三年富士山麓の人穴にて入定す、行年百六歳、富士大行者書行藤佛と號す）木曾御嶽の「覺明」行者（覺明は尾張琵琶島の人、大八車を引

いて稼業をなしたる賤民なり、一旦發心して金比羅に祈念し、天明二年御嶽の「黒澤」道を拓く、土人覺明大菩薩といひて之を崇む、御嶽の一支峰三笠山に覺明堂あり、叢の先蹤をのみ追ひて可ならんや、天功名を將て我に附與す、今山に登らずして何の時をか俟たむ。

ラスキンに山の讚美歌あり、曰く

山は人類のために作られたる學堂にして又寺院なり、學者のためには萬卷の知識的秘庫となり、思想家のためには靜隱の栖家を供し、宗教家には聖光を附與す、山は實に渾圓球上の大寺院なり、岩の戸あり、雲の柱あり、洞々の流れと徑々の小窟との私語は、以て聖歌に比すべく、玲瓏なる白雪は以て聖壇に較ひつべし、而して燦たる星光に鏤刻されたる蒼巖は、是れ院内の圓天窓にあらずや、と、移して以て「登山論」の跋に代ふ。

#### 第四章 日本山系概論

日本山嶽の系譜を引き、その興祖より末裔に至るまでの、逐一記を作るは、普通地文



書類の事にして、我にあらざ、既にナウマン氏之を説き、ライオン氏之を説き、原田博士之を説く、吾人に複説の要なきなり。

然れども我が日本群島は、大洋に浴する巨人の一團より成れるものにして、吾人はこの巨人の裳裾の一角を拓いて、都市を作り、水邊に脱殻する蛇の如く、谿谷の下流所謂三角洲に子々孫々相繼承するなり、谿谷はこの巨人が瀉進する白乳にして、巨人の吼けるや、吾人は畏怖して『神のあらびのかしこさうかも』と讚美せざるを得ざりしなり、山嶽の人に恵むや至つて儉吝なるが如くして、實は日本國中、衍沃繁闊の地は、皆山嶽の賜なり、雷に然るのみならず、日本の風光は、山嶽實に畫幀の背地を作り、山を以て繋結し、水を以て分解す、山先んじて説かざる可らず。

我が島帝國の地體は、最北に千島列島、最南に琉球列島、中央に本土列島と連環して成れるものにして、本土は、北海道、本州、四國、九州と四節に分れ、その間に溝より狭き一水を通すれど、素とは一體と見做すを至當とす。道の三列島皆弓形に暢び、西南より東北に向ひ、滿を持するが如くなれど、本土列島のみは、千島琉球の如く、單絃を張れるにあらず、二帶の灣曲せる脊椎骨より成れり、即ち一は樺太島より北海

道を突破し、南々西に向ひ、本土の中央なる駿河、甲斐、信濃、地方に至るものにして、地學者の所謂樺太山系是れなり、他の一はバミール高原より起り、一旦支那平原に蟄伏し、支那海に沈めども又俄に勃起して九州四國を串貫し、本土日本の中央なる信濃に入りて、竟に立たざるものにして即ち崑崙山系を謂ふ、不二山一帯、この南北兩山系の接觸點を横的に遮斷するを以て、日本本土の地體骨子は、斜十字形を作す、語を換へて言へば、不二山脈のみは、日本を横絶し、他は全く島形に準ひて、縦線に伸ぶるなり、殊に本土の主山脈は、津輕海峽より下之關海峽まで一氣に延ぶ。

樺太系の山、鮮やかなる褶曲を畝ねらして、北海道に入りては蝦夷山脈となり、本土の東北海岸に併走せる陸中の北上山脈、經城の阿武隈山脈を経て、我が武藏野に霸王の座を占むる秩父山脈に列なり、甲斐信濃に入りて崑崙山系と合す、顧みて崑崙山系は即ち如何といふに、九州に入りて八代玖摩に重疊の山脈を拖き、四國を通過して東に延び、紀伊半島に入りて高野山を作り、大和の大臺ヶ原より、或は笠置、金剛、葛城、芳野、妙見、六甲、比良、比叡、愛宕の如き近畿の諸名山を作り、志摩參河に列なりて、竟に天龍川に沿ふや、峻秀無敵なる赤石山脈を崛起す、この南來北來兩大山



系に就いて言へば、樺太山系の概して低夷（殊に北上阿武隈兩山脈の如きは、地積廣大と雖も、山を去つて高原相に墮ちたり）なるに反し、崑崙山系は、四國の石槌山の如き、劔山の如き、紀伊の大峰の如き、いづれも六千尺以上を抜き、信濃の駒ヶ嶽、亦八千尺に達し、殊に赤石、白峰、駒ヶ嶽（甲斐）となりて一萬尺を出入す、即ち日本に在りて世界第一のヒマラヤ山、或は歐羅巴第一のアルプス山を收縮したる褶曲山脈標本を觀むと欲せば、之を崑崙大山系中に求るより善きはなし、その能く斯の如く高峻を至せる所以は、成生の期、前者（樺太大山系）に比して概して新らしきがため、未だ彼が如く太たく黒風白雨の削剝作用を被らざればなり。

然れども褶曲山の性たる、由來蜿蜒として無端の銀嶺を繋ぐ壯觀あれど、地皮冷却の時代略ぼ同じく、風雨の作用を蒙れる程度亦相似たるを以て、相互比隣の間に甚だしき高低凹凸なきは、之を東は北上阿武隈兩山脈、西は攝津大和の群山に徴すべし。

幸ひに（日本風光のためには）火山の大噴起あり、圓錐形となり（不二山を以て代表す）峰尖分岐して劔戟を列ぬるあり（八ヶ嶽の如き）刃劔して截然屹立、展風を聳つるあり（御嶽地嶽谷の如き）鋸齒狀を成せるあり（妙義山の如き）凹扁なるあり（乗鞍嶽の如き）

烟筒形（飛騨錫杖ヶ岳の如き）笠形（同笠ヶ岳）の如き姿態萬狀、褶曲山の多くが、屋棟狀をなして隣々近きに反して、是れは尖り、削られ、離群し、孤立し、或は層起し、簇群す、高峻突兀、平仄の押韻を意とせず、鑿亦甚たしからざる詩に、却つて思索以外の、天品を見る如し、火山は實に日本巨人中の骨人なり、確人なり、力人なり。乞ふ少しく審に之を説かむ。

火山大脈の北より來るもの三。

一 はカムチャツカ半島より西南に長く列なれる千島火山脈にして、チャチャヌブリ、羅臼嶽等の名山となり、北海道に入りてアトサヌブリ、雄阿寒、雌阿寒の一對峰を起し、北海道最高のヌタクカムウシエベ火山を振起し、忿怒烈火の樽前山となり、餘怒猶熄ますして、マクカリヌブリとなり、その西に峻絶すること六千四百尺、之に次くは

二 那須火山脈にして、北海道の内浦灣、則ち外人が駭唱する噴火灣に臨み、有珠岳駒ヶ嶽、及び惠山等を巉突せしめ、津輕海峡を渡りて恐山に初まり、八甲田山、赤倉山、戸來岳、岩手山、焼山、駒ヶ嶽、藏王山、吾妻山、盤梯山を列ね、南向して主盟



なる、那須群山に結び、一旋して高原火山に列なり、白根山と握手し、赤城、榛名、妙義等所謂上毛の三名山を鼎立して、南西淺間山に到る。

三 之に并行して鳥海火山脈あり、岩木山を出发点となし、東北地方絶倫の高山なる鳥海山に列なり、月山を起して越後の境上を走り、淺間山に到る。

別に越後の海濱より起れる彌彦火山、羽後の寒風山より起りて、佐渡の金北山に列なれる小火山脈を副ゆ。

南日本より來れる火山の大脈、亦三。

一 阿蘇火山脈にして、肥前温泉嶽ウツクダに起り、九州中央の絶大火山群なる、阿蘇に大成し、久住山、涌蓋山、鶴見岳、及び由布岳となり、四國山系中石槌山の安山岩地に列なり、紀伊の牟婁山、三河の風來寺山となりて、信州に入る。

二 是に并行して南日本の内面圈を領するものにして、中國の二名山なる三瓶山大山より、間鍋山、大岡山を経、本帯の盟主なる白山に接す、相對して越中立山あり、所謂白山火山脈なるもの。

三 霧島火山脈にして、遠く臺灣に起り(新高山は褶曲性の山にして、火山にあらず)

琉球列島の西側に沿ひ、薩南群島に至りて、新岳、硫黄島を起し、開聞岳及び櫻島となり、霧島山となる。

北の三系、南の三系、相衝突する中溝を、不二帯となす、此帯は日本海より起り、太平洋に入りて横走す(妙高山、黒姫山、飯綱山、戸隠山、立科山、八ヶ嶽より不二に至り、管荷天城の諸山より南方海に入り、大島以下諸島を成す)不二帯の南北兩大系を交綫するや、先づ至親の同胞淺間山を放ちて、北系諸山脈を收拾せしめ、更に之を本帯に硬紐し、已は南系を迎ふ、中央日本の任務重く、不二の天職崇き所以なり。

不二帯の西方に峻立し、彼と競ひて下らざる傲兀大無畏の長列山脈あり、飛驒山脈即ち是れにして、天龍川の第一線を以て赤石山脈を隔て、木曾川の第二線を以て木曾山脈を隔て、己れ其背後に處る、越後、越中、信濃、飛驒、美濃、五國に踞し、峻秀の大岳崇嶺、波奔濤立して、一時に天涯に撐簇す、雪槍ヶ岳、朝日岳、大逆華山、白馬岳、鹿島鏈ヶ岳、針木峠、鎗ヶ嶽、穂高山、蝶ヶ岳、硫黄岳、燒岳、笠ヶ嶽、常念ヶ嶽、錫杖ヶ岳、大天井山、乗鞍ヶ嶽、御嶽等、一萬尺を超ゆるもの六座、他も皆殆んど之に迫まる、宜へなり、外人この圏内を稱して日本のアルプスと呼ぶや。



以上日本山嶽趨向の大體を約説して、粗ぼ盡きたりと信ずるが故に、之より各地山嶽の個々及び其の特色に言ひ及ぼさむ。

### 其一 千島及北海道の山嶽

千島、我が島帝國の北端にあり、本土より東北に連鎖状を成して、東寒加に接近す、島の全數約四十個風常に暴くして、海岸は大波荒蕩、時に濃霧白開にして近づく可らず、一體に寒流を佩びて、點々氷の如き大洋盤上に索居するを以て、快樂郷土に造化の偏愛を鍾めたる本島の人士、想像にも之を描く能はず、日本のグリーンランド、アイスランドの宛名の下に、島は年中悉く氷雪の厚衾を被ふり、その山は元々頭髮を髡したる如くに思惟せられ、殊に畫家の山容を寫せるを見るに、山稜氷刃の如く峭立して、奇醜をさはむるを常とす、然れども千島の山、實は彼等が畏怖する如く、しかく巖峻抗壯、近づく可らざる他界の物にあらざるなり。

北寒の千島、素より植物の種類に乏しきは、その處にして擇捉島の如き、南位に在るものすら、猶櫻の類を除いて花木なく、玫瑰の外に果卉なく、禾穀菽豆一切之を見る

を得ざるを以て、時に本土より西瓜を船載するや、兒童目するに巨大樹の果實を以てし、教員の説明も理解する能はざりしと云ふ、況んや平地を抜くこと百千尺の山をや、その生物の天與薄きはまことに然りと雖も、ために赤裸尖削「荒寥」を具象にせる山を以て擬するが如きは、大に當らず。

試に北海道の東北端にして、千島の門戸に當れる根室を發し、碁布せる礁島、小群嶼の平低にして、雲耶山耶を辨ぜざる間を過ぎ、國後島を望まんか、此島根室を距ること凡十二里にして、千島としては南位のもの、其地勢山岳饒かに、ラウス、チャチャノボリの二山、突兀絶群せるを望むべし、ラウス岳は外形不規則にして、山側に蝦夷松、椴松、タケカンバ等の蒼鷗色を成せる深林あり、上れば山頂三個の硫汽孔を有し、硫黄堆積するを見る、山の低きところは溜葉樹を生じ、その比較高點にハイマツ群生せり、チャチャノボリは、秀崇なる不二狀の二重圓錐形火山にして、上部の小圓錐は欠損し、下部の大圓錐は深谷ありて深拔五千尺以上、本島火山他に多し、(ルルイ岳、タチウス岳の如き)と雖も、崇高色美をこの山に比すべきなしと云ふ。

千島諸島中、最大なる擇捉島に到れば、クナシリ、シコタン並に他の諸島と同方向に延



長し、山岳重疊す、その山岳は大抵安山岩より成り、秀絶せるものは皆火山なれど、概一定の連嶺を成さずして、處々斷絶し、北部なるアトサノボリ、圓錐狀を成して聳立す、本島火山中の尤物八、曰くモヨロ山（上三峰に分れ、白浪モヨロ灣を洗ふところに屹立して、盛に噴煙す、麓に孤立せる一小火山あり、西南の崖壁下、周回約二里なる半月形の火口湖あり、高サ三千四百尺）曰くチルプ山（二峰あり、高サ相伯仲す、人跡未到の地、冬日獵夫熊を狩らんがために、或は攀づるものありと、ハヒマツは二千尺以上より林を成し、ミヤマハンキ、タケカンバ、ナナカマドの混林は、其以上に至るも、獨美くしき矮林を作れり、磧、溪澗、瀑布、千餘尺の峭壁等にて、登り易からず、山中硫氣孔あり、或はいふ、擇捉第一の高山なりと、）曰くシャシヨウシ山（圓錐狀を成し、硫氣洞あり）曰くヘチラムプ山（極めて峻峻、頂上は臼狀を呈し、岩角稜々、南側の傾斜五十度に至る）曰くレブンシリ山（ヘチラムプに近接して、其西南に聳へ、崩壊せる圓錐狀を見る）曰くシトカプ山（島中の最高山にして、海拔凡五千尺、西方より望むに、不二式にして山頂衍潤、岩石巖々）曰くアトサ山（半島を成して海中に屹立す、シトカプ山と東西相對し、標高略ぼ相若く、二重不二形にして、

外輪山は只東部をのみ殘存す、全體の形狀完全なる欠項圓錐にして、擇捉全火山中最美の山、山頂に一大噴火口あり、南北二百間、東西之に半し、深さ凡三百五十尺）曰くベレタラベツ火山（シトカムプの南方に當り、山上硫煙を吐く、頂上より少しく下りて、硫黃堆積す、頭は禿禿なれど、山腹以下タケカンバ、黄花石楠花等多し、ハヒマツは縦横山の上下に布く）この他猶火山ある如し、この島十月に初雪し、四月に終雪す、夏と雖も山嶺深谷に猶殘雪を見る、灌木林中、落葉松の古木短矮なるもの多く、本島及び色丹島に限り生ずる千島落葉松は、本島にて高さ六丈、幹經三尺に達するに至る。

川上氏に據れば、ヨモロ山麓は千島笹、山腹はハヒマツ純林、二千尺にして林盡き、燒石磊々たる焦原となる、この山濃霧の去來、頗る多しといふ、猶本島の絶北にアトイヤ山なるものあり、夏時（八月十日）氷雪の厚さ七八尺、長さ數町に亘る、雪原多く、且つ極めて硬きを以て、刀して片々に削る、雪を掀して紫花の櫻草、白花のイハグルマ、黄花のミヤマダイコンサウ等、爛咲すといふ、島の南部にノボリ山道あり、五百尺にしてハヒマツの疎林と、千島落葉松の美林、千五百尺にしてハヒマツの純林、山



頂高さ約二千尺、東にシャウシの硫黄山屹立し、瀬石山嶺の硫煙空を衝く、東は太平洋、西はオコック海を望み、眺望絶佳なりといふ。

擇捉國後二島より南位に當り、根室と稍や平行せる色丹島は、到るところ懸崖削立、四周の山緑草を以て毛被せられ、蝦夷松危岩と點綴し、北に至るほど隆起す、山脈は島の中央に在り、東北端シャコタン山(海拔千三百尺)より蜿蜒して、西南ノトロ山に盡く、この中、直立千尺以上の者五つあり、火山は無し。

得撫島のものは、正しき山岳を作さざれども、地嶮にして最高は四千尺に達すべし、島の中央より少しく東に偏りて、硫氣を吐ける一火山あり、即ち摺鉢山(新稱)にして、海拔凡三千尺、岩石噴氣のため、白色灰状を作し、明礬の皮殻を以て、覆はるが故に、遠見すれば火山灰と誤まらる、その南に圓錐形の小山あれど、火山にあらず。

以上の四島(擇捉、國後、色丹、得撫)は、千島列島中の南位に在り、邦人との交渉比較的が多いため、略ぼ探究せられたりと雖も、ウルップ島以北に至りては、大抵無人島にして、千島の人口を全面積に比例算すれば、一方里凡そ三人の住民あるのみ、故に詳細を知る能はず。

その極北に在るもの、則ち阿頼度、波羅茂尻、志林規、占守諸島は、如何といふに、探究せられたる限りを以て之を言へば、ボロモシリ島、帝國の極東なる占守の南に在り、頗る大、擇捉國後得撫と共に列島中の四大島なり、全島皆山、其西南端に不二形の秀火山屹立す、即ちマウントフスにして、海拔七千尺に迫る、北端にアシリマツキの活火山あり、アライト島は、島形既に洋中より笈起せる山、山態圓錐形を成し、上部三分の一は恒に白雪を被ぶる、蓋し千島列島の最極北に在り、寒帯に入ればならむ、シリッキ島は絶小言ふに足らざれども、猶北端に活火山を有す、郡司大尉の壯擧以來、千島列島中、最も邦人の口に上れる占守島のみは、近隣諸島の如き山嶽なく、最高丘はその西北隅に在りて、松村山の新名あり、高さ僅に四百四十餘尺(磐城艦測定)といふ。

南群、北群の兩間に在る列島中、オンチコタン、シャシコタン、エカルマ、マツワ、ラシヨア、ケトイ、シムシリ諸島の如き、いづれも二千尺以上より、五千餘尺に至るまでの無名山聳立し、その多くは圓錐形を成し、(或は頂上少しく缺損するものあれども)硫氣を吐き、その烈しきは、白烟騰上して懷に温泉を抱き、火山湖随つて多く、いづ



れも全島則ち山なる觀を呈すとす。

然れども或物が思惟する如く、千島群島悉く火山より成立するにあらず、水成岩の傾層も往々見るところにして、色丹の如きは、全く火山なく、却つて綠岩、花崗岩の流岩を諸島に見ることあり、只だ從來之を記するもの、擇捉、國後、色丹、得撫、占守及び附近の數者を除けば、殆んど遠望のみにして、親しき探究なきため、本邦中地理最も不明にして、概算すれば無人諸島の火山のみにて、三十個を得べからむか。(千島の記事は、神保理學博士の『ウレッジ島小誌』『北海道地勢總論』『千島國最近四島』農學士石川貞治氏の『千島巡檢雜記』『千島國エトロフ島火山の記』農學士川上瀧彌氏の『千島紀行』多羅尾氏の『千島探檢實記』關氏の『千島探檢誌』ミルン氏の『千島巡航記事』農學士横山壯次郎氏の『千島國シコタン島』等その他に負ふところ多し)

千島山脈の、北海道本島に入るや、シレント岬より西方に走り、殆んど北海道東部(札幌以東)の中肋を突破して、本道中最も著るしき高山を簇起す、この脈に屬するものにヌタブカウシヘ(石狩岳の別稱を以て知らる、西南側に噴烟を起す)雌阿寒、雄阿寒前者は硫烟を吐き、熱湯池あり、後者は秀美なる圓錐火山なれど、火口を認めず、頂上

に至るまで、樹木繁茂せり)アトサノボリ(或は硫黄山とも言ふ、山上火口あり熾に噴烟す)マシウ(圓形の山)ラウシ(頂上火口様のものありといふ)等にして、最西ヲブタテシケに至るや、海拔七千二百尺、本道第一の高山を振起し、他に數個の火山を立つ、多少の噴烟あり。

この脈は北見の高原、並に釧路十勝の平原に向ひて緩斜し、石狩に入りて東北山脈、日高山脈と、前記ヲブタテシケに結節し、活動力こゝに鎖沈して、以西に山らしき山を起さず。

日高山脈は、日高國襟裳岬より北々西に向ひ、直線に延長するものにして、ボロシリ山(或はカムイヌブリの別稱あり)海拔凡六千五百尺を主盟となし、少しく離れて石狩の夕張川源に蜿蜒せる夕張山脈を突起す。

東北山脈は、之を千島日高兩山脈に比して、低卑言ふに足らずと雖も、平均高度二千尺に達し、最高のもものは、約五千尺に至る、列籍の山岳は、宗谷岳、カチホリ山、ホロ岳、カモイ岳、天鹽岳等なり。

本道西部(札幌以西)の山に至りては、渡島山脈を以て主盟となし、大抵火山多きこと、



猶東部のごとし、大川岳、恵山(火口の南東壁のみ存し常に硫烟を吐く)駒ヶ嶽(圓錐形を成し、二個の噴火口あり、成層火山)等、大抵は火山岩より成り、後者の如きは四千里の標高を有す、札幌に接する後志山麓は、噴火灣の東北岸に至りて、火山岩の大區域を作る、この山麓には六個の火山あり、マクカリヌプリ、最高にして六千七百尺に達し、圓錐秀美の山にして火口壁完けれど、噴烟を見ず、イワフノボリは、山上に數個の火山ありといふ、ウヌ岳は不規則なる二千尺許なる小突起にして、北方に風景明媚の圓形なる洞爺湖を抱く、樽前山は猛烈の活火山にして、往々大塊の噴石を飛ばす、恵庭は三十五度の傾斜を有する尖銳の山、樽前と相對して、中央に支笏湖を挟む。北海道登山に當りて、最も苦惱を感じるは、所生の樹木、土質の如何に係はらず、根を托すること深からざるを以て、殊に蝦夷松椴松の如き、偃木路を閃して、枝は幹と直角を作り、新木老幹、密接して行人を沮むるに在り。之に次いで假松蔓延、枝々彈性あり、踏めば躍りて人を倒す、又熊笹人より高く、加ふるに夏は毒蟲、秋は霖雨、道路多くは人工を借らざるが故に、雨れば河流となり、行歩を辨ず可らず、只だ巨大の落葉あり、天幕に代りて露宿の屋を覆ふを僅に便とす。

るのみ、しかも斯の如き山、日本全國中、本州を除いて他に無きをもちへば、いつくんど、天、原人時代を氷函に藏して、幾千載の後まで、歴史家藝術家をして、當時を端睨せしめ、その想像力に導火するために、之を原存するにあらざるなきを知らんや。夏日の登山は、絶北の千島北海道を以て、最も趣味あり教訓ありとなす所以、實にこれに存す。

## 附

## アイヌ語のヌプリ

東京人類學會雜誌第七十二號にバチエロア(Mr. Batchelor)の「蝦夷人の宗教並に口碑」と題する演説中、富士山の語原に道ひ及ぼしていふ。

「富士山は今日樺太……薩哈連島に用ふる言葉でございまして、矢張火の意味でございます、今の富士山は昔は煙を噴いてをりました、アイヌが始めて其の山を見ますれば、それは私共の火の神様として……今日も火を拜むのでございませす(中略)富士山の元は、フチヌプリといふ言葉から出て参りましたのでございませす」



す。

と、北海道の山嶽名稱に何々ヌプリを以て名けられたる山甚だ多し、蓋しヌプリ(Nupuri)又はノボリ(Nobori)は今日の邦語に所謂「登り」が由つて轉訛し來れるところの原語にして、「山」といふ名詞なり、試に北海道の山嶽中、ヌプリ若しくはノボリの名あるもの、中より二三を、左に列擧せむ。

アトサノボリ 釧路國釧路湖畔に在り。

ノボリベツ 漢字を借りて今「登別」と書す、膽振國の同名河上に在り。

マクカリヌプリ 又膽振國に在り、今漢字にて後方羊蹄山と書する者、是なり。

イワホノボリ 後志石狩の國境に聳ゆる「硫黄山」是なり。

ウイノボリ 漢字にて有珠山と書す、「有珠」はウイの訛音に似たり、「ウイ」

は蝦夷語「燒」の義なること、伊藤保三氏の『洞爺湖記』に見ゆ、

この山膽振國の南岸に在り。

チャチャノボリ 千島列島中の最南、國志島クニシマに在り。

他は暫く之を略す、而してヌプリ、又はノボリが山といふ名詞にして、現今の邦語が、

凡て之を高さ意味に用ゆること、名詞としては「幟」の如く、働詞としては「登る」の如きに至れるは、他に猶その類例乏しからず、雨を「雨る」に用ひ、火を「火く」に用ふるが如し、しかも殊に英語の Mount が、名詞「山」にして、又働詞「登る」なるに至りては全くこの蝦夷語「ノボリ」の兩用に符を合したりと謂ひつべし。

### 本邦殊に北海道の深山幽谷を跋渉

#### したる奇僧圓空

日本の深山幽谷を跋渉したるもの、古來僧侶に多かりしは、畢竟その深山幽谷を以て、神佛の棲家と見做したる、宗教的信念に基きたるもの、如し。然れどもその遺蹟、もしくは紀念として、日本全國到るところに傳ふる弘法大師一刀三禮作の佛像、又は役の小角が籠もりたる洞穴といふの類、荒唐不稽にして、識者の一喙に値ひせずと雖も、まことに僧侶にして深山幽谷を跋渉し、その宗教的信念に發したる美術品を後昆に傳へたる僧圓空の如きは、一個の英靈漢として、之を傳へざる可からず。

余が、はじめ僧圓空の名を識りたるは、飛驒に旅行したる際、往々山間の佛寺に、



この人の作と稱する佛像の多かりしに因りたりしが、未だその何處の人に於て、何代  
のころに生存し、いかなる生涯を送りたる人なるやを知らず、後に曾我耐軒の『幽討  
餘録』を讀む、中に僧圓空を傳へて云ふ。

山谷之間、往々有<sub>二</sub>佛像<sub>一</sub>存焉、相傳、僧圓空者不知<sub>二</sub>何許人<sub>一</sub>、常挾<sub>二</sub>薙刀<sub>一</sub>、行<sub>二</sub>  
乎山中<sub>一</sub>、時或游<sub>二</sub>村里<sub>一</sub>、未嘗火食、前<sub>二</sub>知人之壽夭禍福<sub>一</sub>、言<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、屢々奇中、刻<sub>二</sub>  
木作<sub>二</sub>佛<sub>一</sub>、鑿<sub>二</sub>石嵌<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、前後無<sub>二</sub>算<sub>一</sub>、貞享中忽語<sub>二</sub>人曰<sub>一</sub>、城將爲<sub>二</sub>墟<sub>一</sub>、吾去矣、終  
莫<sub>二</sub>知<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>往、數年金森氏國除、寺島良安三才圖會云、陸奥燒山舊有<sub>二</sub>千佛像<sub>一</sub>、  
歲久十失<sub>二</sub>三三<sub>一</sub>、僧圓空刻足<sub>二</sub>其數<sub>一</sub>、據<sub>二</sub>近世畸人傳<sub>一</sub>、蓋非<sub>二</sub>別人<sub>一</sub>也。

是に由りて之を觀れば、圓空は尋常一様の寒乞相にあらず、その未然を察して奇中す  
といふが如きは、必ずしも漢學者流の舞文とのみ見做す可らず、一種の精神病者にし  
て、往々超<sub>二</sub>自然<sub>一</sub>(常識によりて之を判ずれば)の行動に出づるものあることは、世間  
に認識せられたる事實にして、今日の學說といへども、未だ十分にその何故に然るや  
を立證すること能はざると同時に、之を否定すること能はざるなり、圓空亦この種の  
人にあらざるなきを得んや。

彼が始め『不知何許人』して、終に『莫知其所往』といへるが如き文字は、支那人が列仙  
傳中、好みて用ふる筆法なるを以て、借りてこの漂泊狂僧の一生涯を、霧中にボカし了  
したるにあらずやと疑はるれど、もし耐軒が引用したる三才圖繪の所說にして信なら  
ば、彼は本州の Uluma Thale なる陸奥まで樺太山系を辿りたるもの、如し、伴蒿蹊  
の『近世畸人傳』は、有名なる書なれど、余未だ見ざれば知らず、但し『飛騨史略』千光  
寺の條に圓空に關せる記事を載せたり、曰く。

此寺ニハ圓空ノ<sub>ナマズ</sub>鈿製ト稱スル、佛像數多アリ、圓空ハ美濃竹ヶ鼻ノ人ナリ、元  
祿ノ頃此寺ニ遊ビ、住僧舜乗ト親善ナリ、圓空唯鈿<sub>ナマズ</sub>一挺ヲ以テ、巧ニ佛像ヲ彫  
刻ス、又善ク將來ヲ豫言シテ奇中ス、嘗テ高山城ヲ望ミ、城氣ナシト言ヒシカ、  
幾ハクモナクシテ金森氏上山ニ徙封セラレタリ、圓空後去リテ、蝦夷ニ入レリ  
ト云フ。

愈よ出て愈よ奇人といふべし、然れどもおもふ『去リテ蝦夷ニ入レリ』といふが如きは、  
又本邦史家が人の踪跡を晦ます常套手段、未だ輒ち信ず可らずと。

余は圓空に關して、この他に見聞したることなく、且つ素と一時の瞥見に過ぎざりし



が故に、別に立ち入りて詮索もせず、身邊多忙、忘るゝともなくこの事を閉却して、  
 はては圓空の二字すら腦中より拭はれ去んぬ。偶々頃日『太陽』二卷第十六號に北海孤  
 兒院の伊藤保三氏が手記するところの『洞爺湖』なる一文に披き到りて、圓空二字に撞  
 着す、率然として微惱あり、全く他人の名にあらざる如く、さりとて誰なりしかとい  
 ふに思ひ到らず、讀むこと、之を再びして、記憶は余を捉へぬ。

白帆進むに従つて有珠山も、幌前も、處を變じ、樹木森々たる中島も、眼前に  
 横はり、今は我が心、亂れ飛ぶが如き折しもあれ、有珠風は俄に襲ひ來る、よ  
 りて東下して最も小さき島に着きにけり、我は直ちに上陸して、樹木繁茂せる  
 間を潜り行けば、道開けて小高き丘に、芝草思ふがまゝに繁り、傍は奇麗に打  
 水したるが如く、綠樹の下古びたる堂宇たてり、余は朽ちたる門を叩きて、堂  
 内を検すれば、古色蒼々たる堂内の章歌天は、其彫といひ、其形といひ、木精  
 動き出んかと怪しまる、像の後に回りにてよく見れば、其背に醜き澁筆にて書き  
 つけられたる文字こそは

うすぶくのいん小島

寛文六年丙午七月二十八日

江州伊吹山平等院岩僧内

始登山 圓 (空(花挿))

嗚呼これ芭蕉西行の徒なるか、寛文六年とは靈元天皇の御代にして、四代將軍  
 家綱の覇者たりし時なり、二百二十八年前の昔時に於て、數百里の遠路を辿り、  
 アイヌ土人に布教を試みんとは、儀式的なる現今の宗教界は、三省して可なり、  
 余は三個の中島に對し、左の如くに命名せり。

圓空島最も小なる島 有珠の島中央にある島 雲切島最も大なる島

圓空島は、僧圓空の始めて渡りし島なれば、其名を附して以て、探檢者の  
 功績を永世に遺さん事を務めたり。

是ある哉、是ある哉、湖畔の一路曲線を劃し、之を夾むものランコ蝦夷松は亭々とし  
 て檜、黄蘗、榆、樺の間に挺き、滿林の綠影珠より透るところ、僧の如く、木精の如  
 き奇異の物ありて蠢めく、熟視すれば夢寐の間に見たる二百餘年前の友なりき、是れ  
 余がこの文を讀み、この僧の何物なりしかに思ひ到りたるよきの感なりき、果然彼は



陸奥より津輕海峽を横きりて噴火灣に入り、膽振の南岸に上陸して、東は遙に巍然として高く聳ゆる有珠山の翠影を仰ぎ、西は遠く海拔六千七百尺なる羊蹄マツカリの高峰に對し其中間に大圓鏡を開きて、有珠蛇田ウツラノタの兩郡を控ゆること、恰も落機山のミシガン湖に於ける如く、デルエント湖のマウント、スキットーに於けるが如き洞爺湖トウヤトウは沼或は湖水の意、ヤは端もしくはグルフ即ち湖畔の義、畔に居を下したるなり、地は是れ鯨濤亂立せる噴火灣を距ること數里、寥落たる山間僻陬にして、かの上古史の舞臺に專横を極めしもの、子孫として亞細亞人種の「忘れがたみ」として、鬚髮蓬々、被髮徒跣せるアイヌ人が、脊に熊皮を負ひ、腰に山刀を携へて徘徊する傍に跌座して、造化に咫尺し、天地に合一し、絶對境に佇みて、我は人にあらず、山毛櫛も、赤楊も、槭も、木にあらず、山も山にあらず、水も水にあざるところに、一生涯を送りたるならむ、一生涯も彼に在りては刹那にして萬古のみ、狂僧なる哉、英靈漢なる哉、素より今の河口懸海師が千死を冒して、西藏に入りたる困苦には比す可らずと雖も、當時の蝦夷の、いかに危険なりしかは今の日本人の想像し得るところにあらずなりなるべく、伊藤氏が圓空の名を以て島に命じたるは、洵にその宜しきを得たるものといふべし。

べし。『東は遙に』よりアイヌ人云々まで伊藤氏の文に據る。この圓空と、かの圓空と同人なるべきことは(一)圓空は美濃竹ノ鼻の生れなりといへば、美濃に隣りたる近江の伊吹山に僧として在りたりといふことは、しかるべき連絡なること(二)寛文六年は前に出てたる元祿(假に元年と算すれば)に先つこと二十三年にして、同年代の人なるは、争ふ可らざること、但し『史畧』に『元祿の頃』といへるは概定に過ぎざれば、彼が飛驒に在りたるは、少くとも寛文六年前にして、元祿の頃にはあらざるべし、或は寛文に一たび蝦夷に渡航し、元祿のころは飛驒に歸り、晩年再び蝦夷に入りたるか、尙ほ致ふべし、(三)もしこの木像を後人の偽作なりとすれば、知名の僧にこそ假托して吾佛を尊からしむる手段を取るべし、故らに世間に知られざる圓空の名を借る必要なさ等の諸理由に據りて、之を斷じ得べし。

果して聞き得たり、伊藤氏の所謂『古ひたる堂宇』とは、圓空が開創せる觀音堂の謂にして、彼夙に海内の高山大澤を跋渉し、後北海道に航し、大田山、磯谷、夕張、惠山、樽前等凡そ「口蝦夷」の高山を踏破しては、自彫の佛像を納め、後洞爺に來り、寂寥無人の湖中島に移り、閑居すること數年、即ち奇瑞を被りたりと稱し、觀音像二軀を作



り、一を禮文華(洞爺湖の西十里なる、一座險惡の岩山)に收め、一を此島に安置せるなり、老いて後美濃に歸り、伊吹山の平等岩窟に入定すと、世に傳へて今行基菩薩の崇稱あり、陸奥の恐山、亦此人鉅製の佛像を藏す、粗削なりと雖も靈活神に入るといふ。

圓空の名は何より稱し來れりといふことを知らず、只だ富士史上の登山者に、圓珍、空海の二上人在りて石佛を鑄りたりといふ傳あり、偶まこの山嶽を酷愛せる二高僧の頭字を綴り併せたるに暗合したるは、佛家の所謂因縁にあらずや、非耶。

## 其二 東北及關東の山嶽

本州の山岳、東北地方(舊の所謂奥羽)を縦斷するもの、北上川に沿へる北上山脈と、阿武隈河口より隆起する阿武隈山脈あるは、前に述べたる如くなれど、阿武隈山脈は實は北上山脈の餘波、再び隆起したるものにして、二山脈いづれも東海岸に沿ひて縦走す、即ち陸奥八戸川の南岸より起り、仙人峠の險をこえ、玉頭山、早池峰(この山脈中の最高峰にして六千二百餘尺)五葉山(五千六百尺)愛染山、室根山等の峻嶺蜿蜒と

して、深谷を刻み、花崗岩その他の古火成岩、迸發して大岩瘤を作る、殊に最も大源を下瞰する大觀あるは、北上山脈にして、阿武隈は之に比すれば、山の高度僅に其半に達するのみ、然れども矢大巨山、赤井岳等の名山を有して、八溝山を起し、常陸の加波山、及び筑波山に終りて、人に指目せらる、近畿の山脈は低卑なれども、歴史を以て名ある如く、この阿武隈山脈亦平野に駱駝の背の如く隆起するを以て、たとひ低山相を呈するに過ぎざるも、平原に近くして、輒ち目標となる便宜を有し、その名ために著はる、最南端なる八溝山(低くして山と言ふ可らざるも、盤城、下野、常陸三國の境界に屏立す)、筑波山の如きは是れなり。

然れども、東北山脈の峻嶺雄大なるは、實に火山の勃發起に在り、即ち樺太山系中の巨人は、千島にあらず、北海道にあらず、この東北を中原として、雄渾悲壯の地文を揮ひ、老木清霜、その山野に針立し、鴻鴈の秋をこゝに代表す、所謂朔北の雲、片々冷峭なるは、これらの山岳に冠らざれたるときにあり、謂ふところの火山脈は二の并行線を引いて、北は津輕海峽より、南は關東平原、及び中央日本まで、豪氣堂々向ふところ前なく奔走す。



一は那須山脈にして、北海道の稔烈なる火山、恵山駒ヶ嶽の餘脈、津輕海峡を涉りて本土の極北なる青森灣頭に恐山を起し、八甲田山に列なるや、凹形灣の南東、扁平の圓錐體を凸起し、浮石より成れる噴瀾の杉澤原を控へて、兀々然碧空に挿む、頂上は八峰に分岐し、その中に安山岩質集塊岩より成れる火孔壁數個あり、最高頂を釜伏山といふ(五千一百五十一尺)完全摺鉢形の、噴火孔を伏せたるによりて、此名あり。八甲田山、戸來岳、十和田岳、赤倉山等の峩々雲漢を摩し、森林翠蔚せる高原地に、海拔四百五十米突の十和田湖を滙す、沿岸屈曲、故に湖名を「十灣曲」に作るにあり、四周は削るが如き斷崖にして、噴火岩の累層より成る、水殊に晶明、玻透、是より七時雨山、森吉山等を経て、焼山群山と共に諸山脈、岩手山に輻湊するや、頓に六千九百尺の高峰となり、完美なる截頭圓錐形を成せるを以て、南部富士、又岩手富士の稱あり、山は東岩手、西岩手の二峰に岐れ、東岩手の「焼ヶ走り」は、熔岩流にして虎皮斑紋の如き皺波を引き、山麓に及ぶまで、一木を生ぜず、那須火山脈中、日光山麓を除いて之に匹敵する峻高なし、駒ヶ嶽(火口壁中、男嶽女嶽の二圓錐山、相抱きて双立す)藏王嶽(銀蛇の如き阿武隈河系と、銀盤の如き太平洋を下瞰す)より、吾妻山盤

梯山(會津盤梯山は寶の山と徑に黄金が生り下る、俗謠)の如き、近來殊に著名なる双活火山を起し、南に向ひて本山脈の主盟那須火山に列貢す。那須火山の地たる、南は高原、日光、赤城、榛名の諸火山を連絡し、北は鎌房山、旭山、大白森、二股山等と接し、安達太郎山を経て、吾妻火山に繋がれ、その中央に白座せる茶臼山は、盛に硫烟を吐き、裾は長く南東に延び、野州の北部を包括する大平野、那須野ヶ原を作る、土質黃褐色にして、火山灰質を帯び、檜、樺、時に或は稚松幼杉を交へたる野草茫々の大荒原、雉啼き、馬嘶き、轉ろに金槐集の將軍が「武士の矢並つくらう小手の上に蔽たばしる那須の篠原」の豪吟を想はしむ、高原火山(鹽原温泉の在るところ)日光火山、その背に稜線纏繞し、殊に日光男體山となりては八千餘尺、雲を截り天に擡し、關東以北の唯一名山、唯一高山となる。竟に上毛の平野に延亘して、赤城山となるや、楕圓形の外輪山を屏とし、曲玉形の赤城湖を抱く、隣りて榛名山あり、完全圓錐形の山にして、不二の八合目より以上を截り去り、並載するに幾多群峰を以てせるが如く、其中央に聖座せる伊香保富士、大ならすと雖も、秀美なる圓錐形を成し、頂上東向して缺けたる馬蹄形の火口を穿ち、火



口壁の北縁最も峻なり、山下に楕圓形の伊香保沼(榛名湖)あり、風光絶美、赤城と榛名と、共に廣漠たる關東平原に立つを以て、人の視線に上ること多し。

是より草津、白根、四阿山等を列ねて淺間山に結節す。

那須火山の、斯の如く一文字に、本州東北の中央を蝕して南下するや、その裏面に當り、本州内面(日本海に向へるところ)に循ひて、群峰嵯峨突兀、半は天に入り、半は海に春ける一蛇の山脈あり、則ち

一 鳥海火山脈にして、陸奥山嶽の重鎮、岩木山より祖發す、岩木山は海拔五千二百有餘尺、輝石安山岩の岩溪に沿ひて、絶巔に到れば、東方に八甲田、赤倉の諸火山峙ち、北方遙に北海道を望み、南方岩木川の全溪を下瞰し、西方荒蕩たる日本海を睥睨す、眺望豁達、四周比隣なし、乃ち鳥海山に到る、この山脈第一の高山、北、羽後地方より遠望すれば、端巖なる圓錐形を成せども、南、羽前よりは臥牛の鈍角を作る、最高峰を新山と稱し、全羽を眼下に萃め、西は渺茫たる日本海に盡く、新山を環りて夏も白雪皚々たる千蛇池の大谿谷あり、内側に急峻にして、外側に緩斜せる外輪山峭立す、舊噴火口に鳥海湖あり、東北火山中の第一名山は、この山を措いて何かあらむ。

麻刈りて鳥海山に雲もなし

子規

鳥海山より月山に列なる、羽黒山、湯殿山と併せて三山と稱すれども、月山は一大消火山、湯殿山は谿間の一丘、羽黒山、亦山麓の一丘陵にして、決して三山鼎立せるにあらず、月山は、裾野にして既に日本海の浩濤を瞰る、中腹傾斜、緩慢なる芒原、最高點は六千有餘尺、崩壞して火口壁の痕跡を認められず、夕景朝暾の觀望絶壯にして、岩代の吾妻、朝日岳、陸前の藏王、駒ヶ岳、歴々指すべく、鳥海山とは面々對座して、其肩を拊つべし。

これより越後の境上に入りて朝日岳、地藏岳、飯豊山となり、岩代越後堺に烏帽子岳、御神樂岳、淺草山、六十里越の高嶺を突起し、會津高原の西南端より、那須山脈に合す。

凡そ鳥海山脈の蜿蜒する間、能代、御物、最上の三流に横断せられ、殊に最上川斷層線は、日本海方面より吹來する風の衝地に當るを以て、尾花澤谷の如きは、日本第一の積雪地となり、其他の諸山嶽秋末よりは厚く氷鎧を被りて、白光爛々たり、只だ件の斷層のために、那須山脈に比して、連嶺の形を缺くのみ。



東北二脈の火山、悉く淺間山に結節するや、淺間山雲煙を吐いて、湧騰浮沈、天外に白蛇を奔らし、その下、上毛の平野、瀾望際涯なく、尾花の波、水平線を作りて浮標の如き赤城榛名や、秩父山塊を揺かす、日暮れて路遠きや、彷徨の行客をして嗟嘆いたつらに立つや淺間の夕けより

里とひかぬるをちこちの山

雅 經

の感あらしむ。

一團の皎月、尾花より出て、尾花に入るといふ所謂武藏野平原を隔て、阿武隈山脈の極南端なる筑波と相對峙する山に、關東山脈あり、幾多駢頭掉尾の碧蛇を並行線狀に天外に走らす、即ち武藏相摸の堺、霜葉と古刹とを以て名ある高尾山に起り、甲州街道の絶嶮小佛峠より三國嶽(甲、武、相三國の堺に卓立す)となり、佐野嶺を経て突兀たる大菩薩嶺に接ぎ、天目山笹子峠より、甲府平原に達す、之に次いで多摩の清流に大人の姿を鑑する御嶽、大嶽に起り、寂寥荒涼の別天地に仙居する武州第一の高山彙、七石山、大雲取山、雁阪峠等となり、甲武信岳(甲、武、信三國の境界嶺)より甲斐に入り、國司岳、金峰山に至りて、峻嶒八千五百尺に至り、甲斐をして眞箇の「峽

中國ならしむ、その他秩父平原の南より、千隈川上流に終る一派、同じく神流川上流以北に存する一派の如き、いづれも小疣贅、言ふに足らず。關東山脈を屋梁として、その床なる平原地に人烟稠きは、神流川、荒川、多摩川、秋川の如き長谷、布を晒すが如く引き、交通に利便なるためにして、且つその石礫々、その水晶々、幾多の小紫山、小白嶺と映發して、好風景を作る、この山彙は實に幸福の山、歡樂の谷。

### 其三 中央大山系

本州の中部、即ち駿河、甲斐、信濃、飛驒、越後、越中に當れる區域は、實に日本山嶽中最高の屋棟を成せるところにして、いかなる山形の標本か、こゝに求めて獲られざるは、その國名已に山嶽的なり、則ち駿河は「迅流の溪谷」を意味し、甲斐は山の「峽」より來り、飛驒は山嶽の皺襞、衣の「ヒダ」を折るに似たるより唱へらるるといふを以て最も適當の解釋となすもの、如く、信濃は上古の國名科野にして、「しなのさ」を産する原野の謂なりともいひ、しなのさは菩提樹科に屬する落葉喬木にして、信濃の外、



日光、富士その他本州九州の山地、及び北海道に生ずる。或は階阪多ければなりともい(信濃名山の一なる、立科山は、階阪を垂直に立てたる如く、高峻なりといふ義)定説なければ、いづれにしても最も多く山岳に縁あるは疑ふ可らず。

斯の如き山地中の山地なるを以て、我皇の版圖、琉球の王子をして、「日の本の山の君とも見ゆるかなくもの上なる不二の高根は」と讃嘆せしめたる、日本一の富士山、これに聖座を築き、南北兩日本に臨御す、其高サ一萬二千有尺といへど、太平洋床のツラカローラ深海底より測れば遙かに、四萬尺以上に達すべく、デーナ氏説くところの、山脈高さは海洋に面すの語、人を欺かざるを知る、日本海に面せる越中立山の峻拔せる、亦同位置に在るが故ならむ、不二を中心として、其東西を望むに、東には丘陵以上の山勢なく、西には赤石山脈の如き、突兀天を衝ける危峰、蜿蜒して雲級圖の如く、遠くより不二を包圍するの状を作す、甲斐山嶽の豪宕恠癡なる、實にこの山脈あるがためなり(甲斐山嶽論参照)若し夫れ中央日本の大山系に至りては、余嘗て「日本の高山深谿」を草し、中に不二山より、信飛境上の山嶽に言及せり、左に其一節を録す。

日本は山國であるといふことは、誰も知つてゐるが、我々人類が住んでゐる都邑が、

地學者の所謂洪積、もしくは沖積層地で、山嶽とは稍や遠かつてゐるために(併し日本では十五里と隔たつてゐるのは稀である。)山といふと、他所の國の話でも聞くやうであるのは遺憾である。今暫く山と照徹するために、本邦の平原を持つて來てお話をすると、例へば東京の在るところは武蔵野であつて、武蔵野は、平原としては、日本で廣袤の大を以て稱せられてゐる、關東平原なるもの、一部である、併し此關東平原が、いかばかり平原的地貌を成してゐるかといふに、早い話が、今の所謂東京市を少し、出外れて、澁谷へでも目黒へでも往つてみると、瘤のやうな、或は惹政のやうな丘陵が、せましく起伏連亘して波を畝ねらしてゐるやうであるから、支那人の所謂「野曠天低」といふ景色は、到底日本では先づ見られないのである。

關東平原に亞ぐ濃尾平原、信濃川平原、亦皆然りて、本土を離れた北海道の石狩川平原あたりの方が、却て平原らしい傍がある位である。之を歐米に見れば、その反對に英國は北部を除くの外に山と名づくべきものはなく、歐洲の央にはアルプス大山系が横断して、諸國に亘つてゐるが、單に一國一國に就て論ずれば、瑞西以北の外には、山嶽國と稱すべきものは皆無である、現に佛蘭西の如きは火山もなく、從



つて地震もないから、學齡兒童に地震の何物たるかを理解させるに、頗る困難であるといふことである。殊に米國の秋の如きは、一望無涯に、曠漠とした原野が多く、汽車で三日も四日もかゝつて走つても、農産物は到るところ黄雲稷々といふほどに熟つて、宛ら黄海のやうな觀がある、さればルイジニヤ州から來た人の話によると、八十歳になる老爺で、今までの生涯に、山を知らないといふのがあつた。日本では正に之に反してゐる、六七年前、國民英學會の磯部彌一郎氏が、何かに書かれた甲斐紀行(英文)に據ると同氏が御嶽の昇仙峽で、嚮導を托した小兒は、海といふことが解らなかつた、説明に骨を折らされた揚句に、件の童は傍に激奔してゐる、荒川(しかも此邊は上流であるから、幅は僅に五六尺許)を指して、これより最つと大きいかと聞き返されたので、氏は呆れて口を噤んだといふ話があつたと記憶してゐる。日本は狭くて長い國である代りに幅員を測ると、最も淵いと言はれてゐる本州中部ですら、六十里とは無いところだ、現に此童の生國なる甲斐の如きは、富士川を十八里(歐澤から起算して)も下ると、直ぐ岩淵から海へ出るではないか、しかも猶斯の如しとすれば、いかに山嶽のために、人文の發達が妨げられてゐるかと思はれる。

る、さういふと山嶽は無用有害の天然的長城であるかといふと、決して一概にさう言ふたものではない、山が有形上無形上いかばかり、人間と交渉するところが在るかといふことに就いては、一朝一夕に論じ盡せるものではないが、余か茲に語らむとするところは、一般に山嶽に關する趣味を喚起したい爲めである、何となれば假令山が無用にしろ、有害にせよ、邪魔だからといつて鉛筆畫のやうに、ゴムで擦り消して了ふわけには往かぬから、既に存在してゐる以上は、存在を一個の存在として研究するのが、人間として取るべき最善の方法であらうと思ふ、何物の研究か趣味を有せずして、成立たう。

有體にいへば、余は自然の崇拜者であるが、殊に山嶽の讚美者たることに於ては、何人の後にも落ちないつもりである、ラスキンは『山は自然の景色の初めにして又終なり』といつたが、日本に有りて殊に然りである、手近い話が關東平原の筑波山、東海道の富士山、京都の比叡山、大小高低の差はあるが、皆これ「始」であつて「終」である、「最小數」であつて「最大數」である、前に甲斐の話が出たが、甲斐の梶原武田信玄が、武將でありながら、戰國時代第一の詩人であつたり、駿河の弱主今川氏



異が、蹴鞠詠歌に耽つたりしたところは、當時の屠牛兒的野蠻武士の間に立つて、著るしい特色といはなければならぬ、而してこれは秀麗なる富士山が、冥々の間に、猛き武夫を感化したものであらうと思ふのである。

吁、山嶽々々、外皮をのみ山と思ふ勿れ、皮膚の中に誠の人間がある如く、山の外皮に包まれて實の山嶽が在る、これほど趣味ある好題目、これほど意味の深い謎を、山國民たる日本人が、何故解釋をせぬのであらう、それは登山をせぬから解釋が出来ぬのだ。

余は青年諸士の旅行には、是非とも登山を勧めする、同じ登るなら、成るべく高山を擇ぶことだ、或は深山が一層宜いかも知れぬ、高山と深山とは讀んで字の如く違ふのであるから、區別しなくてはならぬ。例へば富士山は高山であるが、山は淺い、戸隠山などは低山であるが、山は存外深い、勿論高低深淺といふのは、比較上の話であるから人によつて各所見を異にするであらうが、要するに群を離れて索居してゐる山、例へば富士山（柴野栗山句あり、曰く『獨立原無競、自爲衆壑宗』と、々々十字、富士を讃して遺憾なしである。）筑波山の如きは、淺い山で、山又山と横束

錯綜してゐる山は、たとひ低くとも概して深いのである、本邦でいへば高山にして且深山を兼ねてゐるものは、甲斐、信濃、飛騨、越中、越後等、日本の中央に蟠屈してゐる大山系であらう、この中から一萬尺以上の名山を列擧すると、白峯、赤石山、穂高山、乗鞍嶽、御嶽、鎗ヶ嶽、大天井嶽、常念嶽等、いづれも山嶽中の横網なり、大關なりで、宵漢を衝いて仁王立ちに屹然として、四周を睥睨してゐるところは、何人か之を仰いで、その威嚴に眩かすにゐられやう。

中央大山系の研究に興味あるは、以上の如きものあり、尙ほ進むて之を語らむか。抑も山とは何ぞ、山とは總して地面より著るしく、凸起せる部分を指すものなれど、富士の如く孤立索居せるものあり、或は一區域に團欒して、山の城廓を繞ぐらせるものあり、同じく中央大山系なる妙高火山彙の如きは是れなり、孤立にあらず、離群にあらず、延亘數十里、鐵幕を蒼昊に翻反して、江垂波の如く、處々に鋸齒状の山稜を尖らせたものあり、北米のシエラ、チバダの如きは是れにして、我が信飛越（中、後）に蟠踞せる中央大山系、實に之に當る、延長百哩、山の貌に於て、高度に於て、位置に於て、本邦山嶽探險家なるウェストン氏は、之をシエラ、チヴァダに比較せり、或



は、その日本アルプスと呼ばれる、所以は、單に長帶と高頭とのみに止まらず、地層の構造亦多變を究め、異層累疊、褶曲亦劇甚にして、傾斜も頗る急峻に、片麻岩、玢岩、石灰岩等、崖嶋たる高山多く、又氷河の遺跡分明なるあり、宛として亞爾伯型を天造するを以ての故にあらずや。況んや加ふるに、磊落たる火山岩を以てせるをや。左に序を遂うて、この系に列籍の名山を擧げむ。

日本總山嶽統帥の天授を佩べる不二山は、日本名山中の代表的名山として、(天つ日の照らせる四方の國中にたぐひなしといふ山は不二の根、伴蒿巖)樺太崑崙兩大山系を交綏せしめたる天地間の大調和者として、五千載の間大和民族に彫むことを教へ、畫くことを教へ、謠ふことを教へたる、美神として、日本文學の淵源となれるは、アルプス山が全歐に於けるよりも密接の關係を有し、且つ世界的名山の列に入れるは、全日本ひとりこの山を推し、その狀恰も無始の始より無終の終まで、天地の軸として存在する如く、摸範的秀美端嚴の圓錐形を作して、本土の中央に屹立し、本土最高最崇の聖壇を築けり、詩人北村透谷銘して曰く

流轉の力汝に迫らず

無常の權汝を襲はず

自由汝と共にあり

國家汝と與に樹てり

げに富士は「不朽」の當體なり、「永劫」の具象なり、赤石系、木曾山脈、飛驒山脈は、その西側に重厚なる複線を引いて、鐵壁の如く固く、俯下の富士裂帶域内には、丹澤山脈(相模丹澤山を中心として、大山、塔ヶ嶽等海拔五千尺に迫る、いづれも相州無二の名山、東海道の鐵路藤澤より、松田に到るまでの間、悉くこの山嶽を仰ぎ得)御阪天守の兩山脈を、赤子の如く膝下に繞ぐらし、信濃の千曲川と犀川との間に蜿蜒する幾多の小漢子を脚甲に載せ、己は太平洋の銀盤に象箴せる伊豆の青螺を連環に貫ぬきて、南伊豆の天城山に起り、箱根群山及び愛鷹アノガを從へ、茅ヶ嶽を経て甲信境の八ヶ嶽(最高赤嶽、赭丹色なる熔岩の累層を露はせるを以て、此名あり、峻秀殆んと三千米突に迫る、一帯の座積廣大にして、岬々たる外輪山、半圓形を成して連障を立て、針葉樹林その中腹を覆へり、數個の火口あれど、大方は崩壞して原形を存せず、實に甲信共有の一大名山なり)立科山(一見完美なる圓錐形を成し、諏訪富士の稱あれど、實は圓顛形の峯上に、小圓錐形を戴きたる二重火山、淺間山と拮抗して、東信の風景を代表す)となり、淺間を招いて信越境の燒山群山まで貫ぬき、南北兩日本を爪



分す。

淺間山は、古來不二と並稱せられたる名山、環らすに二の外輪山を以てす、第一次の火口壁なる牙山ハツメケを破り、第二次の火口壁なる前掛山を劈いて、その後峭立し、白烟亂騰せる噴孔ハツメケの完全なる圓形を作せるあり、その東南山側を無間谷といひ、淺間東部の山腹に擡起せる一小側火山を小淺間と稱す、噴孔は東北壁半缺して、甚だ低きを以て、西側の嶮上より火口底を俯瞰するを得、火口底は略ぼ平坦にして、灼熱熔岩を以て充たすこと、爐中の炭火の如し。

この山、兩毛の平地より、信濃の山嶽地より、兩面を仰視せられ、水平線と垂直線の交叉點を成すが如くして特立す、何物の山も、その威嚴に面を向けざるなり。

淺間と千曲とを除き去らば、東信の風景は、殆ど皆無といふも誣言にあらじ、今回の遊や、僅に一周日、春夏の淺間素より見ず、然も往復に、其腰を繞り、裾野を上下し、或は黄はめる落葉松の間より覗き、山驛の朝霧の絶間に眺め、或は其ラッアアの一塊も、十里を隔てて明かによまるとして、晴渡りたる日に、淡蒼色の無淨ケイロク天霧テンキもて包める如き、其山の鮮あざやかに、秋空に浮ひ出て、煙も立つとは見えて、たゞ

書ける様なるを望み、また所謂淺間風あまのりの烈き日には、山怒つて吐く萬丈の煙、沸々と渦まき出るまゝに、氣隨の風に吹捲まされて、右に振れ、左に流れ、従つて吐き、従つて靡き、果は行く々々吹きさらされて、片々飛んで須臾に滿天の雲となるを眺め、或はまた夕陽山を射て、山は血の如く、煙は金色の狼煙おのろしを大空にあぐる夕、吾影を踏みて、麓の小田の稻塚の側に立ちつゝ、日の傾くまゝに、濃き桔梗色の蔭の、山に湧き出て、次第に夕陽の領を蝕み行けば、夕日は谷より岨に逃れ、峯の一角に縮まり、細り細りて、果は蒼然と暮れ了るを望み、望む毎に、見る毎に、愈よ山に靈ありと思ひしに、今日はまたうつとりと笑めるが如き、其山容を望みて、愛の骨に入るを覺へ、かく心に叫びぬ。

あゝ爾、信州の東門を鎮する淺間の山歟、偉丈夫たけぢやうの山よ。(徳富蘆花)

淺間山に對する萬人の感情は、皆是れ、美はしく讚美し得たる哉。

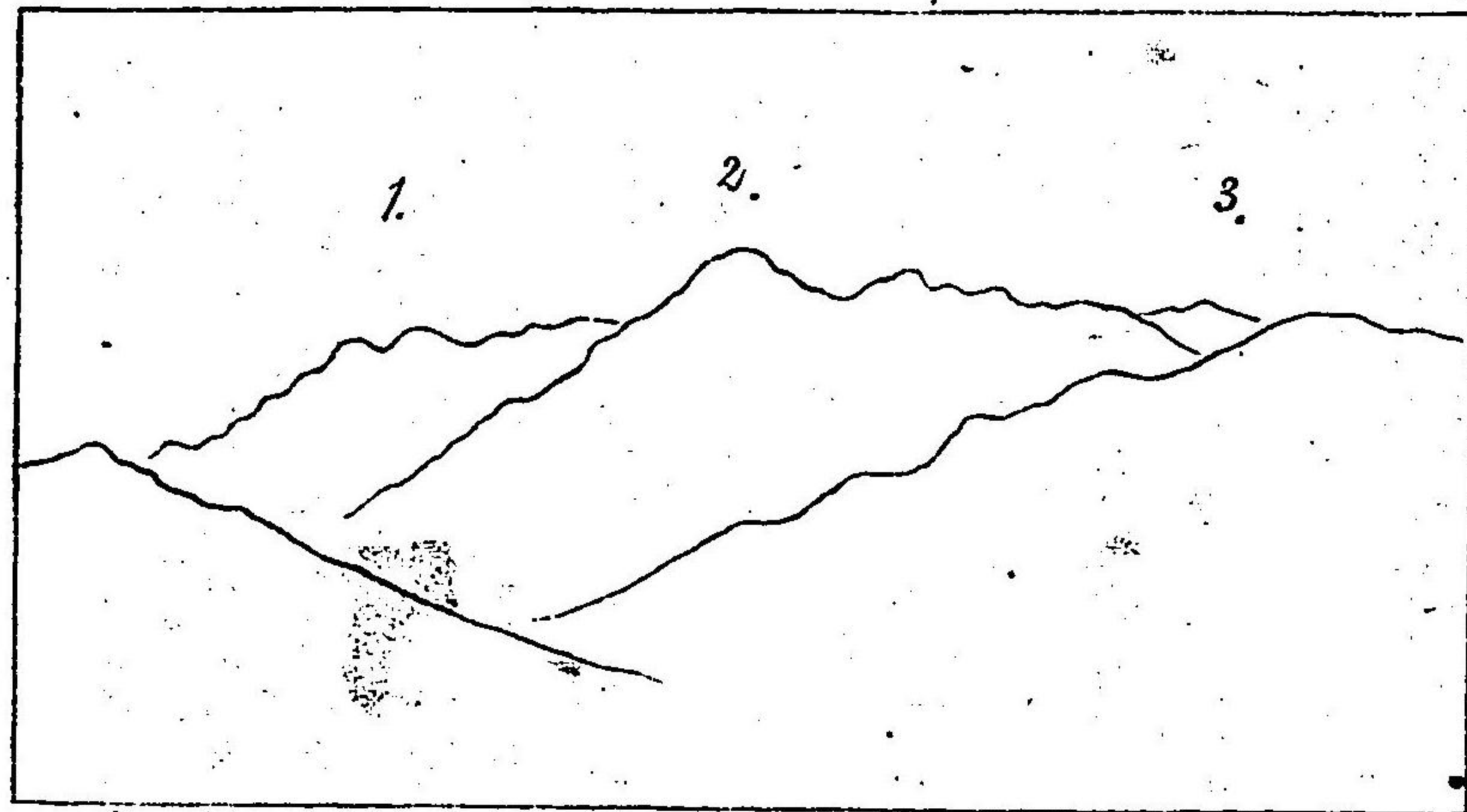
不二より東、南、北の三方山嶽は、以上の叙述を以て足れりとせむ。

その西の三山系中、峻秀獨歩の

一を赤石山系となす、三河の齋巢、本宮、遠江の大日、秋葉諸山を兀立し、青崩峠



圖 一 第



山石赤(3)岳ケ駒斐甲(2)壁絶(1) 州伊那 赤石山系を望む

に至るまで、多くは海道第一の險流、天龍川に沿ひ、峻峰高嶺七十度の急斜角を作すものあり、老杉大空に聳立し、千尺の高雲を貫いて、大瀑を飛ばし、青崩峙の山頂、信州高山大岳の頭臚を撫す、竟に池口岳、大無間山より赤石の峻峰となるや、海拔實に一萬百尺、天龍大井の二大峽谷を分割し(山頂に登るには、脚下の小澁川を十餘回も涉り、少くとも雨夜は、澁淵に露臥する覺悟あるを要す)、日本の中央山系を一目に瞰る、豪壯無比「雲鎖縹露數峰青」(小畑詩山、赤石山中の詩)は、この常住雲霧變幻する靈山の實況なり。

この山の別系、身延山七面山より、海拔一

萬二百尺、赤石の主峰を凌げる白峰シラネとなり、群峰突兀、巖々雲漢に衝き入り、一萬尺に近き甲斐駒ヶ嶽に至り、諏訪湖邊に盡く。(別章「甲斐山嶽論」參照)

一 若しそれ木曾山脈に至りては、天龍川の上流を隔てて、赤石山脈に並行し、他の一方は木曾川に挟まれ、長鬣を振つて駿走せる木曾駒ヶ嶽(ふりつもる雪に月毛の駒ヶ嶽ゆき來に雲の乗らぬ日ぞなき、古歌)を主峰として、風越山、美濃の最高山恵那山(七千尺)を起し、阿加瀧山、矢落峰等となる、その山城は木曾街道の鳥居峠以南に起りて、美濃平原に至る。駒ヶ岳は三十六峰八千谷の稱ある大山にして、最も秀骨、最も美色、街道一の名山なり。

三 木曾山脈と相對して、高峻を競ひ、之を壓倒して、北の方越後海邊まで半天に跳躍轟放するものを、飛驒山脈となす、即ち信飛越境上に錯綜湊合せる吾が所謂中央大山系にして、この派に羅列せる大傑は、先づ御嶽(科野にはひら山あれどかしこきは神の御嶽の山にありけり、矢島敏堯)を推し、その北方に聳立せる乗鞍嶽(乗鞍突兀秀高原、馬首朝東勢欲奔、何術憑之時願所、揚鞭一躍至天關、小室屈山)之と伯仲す、共に火山の二雄にして、草木鏘鏘を幸へる大禍津の五十猛神の住むところ、一幅屈折



の木曾溪を活かすは、御嶽にして、飛騨高原に君臨するは乗鞍嶽なり、二山共に絶巔に火口湖あり、淨水を象徴す、乗鞍一帯の惟山、飛躍狼藉して鍋冠山、霞澤山（別名明神嶽）焼嶽、蝶ヶ嶽等、夏も雪白兀爾、晶々として天外に尖れり。

中央大山脈は鋸齒狀に聳えて、四塞のために鐵より堅牢なる繩を匝ぐらしたるもの、曰く鍋冠山、曰く霞澤山、曰く焼嶽、或ものは緑の莢を破りて長く、或ものは紫の穂に出て高きが中に、殊に焼嶽（この山の頂には硫氣孔ありて、熾に烟を噴くと云ふ）は、常春藤の繞纏せる三角塔の如く、黄昏は、はや寂滅を伴ひて、見る影薄き中に屹立し、照り添ふ夕日に鮮やかに、その破断口の鋭角を成せるところを琥珀色に染め、山腹以下に屯む積層雲に、沈まむとしては、昂々然として、又半肩を掻く、初めは焼嶽を指して、乗鞍と誤認したるほどなりき、乗鞍に至りては、久しき離別の後に、會合したる山なり、今日大野川に見て、今こゝに仰ぐ、帽を振りて久濶を叫びしが、峯飛びて露感する今も、山の峻峭依然として『余の往くところ巨人在り焉』（My Giant Goes wherever I go）と、そとろに人意を強うせしめぬ、幸ひに縦まなる貪婪を許せ、余は乗鞍の懐つか

しき山容を觀する毎に、自己の山なるが如き感を遏め能はざること、猶深夜獨行の人が、天地を自己の領と思ふがごとく然るなり。（拙作『鎗ヶ嶽紀行』）

この一群中に卓絶せるを、鎗ヶ嶽となす、その蠱々として鋭く尖れるところ、一穂の寒劍、晃々天を削る如く、千山萬岳鐵桶を圍繞せる中に、一肩を高く抽き、頭に危石あり、脚に迅湍あり、天柱屹として揺がず、洵に唐人の山水畫、威武遠く富士に迫れども、大靈の鍾まるところ、謙りて之を凌がず、萬山富士には其徳を敬し、鎗ヶ嶽には其威を畏る。

絶巔躡石喚奇哉

雲劈青山面々開

最是槍峯描不得

尖頭直貫碧天來

小室 屈 山

この附近に在りて、大天井嶽、常念嶽、跌宕峻拔、四周に山もなげに傲兀す、その絶頂の如き、不斷の純白雪に洗はれて瑩然たり、殊に山勢最も偉大なるは、わたつみの神のみすゑのあと問はゞ

穂高か嶽にありとこたへん

河内 直 武

と敬虔せられたる、穂高山にして



圖



(りな嶽ヶ館の尺千一萬一はるせ起尖に山背後の山端右)

館ヶ嶽と臂を把つて、中州に傲睨せる穂高山、夕の空は露れて水の如く、しか

二 第



景) む望をろせ走縦綿連の系山大央中本日りよ岳ヶ念常

今にも軒に落ちかゝらむずる此巨人は、海拔一萬一千五百四十三尺と測られて、



も蒼色より水色に、猫眼石の如く次第に變化するや、夕の色は冷色なれば、何物も目より退くる如く見ゆ、それかあらぬか、蒼海原（そらうみはら）より澄みわたりたる虚空に涵れる、這箇の大瑠璃山は、一秒毎に二三寸づつ、我より遠ざかりて、しかも森嚴なる尖銳點は、半空暮靄の水平線を突破したり。

黄昏の眼には、確に見解けられざりしが、山の大躰（たい）心臓形なる五個の大塊より成り、その頭は孰れも鋸齒狀に尖りて、錯出すれども、互層して半腹一に合するを以て、肩胛はいと潤く、鎗ヶ嶽の頂上の如く、切截鉛錐形に孤聳することなし、千山の冷たき土窟に醸されたる、新しぼりの八千溪水は、石に叫び木魂に響いて、山の麓なる梓川に落ち合ふなり、靜かなる夕を歌はんがために、威力ある大君の前に舞はんがために。

この夕我れ河畔に立ち、瞬（まじ）きもせて、偉大なる穂高山を觀ず、我が脚を立つるの地は、接續より成れること、年代又年代を追へる歴史のそのの如くにして、歴史が巨人の紀念碑なる如く、地の最高最後の陽は山なりき。

げに山なりき、爾は兀々たる自然の大書籍なり、人に在りての書籍は聖書、地

に在りての書籍は爾にあらずや、我は假に爾をこゝに、「山」と呼ぶ、しかも爾の山なるは、その外皮のみ、爾が挾ある一木は王笏よりも尊く、爾が秘める一瓣の花は、天爵の榮あり、爾は高し、然れども爾の高さを測り得べきものは、三角術にあらずして、大なる聖靈ならずんばあらず、何となればバイロンも言ひけむ如く、高山は我に取りて絶大なる感情なるをや。

この夕、日は没して現界より他界に移る時、こゝに立てる一個の人影は、かしこに屹立せる一個巨人の影に壓せられ、屏風倒しに折り累なりて、大地に落つるとき、こゝに渾然融和して、我は天地の一部なる如く、山は我の一部なるが如し。

夜昏し、山は玻璃函中に秘められたる桔梗の大瓣の如くなりぬ、その玻璃愈よ厚さを加へぬ、吁混沌。

今や爾は垂死の聖徒の如く、失せなむとす、猶且爾の前に頭を掻ぐるものやある、匍伏せざる何物か存在、我今斯の如く絶叫す、爾いかなれば寂として聲なきや、しかも黙して爾を諦視するとき、我只蒼茫萬古の意を覺ゆ、吁爾は永劫



に活く。

恍惚は天授なる哉。

日は全く没して、星一つ二つ晃めくにつれて、遠近の山は脈拍し、全溪谷は鼓臙し、木立は瞬睫す、而して禽語はず、熊歩まず、栗鼠躍らず、一葉嘩かず、  
——吁森殿！穂高山麓縦七里の非人寰は、宛如として日本のヨセミテ溪谷なり。

以上の六名山、(御嶽乗鞍常念嶽大天井嶽槍ヶ嶽穂高山)海拔一萬一千尺を出入し、日本アルプス中、峻絶嶮絶の波線狀的鐵壁を張る。

笠ヶ岳、抜戸岳、北俣岳、五六岳、烏帽子岳となりて越中立山裏山越えの衝に當れる、針木峠となり、雪田を履むこと無數(但し雪田は、この附近の高山到るところ是れあり)近來氷河の遺跡を發見せられたる信越境の白馬ヶ岳に至るや、頂上附近の石室より、少しく信濃方面に下れば、大雪田を見、葱平チチカサヒラより急勾配をなして所謂白馬の大川渡しに至るまで、砂岩、粘板岩、蛇紋岩に歷落として氷河の擦痕を見る、白馬の北方より山稜を傳ひて、森殿なる尖銳點を見るは、越後の大蓮華山(殘雪や御法の不思議蓮華山、奇遇)日本海に近きを以て、氷雪を鏝ひ、白嵩の影、北溟に落つ、北陸人が

不二山よりも高さを誇稱せる立山は、この山と犄角して、安山岩地を劈破せる花崗岩を絶嶺とし、雄山、淨土山、別山の三峰白刃を砥ぐ、日本アルプス帯を一目に看る壯觀は、却つて不二に勝り、日本全國中山上の壯觀を、これに比ぶべきなし、『大海盆中瀉、群山杖底奔、乘風凌絶頂、夜半見朝暾』(片口江東)は眞に立山の詩也。

殊にこの山の地嶽谷噴火口は、全國中信濃の淺間山、肥後の阿蘇山と並びて、日本火山活力の大道場。

別に飛驒高原に、金剛堂山、天生嶺、龍ヶ峰、位山、川上岳、赤谷山等南北に趨走する小山(前記の大山嶽に比すれば)あり、山國急流の宮川、益田川、及び白川の間を、累々たる黒色に抹す。

立山より大蓮華、小蓮華諸山を経て、姫川谷を横絶し、越後湯の嶽、及び焼山火山群に連絡す、その姫川洞谷に沿ひて、天を衝いて矗々峭立せる山脈の天險は、大塚理學博士の

地圖を緋けば本邦中部は、山脈重疊として其錯雜なるを知べきが、此北邊に蜿颯する飛驒山脈は、信飛越の國境に至りて、大概海拔三千米突内外の秀峰、蟻



圖



む思みるせ伏起疊重の山

川洞谷より望めば、絶壁恰も數個の屏風を並列したる如く、北陸街道を通過す

三 第



連山立てに近附淵上中越

築して無人の區域を爲す、此山脈の形貌を、其西側越中平原より、或は東側姫



るもの、誰か其巖を嶄々たる秀峰に一驚せざるものなからむ、飛驒吉城郡有峰村以北、長二十里幅十里計の山間には、人屋更になく、唯立山温泉浴屋二軒あるのみ、山脈に並行して南北に貫通する黒部深谷より、殊に峻嶮、其上流に溯るに従ひて兩岩愈よ迫り、左右絶壁削るが如く、其雄壯峻拔なること、二個の屏風を並立せし如し、二十里の間に於て、之を徒渉するに便なる河底は、只だ信州大町より、立山に詣る間道一あるのみ、他は水急流にして、深淵多ければ、泳渉せむも容易に非ざるなり。

なる一文之を盡くせり。

焼山火山群に沓至せるもの、火打山、妙高山、黒姫山、飯綱山、戸隠山、斑尾山、高社山等あり、妙高戸隠共に二千四百米突以上の大嶽にして、北南に兩翼を張り、飯綱ヶ原の廣蕪なる裾野を裾に抱き、戸隠の裏山と稱せらるゝ最高點に、高妻山圓錐形を成して聳立す、(都には氷室たてまつるみな月もまた雪消をぬ戸隠の山、荒木田久老)その前山は剃刀の如き、稜々たる長壁を蜿蜒す、日本の火山集塊岩中、最大最長且最奇なるものなるべし、上州の妙義、讃岐小豆島の神懸(文人は寒霞溪と改字す)亦同質と

雖も、規模及ばず、眞に北信の荒山なり、妙高は神名山以下の外輪山に環られ、火口原の窪谷を隔て、中央火口丘を尖立し、太田切、小田切等の急瀬、外輪山を突破して裾野を走る、秀美なる二重圓錐形を現はす所以なり、その北に鬼ヶ城群山あり、その西方完全圓錐形を成し、頂上杯狀の噴口あり、且つ中腹より噴煙せるは焼山なり、飯綱山上の火口は辨す可らざるも、黒姫山は明らかに噴口壁趾を残し、内に火口丘小黒姫を兀起す、その一小火口湖を「峰の大池」と稱す。

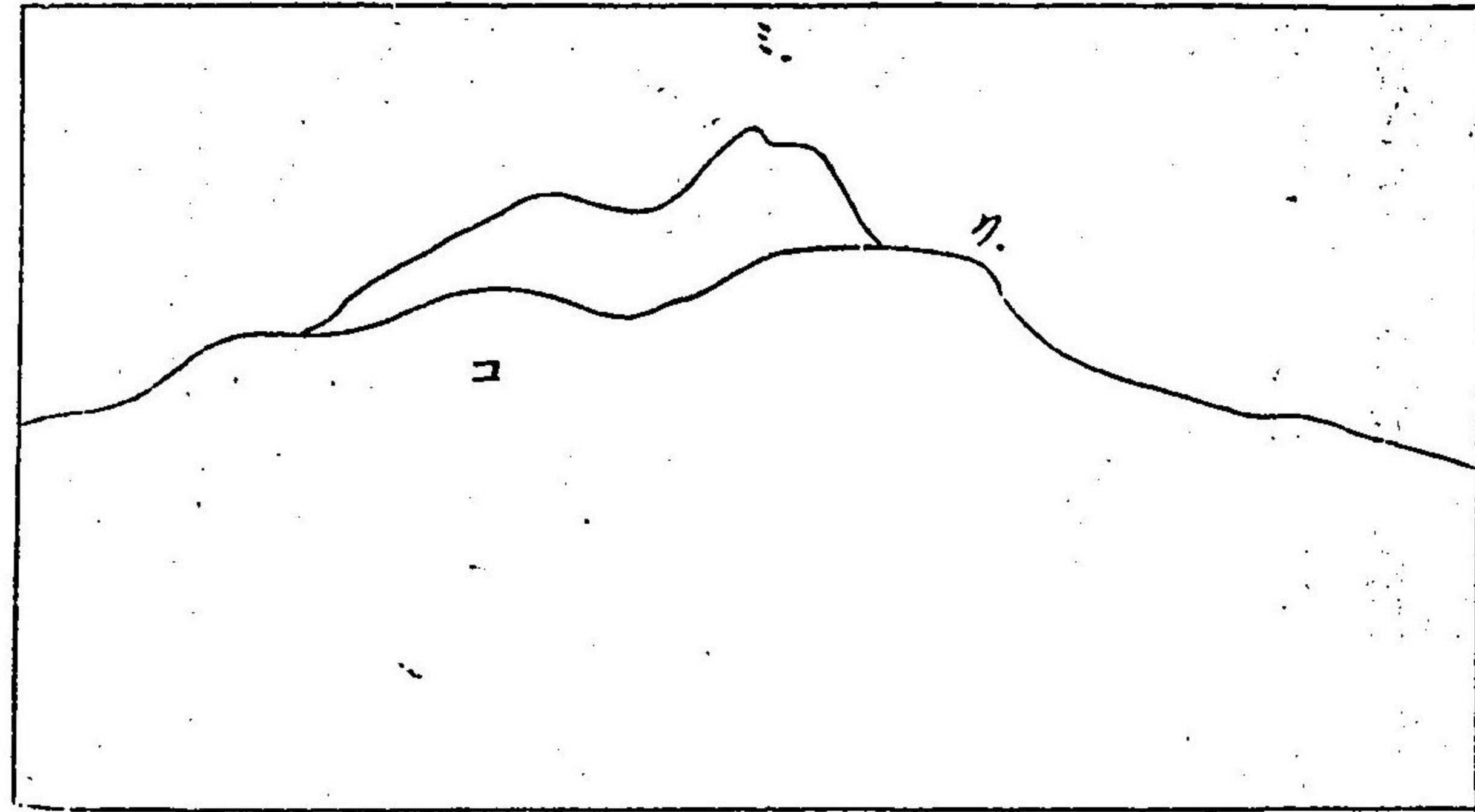
以上姫川谷及び松本平の一凹窪線を隔て、西方に連亘せる中央大山系の山岳は、日本最高の地域を作れるものにして、その中飛驒山脈は片麻岩を基礎とし、信濃山岳は第三紀層を貫ぬいて迸發せる新火山岩、個々特立す。

然れども中央大山系の壯嚴は、單にかくの如くにして終らず、

四 大山系を東に、濃飛高原を挟んで、西に對峙するものに、加賀白山あることを逸す可らず、蓋し白山々脈は、中國唯一の火山系にして、但馬、丹波、丹後より若狹を挟み多良嶽となり、越前以東嶺に高峻となりて特立し、越前飛驒の境にて、大日岳、經ヶ岳となり、白山實に射水川の西岸に霸王の威を稱す、その群山に北は野谷庄司馬



第 四 圖



望み山高妙い隔を山姫黒りよ頂山綱候 姫黒小(コ)山高妙(ミ)山姫黒(ク)

狩庄司、仙人窟、劔岳等、南は四海浪岳、高砂岳あり、絶頂は別山、大汝岳、御前嶽に三岐し、御前嶽最高にして、九千尺に迫り、萬葉以來二千年の名山にして、室鳩巢は「白山天下之名山也」と唱破し、漫遊家にして醫師なり、文章家なる橋南溪は

白山は唯一峰にて、根張も大に、殊に四時白雪ありて、白玉を削れるがごとく、見るより目醒むる心地す。

と、真に然り、その「根張の大」は、加賀、飛騨、美濃、越前の境上に雲積し、峻嶺突兀として乗鞍嶽より望むに、正面相比抗する如く、立山より望むに、同じく正面に立ち、長揖して下らず、中央大山系中、北半

部の西に、殆んど同高度を標して複走す、その白きは日本海より來れる多量の水蒸氣と、朔風とを受けて、反撥する故にして、常に北陸全道の冬の代表者たり、白中更に濃白、故に「もしなへて山の白雪つもれども白きは越の白嶺なりけり」(通俊)と了解せらる、然れども相距ること僅に十里にして、西北一帯渺茫の大洋を控へ、山勢門の如く頑直して、北陸を横絶するを以て、いづこよりも仰がれ得べきため(但し山嶺は幾重の屋背にあるため、却つて遠方より見えず、畧ぼ圓錐富士形を成せり)最も早くより聖山視せられたるならむ。

白山脈一帯は中央日本を距ること頗る遠けれど、白山そのものは寧ろ中央大山系の副券として見るも亦可なり、特に之に列籍附記する所以也。

斯の如きは、中央山系の一端を視知するに足らずや、或は這の大山系中、一として雪線に入るものなく、一として氷河を現存せざるを以て、真個の高山たる資格に缺くるところありとなせども、これらのものは温度、降水量、緯度、海陸の關係により、異同あり、アルプス山は大約二千七百米突にして雪線中の物となり、氷河を存す、我が大山系、實に三千米突以上を以て、參差錯綜す、猶且雪線に入らず、氷河を存せざるは、



緯度上の位置即ち然るのみ、山低さがためにあらざるなり。  
中央大山系の偉大なること、彼が如くして、日本人却つて之を知らず、依然として比良比叡を説き、芳野高野を羨説し、山岳中の山岳を、徒に外人の研究に委して顧ず、吾人登山の快樂を他に領たむとするに焦急なるもの、その一向なる無感覺に憾みなきを得んや。

西條より松本街道を右に折れ、峠を二つ越えて潮澤に入り、谷川に沿ふて二里程下れば犀川の岸に出る、潮澤峠の絶頂より西に見ゆるは、信飛兩國の境であつて、是ぞ即ち日本國の脊骨である、若し京都の東山も山なれば、信濃の鎗ヶ嶽も山である、恰も平宗盛も日本人であれば、木曾の義仲も日本人であると同じである、然し鎗ヶ嶽と東山との別は、關東武士と公卿華族との別である、壯大威嚴、粧飾もなければ猜疑もない、位階もなければ勳章も有たない、天然有の儘の岩と、岩のやうなる心、只早く朝暾を受けて遅く落陽に接するまである。

然し鎗ヶ嶽は單獨でない、彼に隣りして蝶ヶ嶽もあれば、有明山もある、乗鞍

嶽もあれば、獅子ヶ嶽もある、皆一萬尺内外の英傑であつて、若し彼等の一人をして、中國近畿の地にあらしめば、大英雄大人物として仰がれるのである、彼等の中に、侏儒ビョウロは一人も居らない、小早川隆景、毛利元就的小策士は、中樞山脈の産物ではない、余は始めて此等の山に近いて、余の意を強うせしと同時に、日本の未來に就て、多くの希望を懐くに至つた。(内村鑑三氏「入信記」の一節)

中央大山系のために、氣を吐くこと萬丈、再び跋に代ふる所以なり。

附

### 甲斐山嶽論

總べての山嶽皆同じと視るは、猫の眼も能くするところなり。

信濃の山、飛驒の山、甲斐の山、山の名は異なれど、只だ同じき土塊あり、同じき岩石あり、同じき樹木ありと言ふなかれ、山は各自の容貌を具すること、猶人面の殊なるが如く、日出には紫衣を纏ひて蓮の光を放つかと見れば、夕照には焰に包まれて火



定寂滅の行者の如く、明月には大なる魂魄となりて、冷たく且つ遠く虚空に泛ぶよと見れば、閃電に銀の條を脈絡離合して、見る々々巨柱の如くに伸び、縦面的に天半を断ず、その他紅霞に、白雲に、風に雨に、一刻々々服装を更ゆるものは地上、獨りこの巨人あるのみ。

今若し夫れ、日本中部の崇嶺大岳は信濃と、飛驒の境に至りて、天の成せる鐵壁を針突く隙き間もなく立て列ね、飛禽なほ翼を旋へす長城を築くといへど、太平洋岸よりするときは、甲斐の山嶽を以て、先づその非人寰に入る門の、最も長且大なるものとなす。

かしこには天地の間、聖さもの唯我なりと宣るが如き不二の高嶺あり、我かつて不二山上の室泊りに寐めたる朝ぼらけ、西の方我に眺いて合掌するにも似たる阿羅漢たちは誰ぞやと觀するに、雲汨々として太虚を涵せる中に、浮鼈の背を露はせるものあり、金峯山なりといふ、佛手柑狀に掌を開いて、咄々天を指させるものは八ヶ嶽にあらざや、七八合目以上を徹けく出沒させて、黒髪を瑠璃の天流に洗ふか如きものと、年古りたる蛇に魂入りて、忽焉弓形にのたうつ狀を成すものと、蜿蜒逶迤して西天に横た

はれるは、白峰より鳳凰山駒ヶ嶽に列なれる大連嶺にやあらむ、初初以來の自然の健兒、いづれか、なまよみの甲斐の國土に生れざりける、宜へなり峽中の別稱。

よしや「一條官道坦如砥、屈指三句不見山」(榎本武揚氏の西伯利亞道中詩)の風象は、我が幅員狭長なる島國には見る可らざるにもせよ、今猶武蔵野の儂をとどめたる、平林田畴つゞきの關東平原をのみ見慣れたる人、一たび西に向ひて水石滄々たる多摩の急瀬を涉れば、先づ頭を壓してすつくと立つものは、武甲の山嶽にして、その重たき雙の扉は、小佛峠となり、笹子峠となりて、連綿亘走するを見るべし、左手に右手に之を排して紫匂ふ葡萄の野に到れば、是は之れ猶額大の甲府平原、北の方花崗の大山塊を推しひろげて喇叭狀に開かれたるものなりといへど、こゝに巢くふ五萬の生靈は、這個の巨人が臥榻の下を借りて、僅に野睡を容るゝのみ、四圍は皆雲を截つて高く、空を衝いて高く、天風を吐き出していやが上に高さ山のみ、さすが千古の梟雄武田機山公も、是れあるが爲めに、志を伸ばしえずして止みぬ、以下甲斐の山嶽に就きて、少しく地理的概念を語らんか。

日本を山嶽國と言ふは當れり、この山嶽國にぞ、り立つ神柱の、太く逞しきを、迎具



土の神知ろし召す火山といふも亦當れり、只だ甲斐に在りて獨り然らざるのみ。甲斐山嶽の主なる部分を代表するものは、花崗岩にして、峻阪傾斜の甚だしき地に土層を構成し、山嶽これに簇々として崛起し、重且厚なる波狀線を描く、波頭に鋭く尖れるものは、皆玉筍、黒風白雨、千萬年なるも、之を削る能はざるを奈何せむ。試に之を指點せむか、花崗岩の流布は北巨摩郡より東山梨西山梨を経て、東八代の四郡にも、宏版圖を有し、中巨摩南都留の二郡にも小脈を支出す、その東八代にあるものは、笹子峠の頂より御阪峠に劃られ、南都留にては山中湖南の汀趾より起りて、駿河より相模に入る、これらは孰れも小塊なれど、西山梨に在るものは相川大宮兩村に簇まり、北の方荒川を界して、帶那山の脈を又北へと趨れる草分衣を曳き、こゝにて東西に岐れ、西は北巨摩の東部に至りて海拔八千五百有尺の金峰山となり、大塊磊々落落、突兀として白を裂き、東に延びて奥仙丈ヶ嶽より國司ヶ嶽となり、金峰山と頤頤して寧ろ頭髻を高く雲外に抜くこと十丈、かくて猶東に繞りて萩原山、初鹿野山、天目山(あの山見れば思ひ出す、ちらが殿さま、あの山かげで討たれた。甲斐の俗語)となり、地勢少しく陵夷すれども、猶三千五百尺を下らず、列宿森嚴に峽中の分野に當る。

その北巨摩西部にあるものは、薬師ヶ嶽、地藏ヶ嶽となり、海拔孰れも八千餘尺、風嵐山に列なりて更に高さこと無慮九百尺を加へ、駒ヶ嶽に至りて雄峻幾んど一萬尺に迫り、仙丈ヶ嶽と鞍掛山とを兩腋に擁して、峰は何十と岐れ、白刃閃々迭に迎ふが如き佐狀をなして、霄漢を衝く、全國の花崗岩山中、信濃の鎗ヶ嶽、穂高山、常念ヶ嶽等の僅に之と鋒銜を競ひ得るのみにして、越の大連華山の崔嵬を以てするも、信の駒ヶ嶽の高崇を以てするも、到底その下風を拜せざる能はず。

かくの如く金峰山塊と駒ヶ嶽塊とは、甲斐の沃野を挟みて、東西に睥睨せる兩巨人にして、その屹立するや、幾んど六十度以上の角度を、風霜に鈍して、大屏風を連亘し、虚空の波その間を拍ち、年代の潮はその裾を噛みて流る、武田氏の覇圖もかくして烟の如く、茫々焉と失せ去ぬれど、愈よ高く愈よ不朽なるはこの草澤の英雄のみ。

火山岩に至りては、この國亦是なきにあらず、則ち北巨摩と南都留との二郡に離隔して出て、その大磊塊を北巨摩の入ヶ嶽となす、海拔凡そ九千一百尺、金峰山と駒ヶ嶽と相持して下らざる間に特立し、己れ敢へて北面王者の威を挾んで侮られず、その支脈に茅ヶ嶽金ヶ嶽あり、高からざるにあらずと雖も、嶄然出頭するに至らず、その他



東西山梨郡中の一小部分を占むるもの、如きは、殆ど道ふに足らず。只だ夫れ西の方、秩父岩より成れる白峰は、さすがに甲斐が根の名を負へる代表的名山にして、信濃の赤石山(大部分は古生層より成れる)と脊合せとなり、兩ながら一萬尺以上の高度を有して、巉岩峭壁半天に聳へ、怒濤仰いて尖起する状を呈するところ、不二の靈山に比して甫めて僅に卑さのみ、かの阿武隈北上山脈は素より、秩父の三峰などが山嶽の相貌次第に失せて、高原性に推移せむとするに比して、明らかに連嶺の趣を具し、しかも愈よ高峻なるは、まことに全國無雙の名山として、甲斐人士の誇となすに足る、かくの如く火山以外に多趣なる山貌に饒かなるところは、全國中甲斐を措いて他に匹を求むる可らず。

されば甲斐の山嶽を代表する色は、火山通有の赭にあらずして、白なり、白なるが故に氣は熱にあらずして冷に在り、冷たきが故に晶らかなり、晶かなるが故に之に衣髪する深緑蔭よ濃く、之に傘する碧霄愈よ鮮やかなり、かくて自然は山に白水晶を生じ、人は野に黒水晶を培ふ(支那詩人葡萄の異名を黒水晶と呼ぶ芭蕉句あり)「勝沼や馬士も葡萄を喰ひながら」我生れて四方の志ありといふにはあらねど、大八洲の高山大川を

跋渉すること茲に年あり、竊に意へらく、信濃最も山に富むが故に、山質と山形の標本をあつむるに宜く、飛驒は山最も高きが故に、山又山の屋根に登らむとするもの往くべく、甲斐に至りては火山以外に尤物を萃む、山の拗ね者は多く、此土に仙遊するが如し、只だ駿河を以て東海道に隔てられ、信濃を以て中仙道に遠かりたるが故に、古來交通の衝に當らず、これ江戸に近きにも係らず、世に閑却せられたる所以也、山を愛する者は、甲斐に遊ばん哉。

### 風流文人傳

山嶽國中の山嶽國なる飛驒は、そのあまりに山嶽國なる故を以て、古來文人の足跡を印することきはめて尠かりき、中に就きて最も鮮やかに現世に痕跡を存するものを指せば、曾我耐軒先生の遊歴ならんか、先生の『幽討餘録』二卷は、世に藉くこと必ずしも多からず、然れども曠世の碩儒にして、まことに山水州に入り、兀々として聳へたる自然の大卷、則山嶽を色讀して、一枝の筆力、能く天と地との楨杆たるに餘りあるを示したるもの、本邦にありては僅に徂徠先生が入峽の紀念品なる『風流使者記』と、



及び之に競ひ得べき彼の書とを存するのみ、余かつて飛驒高山に遊び、書肆平田氏より『幽討餘録』を借り、後その全文を謄寫して今猶家に存す、志賀矧川氏、亦本書中の益田川記を激賞して『眞個に神來の文翁死すとも此文や千古死せず』と言はれぬ。寥寥の小冊子なりと雖も實に本邦紀行文中の傑品なるを失ず、しかも先生の名や徂徠の彼が如くに知らるゝに比して、殆んど世に忘れらる、我れ竊かに先生の人と爲りを知らんと欲し、搜索甚だ努めたれども、先生は彼書の外に詩艸文艸を著はしたるのみ、傳記を補はむにはさばかり力あるものにあらず、僅に弟子石川鴻齋撰するところの五行足らずの漢文略傳を獲たるのみ、即ち之を骨子とし、余が狭き見聞を加へて、これに新に傳を立つ。

先生は遠州濱松水野氏の藩士也、名は景章、字は子明、儒者としての經歷は、初め昌平爰に入り、居ること數年なりしも、後に松崎謙堂を師として、學びたりと云ふに過ぎず、しかも先生は徂徠や白石の如き經世家にあらず、山陽や星巖の如き志士肌にあらず、純乎として純なる儒生也、書として讀まざるなく、讀むとして咀嚼せざるはなし、之を博覽強記と云はゞ、簡にして盡せども、その常套の形容語なるを以て、おそ

らくは人之れを重視せざらむ、しかも先生は確實にその人なりき。

先生はいかに博覽強記なりしか。

百家の書を涉獵して、究窮せずといふことなく、殊に史乘に詳しく、その三河の岡崎に寓するや、一貧骨に徹し、加ふるに所謂風來人なるを以て、初めは人に輕んぜられたれども、一たび膝を交へて語るものは、駭目して先生の學問該博に服せざるは無かりしと云ふ、岡崎に某素封家あり、經史に通曉せるを負ひて、倨傲人に下らず、先生近隣に帷を下して業を學徒に授くると聞き、瞋りておもへらく、多寡の知れたる村夫子、妄に人に師臨すること面憎くけれど、一日故らに恭やしく翁を迎え酒肴を出して饗應の半は、突如難問を累出し、一般世事に迂疎なる儒生の、却つて知らざるべき眼前卑近の些事に問題を提げ來れども、先生は對ふること流水の如く、之を堰き留むる危石は彼が掌中に在らざりし、彼竟に節を折つて心服し、先生のため徒弟を斡旋す、一たび先生に就けば、何人もその學を敬せざるはなかりき、抑も岡崎の城たる徳川氏創業の地なるが故に、永祿天正の頃より名ある武人を出したること、升量に堪へざれども、文を以て賑はしたるは、三百年間實にこの翁一人のみ、當時履を倒まにして先